
出会った貴方（達）は人外でした。

硯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出会った貴方（達）は人外でした。

【Nコード】

N1098N

【作者名】

硯

【あらすじ】

主人公、聖夢姫は、中学に入った頃、学校一の落ちこぼれと言われていた。だが、インドアなのに負けず嫌いな夢姫は、一年をかけて学校一の秀才に！

そして、超有名高校を受験しようと頑張った！ だが、受験日、乗るはずの電車に乗り遅れそうになり慌てて飛び込むと、そこは知らない場所で、現れたのはどう見ても人を喰いそうな怪獣……ビビりなのに女々しいこと（スカートとか）が嫌いな主人公が、怪獣なのに超絶美形ばかりが跋扈する世界にトリップ！【只今文章改善

【中！】

Prologue

私の家は、父も母も、超有名大学卒業。姉も兄も、超有名高校に通っている。

私は中学校に入った時から、ずっと落ちこぼれ落ちこぼれと言われってきた。

実際私の頭は悪かったし、そうになると成績も悪いわけだ。そのうち、私は学校一の落ちこぼれと呼ばれていた。

正直イラツときた。プライドが憤った。

そこで私は中学二年生になった時から、それはもう勉強勉強勉強を重ねに重ね、頭に知識をどんどんと詰め込んだ。

今までの失態を改めるかのように。

その結果、一年間かけて、私は学校一の落ちこぼれから、学校一の秀才へと片鱗を遂げたのだ！

そして、その反動からか、私は活字中毒となったのだが、それはまあいい。本を読むのはいいことだ。とてもいいことだ。

中学三年になった私は、ここからが私の輝かんバラ色人生の始まりや！ という風にやる気が出てきたので、超有名で中々入学できないという私立高校を受験することにした！

今まで私を笑っていたやつらを、今度は私が嘲笑ってやろう、と思ったからだ。

性格悪い？知ってる知ってる。

私が、今まで以上に勉学に励み、これ以上ないくらい知識をつけた。……多分。

そして、待ちに待った受験日当日。

参考書をじろじろと読んでいたせいか、受験会場行きの電車に乗り遅れそうになり、私は慌てて走った。

これに遅れたら、私のバラ色人生が……終わるッ！

なんとかギリッギリで乗り込み、ぜえぜえと荒い息を整える私。

だが、

「え」

電車に乗り込むと、そこは知らない場所でした。

ある有名な一文を元にして思いついた言葉が、私の頭を過った。

夢姫はうろつろと辺りを歩き回っても見たが、下手に歩いてクマとかに遭ったら最悪どころではないので大幅には動かなかった。動けなかった。

だが、この後夢姫はクマよりもずっと恐ろしいものに出会うこととなる。

叫び疲れて、思わずその場にへたり込んだ夢姫の背後から、ガサリという草を踏む音がした。

思わずビクウツと身体が震える。

夢姫は、学校などでは、クールだと勉強家だの言われているが、別にそういうわけではない。

むしろ真逆だ。

負けず嫌いだし、プライドは高いが、己の為ならけっこうпойポイと捨てられるし、正直自分以外はどうでもいいという気持ちもある。

よく学校でテストが返された時など、周りの友人から「夢姫ちゃんってなんでそんな頭いいのー？天才じゃん。いいなあ、少しその優秀な脳細胞わけてよ」と言われることがあったのだが、

ふざけるな、私がどれだけの苦勞をしてここまで昇り詰めたと思っっているんだ。

天才？私がどれだけ勉強したかわかってるのか？

毎晩毎晩、大量の数式や英作文を見て、泣きながら勉強して！

お前らにその苦勞がわかるのか？

お前らだって私が中学一年、二年の頃は散々私のことを陰で嘲笑っていたじゃないかよ。

そんなお前らに脳細胞分ける？

できたとしても絶対やらない。

と、言われる度に思っていたものだ。

夢姫がこんな性格になってしまったのは、有名中学、高校、大学

を成績トップで卒業し、現在も高校と大学の教師をしている母親と父親、そして、有名中学を受験し、高校でも成績トップの姉と兄のプレッシャーを受けてだろう。

夢姫は、“落ちこぼれ”と言われ続けて、母、父、姉、兄から、一步と言っより、100キロほど離れたところにいるということを経日感じていた。

言うならば、怖かったのだ、家族に拒絶されることが。

そのことが、夢姫を異常なほどの勉強の道へと奮い立たせ、本来ならば、青春を謳歌するはずの中学校生活の大半を勉強に費やしてしまったことへと繋がる。

まあ、つまり、回りくどい説明を省くと、人の5倍は臆病なのだ。つまりビビり。

雷は平気。テレビの手術のシーンなどのグロ系もまあ平気。

だが、ホラー映画、心霊現象特集、お化け屋敷、ジェットコースター、その他もろもろ…

気絶するほど無理だった。

しかも、夢姫は想像力というか妄想力豊かで、一度怖いことを想像してしまうと、その想像に顔が青ざめるほど怯えるのだ。

唯一救いなのは、夢姫に靈感などが全くないということだろうか。

なので、今も、幽霊は見えないから大丈夫、え、じゃあ今後ろにいろのなに？や、人かもしれないから大丈夫だよ、でも、万が一のことがありますよ？

そんなことを延々と繰り返しているうちに、全身に鳥肌が広がっていく。

やがて、夢姫は青くなつた唇を噛むと、自分のためにも、そして受験のためにも見なくては、という結論を出し、せめて、骨や内臓

が見えているようなゾンビや、血まみれの幽霊ではありませんように…と思いつつ、ゆっくり、恐る恐る後ろを見た。

そこで、夢姫がまず見たのは、大きなエメラルドグリーンの瞳。鷲の頭と大きな翼、凜々しい獅子の下半身。

そんな、恐ろしいを通り越して、ある種の美しさを感じられる姿を持つ怪獣の瞳に、

私は射抜かれていた。

2・Good-bye real(後書き)

誤字直しました。

教えてくれた方、ありがとうございます！

3・Griffon!?

「あああああああああああああああああああああッ
ッ」

夢姫は叫びながら、やはり、頭のどこかで“この怪獣どこかで見たことあるな”と言っている自分がいた。

荒い息遣いをしながら、その美しい怪獣から震える手と足を動かして必死に距離を取ると、この怪獣は確か、図書室で気まぐれに読んだ本に、どこかの王族の象徴として紋章に描かれていた怪獣と同じだということに気付いた。その本を読んだのは一年ほど前だが、確か、“グリフォン”だったか……？

まあ、そんなことは置いといて、
喰われるよな？私。

夢姫の口元は思わず引きつる。

大体、こんな怪獣には、人喰いだとかいう説があるだろう。

鷲と獅子という組み合わせは、確実に肉食だ。

死ぬ時は寿命か、穏やかに死にたいと願っているのだが、こんなわけのわからない場所で、わけのわからない怪獣に喰べられるなんてことになるうとは。

夢姫は怪獣に身体をバラバラにされて血を啜られている自分を想像した。

その想像に、吐き気と共に、血の気が引いていくのがわかった。

おちつけ夢姫！

まずは対処を……

「んなっ!？」

夢姫が、対処という名の逃亡をしようとしたところ、肉食である怪獣グリフォン（多分）は何と、

私の首根っこを啜えるとひょい、とその翼の生えた背中に楽々と乗せまして、

そのまま恐ろしい速度で翼を羽ばたかせながら走り始めました。

走ると言っても、翼を羽ばたかせるのは、ただ速度を上げるためのものだったようで、決して飛ぶことはなく、ただ、

その分怖い。

夢姫は、その鷲と獅子の背中から振り落とされることがないように必死にしがみついた。

あまりの出来事に声がでない。

クマやライオンなどの動物は、変に刺激を与えると興奮して暴れると聞く。

猫も似たようなものだ。

触り過ぎるといきなり引っ掻かれる。

夢姫はかつて飼っていた黒猫のことを思い出しつつ、今、ここで悲鳴や声を出したら、このグリフォンもいきなり私を振り落として襲ってくるんじゃないか？と唇を血が滲むほど噛み締めた。

どれほどの時間が経っただろうか。

よく、小説などの台詞で「その時間が、私にとっては永遠に感じられた」というものがあるが、夢姫にも、永遠とは言えないものの、何時間も経ったように思えた。

最も、夢姫がその台詞を読んだのは、国語の問題集の中の文章の読み取り問題の一つからだったのだが。

走り出した時から全く緩まっていけないスピードで走っているグリフォンは周りの木に当たるような走り方をしているのに、全く当た

っていない。

それどころか、先ほどから更に速度が速まっている気がしてならなかった。

夢姫の手も、痺れて力が抜けてきた。

元々力はそこまで強い方ではない。

(そして、この森はいつ終わるのか、富士の樹海か?)

日本で有名な自殺の名所で知られる場所を思い出して、夢姫はフツと力の抜けた笑みを浮かべ、目を閉じた。

富士の樹海でもどこでも変わりはない。どうせ私の人生はもうオシマイなのだろう。

受験もダメになって、知らないところへと飛ばされて、こんな怪獣に背負われてどこかへ向かっている。この怪獣も、どうせ巢かなんかに私を連れ込んでそれはそれはグロテスクに喰らうつもりなのだろう。

どうせなら、痛くないように一息で殺してほしいものだ。

(ん?もしかしたら、これって、トリップとかそういうものなのだろうか……)

トリップ、主にトラベルよりも短い期間の旅行とも言い、通常の時間の流れから独立して過去や未来へ移動することをタイムトラベル、タイムワープ、またはタイムトリップ、日本語では「時間旅行」とも言う。

辞書か何かで読んだ知識を頭の中で復唱しつつ、夢姫はやっと今の状態を理解した。

そもそも、森の中に怪獣が出てくるのがおかしいおかしい。

閉じた目をゆっくりと開くと、いつの間にか森を抜けて、明るい場所へと入っていた。

驚いてキョロキョロと周りの景色を見ようとすると、翼が邪魔で

見えず、見えたとしても、このスピードなら、速くて何が何だかわからないであろう。

だが、グリフォンはその後すぐに、走る速度を緩め、やがて止まったのだ。

ああ、ついに巢に運びこまれ喰われるか。
と半場自虐的になっている夢姫を、グリフォンは、
優しく啜え、そっと地面に下ろしたのだ。

「え」

巢に運びこむ様子のないグリフォンに、心の底から驚愕しつつ、夢姫は今居る場所を確認する。

白いレンガの敷き詰められた地面。周りには、綺麗に整えられた木々が生えていて、近くには地面と同じように真白な建物が並んでいる。

まるで、歴史の教科書で見た19世紀頃のヨーロッパか、町中が世界遺産だというヨーロッパのどこぞの町を思い浮かべた。どこだったか……でも、死ぬ前に一度は行ってみたかった。

「グランドール、出てきなよ」

どこの町だったかともんもんと悩んでいる夢姫の真横で、涼やかな青年の声があった。

もちろん、そこにはグリフォンしかいない。

喋った……？

と夢姫が緊張しつつ横を見る。

「居たんだよ、やっぱり」

凜々しい驚きの顔にある鋭い嘴が、見事なまでに人語を話していた。

しかも夢姫が理解できる言葉で。

3・Griffon!?(後書き)

この話に出てくる怪獣や、この話で言うタイムトラベルの知識は全てWikipediaのところから引っ張ってきています。
詳しいことが知りたい方はそちらをご覧ください。

4・Dragon and Griffon

「へえ、それがその可愛い子ってわけか」

グリフォンに集中していたせいで、他に誰かが来ていた事に全く気が付かなかった。

「どうか、いつの間に来たんだ？」

声の聞こえた方向へ、つまり、真正面を向くと、そこには、金髪縦ロールの超美人女海賊さんがいました。

……なにこのカッコイイ人は！

可愛さよりもカッコ良さを好む夢姫にとって、その姿はピンポイントでストライクゾーンに入っていました。

「なんとというか、将来になりたい姿、とありますが。」

うつとりといきなり現われた美女に見惚れている夢姫を見て、美人女海賊さんは不思議そうな顔をしている。

「そして、おお、とわけがわかったかのように、グリフォンに話しかけた。」

「おい、お前、人型になれよ。この子、お前が怪獣姿だから怯えてんだよ！」

「え、そういうわけでは……！」

「ないのですが、と言おうとした夢姫の目の前で、それは起こった。一瞬にして、グリフォンが姿を変えたのだ。」

「これで、いいかな」

くるり、と夢姫の方を振り向く。

そこに居たのはこげ茶色の髪と、エメラルドグリーンの瞳を持つ18歳ぐらいの無表情な青年。

普通だったら、頬の一つも染めるところなのかもしれないが、さっきの喰われるという恐怖を味わった後だと、無理というものだ。ポカーンとしている夢姫に、今度はグリフォンの青年が何かに気付いたような声を出した、

「ああ、そういえば、名前、名乗っていなかったね。俺はリフォン・リフォン・ネア。今さっき見た通り、種族はグリフォン」

「で、俺はグランドール。えーっと、名字は長いから省略してSでいい。」

まあ、名前だけ覚えてくれりゃあいいから！ で、種族はドラゴン！

ああ、やっぱりこの人達怪物なんだ……と思うと同時に、ドラゴン？ この美人さんが！？ ありえない。自分のことを俺って言うてるのは、まあ、キャラとしてありかなあと思ってスルーしたけど、ドラゴンって……バリツバリ人（私）を喰らうではないですか。

「え、と、私の名前は聖夢姫です。覚えるなら夢姫だけでけっこうです。 ついでに、ドラゴンとグリフォンだって言ってみましたけど、喰べられませんよね？ 私」

さっきから自分の言葉が敬語になっているのは、強者に対する畏怖の念なのかもしれない。

おずおずと、夢姫が本当に心配なことを聞くと、リフォンはそのままに、クツクツとグランドールは腹を押さえた。

「食人的な意味？ 喰わない喰わない。君みたいな可愛い子、喰えるところでも喰うわけがない」

「この世界の奴らは全員人、喰べないから、安心していいよ」
その言葉を聞いてほっとする夢姫をグランドールはじっと見つめる。

そして、数秒後、その視線に気付いた夢姫がグランドールの方を

見ると、ぎよつとした。

グランドールの目がキラッキラと輝いていたからだ。

「あー、でもこの子、本当に可愛いなっ！ くっそー！こんなことなら俺が迎えに行けばよかった！ お前、絶対その無表情の怪獣姿で行っただろ？ 人型も無表情だけだよ」

身ぶり手ぶりを加えて、感情を露わにするグランドールに対し、リフォンはどこまでも無表情の、感情の籠っていない声で答える。

「めんどくさがって行かなかったのお前じゃないか。そもそも、俺はこれで充分表情を作っている」

「どこが！？ どっからどう見ても蠟人形だろ！ あ、ところでユメキって言ったよな、こんなのと一緒に嫌だろ？ 俺と一緒に来た方が楽しいと思うよ」

夢姫は困惑して声が出ない。

リフォンは、そんなグランドールの言葉を聞くと、無表情のまま、はあ、とため息をついた。

「楽しいか楽しくないかではなく、義務だろう。そして、お前は女みたいな外見のくせに、すぐに女を口説く」

「だって男だからな」

ん……？ 男……？

「え、あ、お、男、なんです、か……？」

あたふたしながら夢姫が言うと、グランドールは苦笑交じりに言った。

「ああ、正真正銘生物学上、いや、怪獣学上？ 雄だ雄。なんなら脱いでみせてやろうか？」

「いえいえいえいえいえ結構です。本当に」

グランドールは、苦笑交じりの顔から、ニヤツと意地悪く笑った顔になると、裾と袖の長いコートの下に着ているベストのボタンを一つ一つと外していこうとするのを、夢姫は必死に止めた。

夢姫は昔っから妙に男らしくて、その分、男に興味がないのよねえ。

と、母親が言っていたのを思い出した。

確かに、テレビに出ている、一般的に“イケメン”と呼ばれる人達に興味などなくて、思春期真っただ中だというのに、異性を特に意識した事など一度もない。

そのせいで、友人には、何度か驚きを通り越して呆れの顔をされたこともあったが。

だが、別に男に興味がないわけではないのだ。

正直、勉強に励む前までは、ゲームなどをし、漫画や、ライトノベルなどの小説を読んでいたわけで、そう言う頃には、あーイケメンに会いたいーとか思っていた。

今は、さすがにそんなことは言わないが、イケメン、および美形好きなところは全く変わっていない。

まあ、ミーハーみたく、きゃあきゃあ騒ぐことなどはしないが。

だが、さすがに、目の前でストリップショーされては困る。ただでさえ、彼氏？そんなもんいらん。私はこれから一人身で生きて行くぜよ！ と勉強に励むと決めた頃決意したので、男っ気など全くなく、その分、免疫なんぞ、全く、全然ない。

未だにニヤニヤと笑ってボタンを留めているグランドールに、リフォンはもう一度ため息を吐きながら、行くぞ、と声をかけた。どこへ？ と夢姫が聞く前に、グランドールの手によって立たせてもらい、ぐいぐいと、目の前にある一際大きな建物に引っ張られていった。わけがわからず疑問マークを浮かべている夢姫に、グランドールは、リフォンに見つからないように、こっそりと、

「中に入ったら、君が知りたい事、全部優しく教えてやるよ」

ニヤツと赤い目を細めて笑った。

「あの・・・」

「で、ここが食堂というわけ、ここでは、各自好きなものを頼んでいいし、売店で買ったものを食べてもいい。

ここの料理はすっごく美味しいから、食べて損はないよ。

で、そつちが・・・」

「あのっ！」

夢姫の手をしっかりと握り、さきほどから親切に解説をしてくれるグランドールと、なぜか夢姫の頭の上に軽く手を置いて、たまにこしょこしょと夢姫の頭を撫でるリフォン。

決して、心の底から言うが、この二人が苦手だとか、嫌いだとかいわけではない。

むしろ、こんなわけのわからない世界に迷い込んでしまった私を助けてくれたある意味恩人だ。

だが、夢姫はどうしても言いたかった。

「なんか、すつつつこい見られてる気がします。

というか、見られてます」

手を握ったり、頭を撫でるのはいいとしよう。

先ほどから何回か「離れた方がいいのでは・・・」とか「頭に手はちょっと・・・」とかさりげなく言っているのだが、全く効果がないので、致し方ない。

だが、先ほどから通っているこの廊下？を一步一步歩きたびに、じろじろじろじろ。

私は檻の中の猛獣かこのやろう！

歩いている最中に、少し聞いたのだが、今、私がいる世界は、前と横にいる二人のような、つまり、グリフォンやドラゴンというような、失礼だけど、化物？というか怪獣の住んでいる世界だそうで。ていうか、なんで怪獣が人型取れるのが理解できない。しかも羨ましくなるほどの美形。

このこと、つまりなんで怪獣が人間の姿になれるのか、と聞いたところ、二人口を揃えて「世間体の問題」と言われました。おそるべし世間体。

ちなみに、この世界には人間はいない。なので、ここの世界の住人達は人間である私を喰べないというわけだ。

よかったよかった・・・！

自分でも、もう少し慌てたりとか、夢だー！とか言って暴れればいいのに・・・とは思うのだが、いかんせん、さっきのリアルグリフォンを見て、もう十分慌てたし、夢だと思って今さっき、思いつきり頬を自分で抓って涙が出そうになったばかりだ。

受験だって、もう無理だし、なんかもう、吹っ切れたといえますか・・・。

ついでに、今歩いている廊下、つまり、この建物は、その、怪獣達が、力を使いこなせるようになるための訓練施設、および、世間に出るための知識を学ぶところ。つまり学校ですね。

どうにも、この学院自体もかなり広いのだが、この学院外には、一般的に言うところと怪獣的な世間というものがあったて、まあ、普通に町が広がってたり、海があったり、山があったり、その他もろもろで色々あるらしい。

思っていたよりまとも。

生活も、食って寝て戦って遊んで・・・ん？戦って？

まあ、そんな感じで、怪獣達も、町にいる時などは人型を取るきまりらしく、人間と同じように買い物したり色々できるらしい。

そして、私が今聞きたいのは、なにこの熱いを通り越して、怖い。怖すぎる・・・！

「きつと服が珍しいからじゃない？

俺達も始めて見たからな。そんな衣装」

つ、と夢姫は自分の服を試してみるが、今自分が着ているのは受験するはずだった高校の制服だ。

受験するときには着てくるようにと、プリントに書いてあったのだ。夢姫はスカートが嫌いだ、妙に長いスカートの下に半ズボンを着ているのでまあ我慢だ。

とりあえず悪意はないことはわかったが、この視線には当分慣れないと思う。

「あ、あと、これは本当に訊きたいんですけど、
なんで、私、いきなりあんなところに・・・」

私が一番尋ねたかったこと、つまり、なぜいきなりこんな世界に放り込まれたのかを訊こうとして、それはやむなく阻止された。

「おいグランドール！リフォン！
てめえらなにやってるんだ！お前らの出番もうすぐだぞ！」

いきなり怒鳴り声でグランドールさんとリフォンさんの腕を掴んだのは40代前半くらいの、いかにも体育会系といった感じの男。おそらくこの教師だろう。

「えー、先生、今日休みます。

頭痛いです」

「先生、俺も急に腹痛が」

そう言っつて二人は私の手を引いてさりげなく逃げようとするが、教師の男はそんなの逃すはずもない。

「何言っつてんだ！」

ドラゴンとグリフォンっつていうのはそうそう簡単に頭痛や腹痛になつたりはしない！俺が保障する！」

「先生に保障されても全く嬉しくありません」

「同じく」

ぐぐぐぐつと、二人は何とか逃げようとするのだが、逆にそうすることで教師の掴む腕の力が強くなつていくみたいだ。

そこで、教師の男は二人の間にいる私に目を向けた。

「ん？何だその子は。見ない顔だな」

明らかに不審な目で見られてる。

やばい、これはどうすればいい！

「あああのですね、その子はそう！獣型の吸血種の子なんですよ！俺達の後輩なので連れてきちゃいました！」

「是非、授業の見学をしないと」

おろおろしている私を見て、二人が慌ててフォローに入ってくれる。これで、安心、授業の見学くらいなら大丈夫だろう。

と、思っていた矢先、

「おお、そうか。」

なら、一人こちらの対戦相手が欠席しててな、相手になつてもらおうじゃないか。

吸血種は再生力も高いし、よっぽどの大怪我でもない限り、大丈夫だろう」

え？

今、なんと？対戦相手？よっぽどの大怪我？

嘘ですよ、と目だけで二人に訴えかけると、二人も、しまった、

やばい、とグランドールは青い顔で、リフォンも僅かに口元をひきつらせている。

「よしよし、これで全員揃ったな。

これで、バトルの実戦の授業ができる！」

ここで、私は理解した。

つまり、人間の私に、

戦え、と？

「な、そんなつ、戦うつて……!?」

「お、お嬢ちゃん、もしかして初めてか？今回は人型でやるから、そこまで緊張しなくても大丈夫だ。なあに、吸血種は頑丈だということ、お嬢ちゃんが一番よく知っているだろう？とここで、武器はどうする？」

「武器っ!？」

助けを求めるように、夢姫はグランドールとリフォンの姿を探すが、先ほどまですぐ近くにいた二人が、いつのまにかいなくなっていた。

その様子に気づいたらしい教師が、苦笑交じりに言った。

「あの二人なら、自分たちの準備に行かせたよ。最後の最後まで、というか暴れながら連れて行かれたが、あの二人、そんなに君のことが好きなのか？恋人か？」

「いいえ、ありえませんが。あの二人は、……先輩です。はい」

とりあえず、口裏だけでも合わせておこうと、自分はこの二人の後輩だという設定で言うておく。

「ふうん、そうか。あ、あと、特に武器の指定がないなら、君でも十分に扱えそうな剣でいいか？君の相手はミス・クロットフォールだ。アイツはキメラの亜種だから君との相性もそう悪くはないだろう。うん。ああ、大丈夫、そんなに緊張しなくても、死ぬほど痛めつけることはない。少しでもそうさせる気があつたら、教員が止めるからな。まあ、吸血種は大怪我しても大概は結構ケロリとしているから大丈夫か」

ああ、これが死亡フラグという奴か。
夢姫は心の中でただただ涙を流す。

言われるがままに、準備室のような部屋に入って、はい、と剣を差し出される。

ポーっとしながら、それを受け取ると、ズシリという重さが腕に伝わった、というか・・・

「重すぎ……ますっ……！」

構えるどころか、持ち上げることさえままならぬ重さ、引きずるのが精一杯だ。

どこが“君にも十分に扱えそうな剣”なんだ！

というか、刃物、凶器持たせんな！未成年の少女に！

「おや、吸血種の女の子は大体これでぶんぶん振り回せるんだがな。だが、これ以上軽い剣ないんだ、すまないな」

「……………ついでにこれ、何キロぐらいあるんですか？」

「大体、45〜50くらいだが」

ほぼ自分の体重と同じではないか！

無理に決まつとるわそんなもん！！

「せめて、剣じゃないのに換えてください！銃とか！」

「悪いな、相手も剣だから、一人だけ銃を使うつてのはルール違反なんだ。剣より銃の方が有利だからな」

なら、最初から訊くな！

そう言いたいのを夢姫は必死にこらえた。

今ここで暴れたら、逆に自分の立場が悪くなると考えたからだ。

今の自分は吸血種の女の子という設定なのだ。

(こんなことなら最初から人間だって言うっておけばよかったじゃない

いかよ・・・！)

今から言えば、助かるだろうか、と剣をひとまず足元に置いて、教師の男にとりあえず話しかけてみようとしたところ、そんなじゃ、頑張れよー、アナウンズが入ったら武器持ってグラウンドに入れーという声だけが響いていて、その姿はいなかった。

「生霊かよこんちくしょおおおおお！！！！」

がしがしがしがし、夢姫は叫んで頭を掻き毟るが、そんなことをしても事態がよくなるわけではない。

だが、一つ策があった。

ドアから逃げればいいのだ！

どうせ、私はこの学院の生徒ではないのだから、見られたって大丈夫だ！

我ながら名案！

と思い、ドアノブに手をかけるが、

「あれ？」

開かない。

もしかして、

「お、オートロック式・・・！！？」

この際、この剣でかつ裂いてやろうか、とも思ったが、目の前のドアは鉄でもなく、コンクリートでもなく、だが、ものすごく硬い素材でできていた。

しかも、剣など一度も触ったことも、持ったこともない自分が、まともに扱えるとは思えない。

万事休す、か。

目の前が真っ暗になる、とはよく言ったものだ。
今の状態がまさしくそれに相応しい。

“ 出場者の方は、グラウンドの中央に出てください。繰り返し
す。出場者の方は、グラウンドの中央に出てください”

そんなアナウンスが聞こえて、夢姫はのそりと立ち上がる。

どうせ、ここで出て行かなければ、他の誰かが入ってきて、無理
やりにも自分をグラウンドへと連れ出すことだろう。

剣を掴み、出ようとしたドアとは反対側にあるドアに手をかける
と、きい、と音を立てて開いた。

そこには、グラウンドというか、なんらかの資料で見た、闘技場
のような光景が広がっていた。なんの資料で、どこだったっけな。

一面、茶色の地面。そして、その地面よりも高い位置にある観客
席。そこにはずらりと人、もとい、怪獣の人型バージョンの皆様が
並んでいた。

夢姫は、ずりずりと重たすぎる剣を引きずりながら、円のマーク
が描かれている、グラウンドの中央に立った。

心の中で、親しい人全員に別れを告げながら。

6・Battle 1(後書き)

注意*ここでは、キメラとは、合成獣のことを指します。

7・Battle 2(前書き)

血などの表現があるので注意。

「ちよつと待つ！」

俺はまだ納得してねえぞおおおおッ！

リフォン！てめえも責任をとれえええええ！！」

「責任を取りたくても取れないのが今の現状じゃないか。

そして俺も納得していない」

観客席で、グランドールとリフォンが未だに騒いでいるのを目の端で捕らえた。

グランドールは、怒りで顔を赤くして、観客席の枠に、足をかけ、今にも飛び降りんとしていた。リフォンは無表情だが、自身を止めようとする者達の手を必死に振りほどこうとしていた。

二人とも、自分のことを助けようとしてくれているのか・・・？

馬鹿なことを。

たかが人間の小娘になんの得があるというのだ。

しかも、ほんの数十分前に会ったばかりの。

あの二人は、なぜここまで自分に構ってくれるのか、なぜ助けられるのか。

まあ、でも、それも一つの恩だ。

だからこそ、

「先輩方」

最後まで、あの二人に面子くらいは立たせてやろうではないか。私

がこれで死んでも、二人の立場が悪くならないように。

私はいくら性格が悪けれど、恩は返す主義だ。

「行つてきます」

これで、やることはやった。

最後にこれ以上ないくらいの微笑みを見せてやったとも！

私の相手の少女は、170センチはあるであろう長身で、目つきが異様に鋭い。きゅっと引き締まった体を持っている、バリバリ運動神経の良さそうな子だった。

しかも、片手には、私の持っている剣の2倍はあるであろう大きさの剣を軽々と持っている。

ああ、これは死ぬな、私。

吸血種は再生力も高く、大怪我してもケロリとしている？

私は人間なんだから、大怪我したら死ぬ超繊細ボディの持ち主なんだぞ！

“ 出場者が揃ったようなので、バトルの実戦を始めます”

アナウンスが聞こえた。

「ああ、思い出した」

「ここ、社会の資料で調べた、コロッセオに似てるんだ」

それは、自分自身に言い聞かせる言葉だった。

“ 実戦、始め ”

そのアナウンスで、目の前の長身少女、ミス・クロットフォールと
か言ったか？

が、剣を大きく振りかぶって、その剣の真下にいる私に振り下ろす。

とっさの自己防衛本能で、夢姫は自分の剣をほっぱり出して、剣が
振り下ろされる直前に、数歩後ろに下がる。

だが、完全にはよけ切れなくて、剣の刃が自身の服をざっくりと裂
いた。

観客は、剣を放り出して防御へ移った夢姫を見て、笑うとともに、
熱気がヒートアップした。

そこからは、夢姫にとって一瞬だった。

ミス・クロットフォールがすぐに体勢を立て直し、その勢いを利用
して、夢姫の体を

袈裟懸けに、一気に斬り裂いた。

自分の体から、大量の血が飛び散るのを夢姫は見た。

あまりに一瞬のことで、激痛を感じなかった。

会場は「うおおおおっ！」と、ミス・クロットフォールの見事な
剣さばきに拍手と歓声は贈れど、血が出たことに対して、悲鳴をあ
げるものや、動揺する者など一人もいない。

いや、いた。

観客席で、未だに暴れていたグランドールは、顔を蒼白にして固まり、その隣にいるリフォンも、目だけを大きく見開いて、石像のように固まっていた。

袈裟懸けに斬られる時、特に腹部にダメージを食らったのか、口からゴポリと血が溢れた。

だが、まだ立っていられた。

その様子に、何より驚いたのは、夢姫自身でもあったし、対戦相手のミス・クロットフォールも、目を丸くしていた。

「傷が回復していないな。

お前、吸血種ではないのか？」

その言葉には答えられなかった。体面的な意味でも、肉体的な意味でも。

ただ、ここで、初めて体が強張るほどの激痛と熱を斬られた傷口から感じ、体を支えられず、前に倒れるのはわかった。

「何をやっているんですか」

ぼやける視界に、白が、見えた。

普通、剣で袈裟がけに斬られたとしたら、そのまま、“私はそこで意識を失った…”とかいうシナリオで気絶するのが普通だと思う。私も、気絶というものがどういうものなのか、実感してみたかったのだが…。

何と、あの状態で、私は気絶をしなかった、いや、できなかったのだ！

多分、それは己のプライドのせいだったと思う。
私は弱い女になり下がりがりたくなかった。

……同性に剣で斬られて言う女の台詞ではないが。

とにかく、私は、気絶はしなかったものの、意識が朦朧とし、前に倒れ、地面とキスする直前、誰かが私の襟首を、決して丁寧とはいえない動作で掴み、抱き寄せた。

……あの二人か？

それにしても、声に険があったな…

というより、白…？

激痛よりも好奇心が勝って、動かない首をゆっくりと動かし、死にそんな私の襟首を掴み、抱き寄せた者の顔を見ようとす。

「約束が違うじゃないですか。

すぐに連れてくると言っていたのに。

仮にもドラゴンとグリフォンでしょう？

人間より長く生きているせいで更年期障害にでもなりましたか」

見た瞬間、白髪？と思った。

だが、違った。

真珠だ、真珠色、つまりパールホワイトという色だった。

そして目は銀灰色。文字の通り、銀色と灰色を混ぜたような色だ。

……ドラゴンと、グリフォン………？

あの二人の知り合いか。

夢姫は思ったが、それ以上は思考がうまく働かなかった。

だが、この、私を抱き寄せているのは信頼できる人（怪獣？）だと思った。

観客席の方を見ると、いきなりの白い人（怪獣？）の乱入に、ざわざわとざわめいている。

グランドールが観客席の枠から飛び出し、リフォンはなんと枠を破壊して、二人してこちらに向かって来ていた。

グランドールは何かを怒鳴っていて、リフォンは目をカッと見開いている。

私を抱き寄せている白いのは、私を抱きよせたまま、二人のところにへ向かって行った。

せめて抱き上げたらどうだ。

そこからは、ほぼ意識を失いかけている状態でどこかに運ばれているのがわかった。

次に夢姫の意識がはっきりしたのは、真白なベッドの上。

痛み止めの薬でも刺されているのか、体に痛みは感じなかったが、首から脇腹のあたりまでぐるぐるんに包帯が厚く巻かれている。だが、体が重く、動かせそうにはなかった。

死んでない…？

己の意外にしぶとい生命力に感心しつつ、目を閉じようとした時、声が聞こえた。

「容態は？」

「命に別条はないし、

薬を投与したから痛みも感じていない」

「傷口はどうなんだ！？」

女の子だぞ？しかも嫁入り前の」

私のベッドの近くで話している三人の話から推測すると、どうや

「ここは病院のようなところで、私は手当てをされたい。そして、命に別条はないらしい。」

閉じようとした重たい目を気合で開かせた。

「……私の角を粉末状にしたものを塗ったから、大部分は目立たなくなつた。」

「が、所詮は人間の再生力だ。」

「どう受け止めるかは本人次第でしょう」

角？

傷口？

「それ本当なんだろうな？」

嘘だつたらここで喰い殺す」

「ここで嘘ついてどうするんですか。」

第一、私を誰だと思っているんです？

「そこらへんの医者よりずっと医術は心得ています」

それでも噛みつかんばかりの勢いのグランドールに、リフォンがぴつと指差した。

「ねえ、彼女、目、覚ましてるよ」

ぐるんと三人の目がこちらに向けられた。

エメラルドグリーン、血のような赤、銀灰色の六つの瞳だ。

夢姫も慌てて体を起こそうとするが、それを押しとどめたのは、夢姫を抱き寄せたその白いの（仮）だった。

「ああ、傷口が開きますから、体を起こさないで下さい。」

そのまま」

そこで、夢姫は改めて、その姿をじっくりと見ることができた。

髪と目は先ほど説明した通り、だが、先ほどはわからなかったのだ

が、髪の毛は長く、後ろで一つに纏めていた。一言でまとめるなら、穏やかそうな人。

「さて、遅くなりましたが、私はユニコーンのロイシヤスと言います」

夢姫がぼんやりと人間観察をしてると、ロイシヤスと名乗った青年は軽くお辞儀をした。

「あ、私は聖夢姫と言います。覚えるなら夢姫でけっこうです」

夢姫も、そう言ってぺこりと頭を下げた。その様子にロイシヤスはにこりとほほ笑み、そして表情を普通なものへと戻した。

「ついでに、聞こえたとは思いますが、貴女の命に別条はありません。」

「大丈夫です。理解しました」

ロイシヤスの言葉を遮って言うと、ロイシヤスは申し訳ないようなだが、少しだけ安堵したような顔をした。

シヨックを受けなかったといえは嘘になる。だが、ここでへこたれても意味がない。

「では、ひとまず落ち着いたようですので、ロイシヤスは、表情を真剣なものへと変えた。」

「この二人が話していなかったようなので、貴女が一番教えてほしいであろうことを教えましょう」

夢姫は目を見開く。

「どうして貴女がこんなところにいるのか」

「始まりは、そうですね、知識欲でしょうか」

「私は、ここの学院の理事長から、ある本の解析を頼まれたのです」

ロイヤスは相変わらずその場に立ちながら語り始めた。

曰く、ここの理事長は、学院内にある大図書館の奥の奥から古い本を見つけたらしく、ちょうどそこにいたロイヤスに、「面白そうだから解析してみないか？」と言われ、退屈していたロイヤスは、「いいですよ」と一言でOKしたらしい。

それが間違いだった。

本の中身には、一つの魔方陣を使った召喚術の説明がズラリと並んでおり、それを、ロイヤスは何日もかけて解読した。

そして、やっと実際にやってみるという段階に移ると、自分一人ではその術を扱えないほど広範囲のものであることが判明した。

そこで、ロイヤスは、その時授業をサボって昼寝をしていたグランドールと、同じく授業をサボって食堂でつまみ食いどころの量ではないつまみ食いをしていたりフォンに「これをやれば理事長が成績を上げてくれて、かつ、面白いことが始まるぞ」という嘘を吐き（こんなことで理事長は成績なんぞ上げてくれないし、実際この術を使って面白いことが起こるとは限らない）、二人に手伝ってもらい大がかりな魔方陣を仕上げ、術を発動させた。

普通なら、その魔方陣の上に召喚対象が出てくるはずなのだが、どうしてか、夢姫の場合、てんで違う森の中に召喚されてしまった。

いつまで待っても魔方陣に召喚対象が出てこないことを不審に思った三人が、手分けして、辺りにそれらしくものがないかどうかを探しに行き、それを見つけたのが、リフォン、見つけられたのが夢姫である。

つまり、夢姫の場合、電車に飛び込んだと同時に術が発動されたのである。

「でも、なんで私なんでしょう？」

別に私じゃなくてもよかつたんじゃないですか？」

「いや、私も知らなかつたし、わからないんです。

その本には、他の世界から人間が召喚されるなど、一言も書いてなかつたんです」

ロイシャスは自分が不甲斐無いとばかりに唇を噛んだ。

「じゃ、じゃあ、その本に、召喚したものを元に戻すっていう方法は書いてないんですか!？」

「それは……」

ロイシャスは、一番聞かれたくない質問をされたようで、歯切れを悪くする。

「無くなつたんだよ」

ロイシャスの代わりに淡淡と答えたのはリフォン。

「君を最初に見つけた時、一旦戻って二人に連絡したんだ。

それで、二人が本を取りにロイシャスの部屋へ戻ったら、

本が、無くなつてたんだよ。

もちろん部屋に鍵をかけていた。

特別頑丈なやつをね」

その後、ロイヤスは学院内を捜しまわり、グランドールはとりあえずリフォンと合流すべく、外に出たんだそうだ。

「じゃあ、私は元の世界には帰れないのか」

精神的なショックで、素の口調が出てしまったが、そんなこと今は関係ない。

ベッドに仰向けになりながら言った言葉に、一番反応したのはグランドールだった。

「大丈夫だ！」

このことは理事長に連絡したし、知り合いに、魔術関係に詳しいヤツがいるから、そいつにもユメキが元の世界に帰れるように帰り方を探ってもらってる。

理事長も探してくれるって言うていたからすぐに見つかるさ」

ユメキ、と呼ばれた自分の名前に涙が出そうになった。

「本当にすみません。」

貴女を巻き込むつもりなど毛頭なかったのです」

「本当にごめん。」

やらなければよかったんだ」

ロイヤスとリフォンも深く頭を下げた。グランドールも「許される事じゃないってわかってる」と言っけて目を伏せ、頭を下げる。

そんな様子を見て夢姫は慌てて頭を上げるように言った。

こんな美形達に頭を下げられて平常でいられるほど夢姫は大人ではない。

「別に悪気があったわけでもないし、仕方のないことなんでしょう？」

それならしょうがないんです」

夢姫がそう言うと、三人は頭を上げ、あのリフォンまでもが薄く笑ったのだ。

「じゃあ、いつでも怒りたくなったら言っただけいいね。」

サンドバッグ代わりにこのバカドラゴンを喜んで差し上げますから」

「おおい！！」

なんで俺なんだ！お前が行けお前が！！」

「あれ、グランドール、さっきユメキのこと可愛い可愛いって言うてたくせに、嫌がるの？」

「んなつ！？」

わけねえだろ！もちろん可愛いユメキのためならサンドバッグだろうが抱き枕だろうがなつてやるともよ！

できれば後者の方がいいが……」

美しい金髪の縦ロールを揺らしながらグランドールは後半はごにごによとした声で言う。

それを見て、他の三人はくすりと笑った。

「だめだよユメキ、こんな男に惚れちゃあ。」

これでもドラゴンだからね、欲の塊だからね、コイツ、数年前まで女遊びしまくってたからね」

「絶対損しますからやめた方がいいですよ。」

それならよっぽど私の方が……」

ぐいっと顔を近づけてくるロイシヤスに驚いていると、グランドールが「てめえらなに人の知られたくねえ過去バラしてんだ！しかも女の子の前で！そしてロイシヤスもさりげなく口説くんじゃねえ！」とリフォンとロイシヤスの頭をべちこーんとぶつ叩いた。

そこから三人の言い争いになっていると、ガタンと部屋のドアから音がした。

「ちよつと、どつとどつとなのよー！」

ドッガンッ！

普通なら出せないような音を立てて、いきなり病室のドアがぶつ飛んだ。

いや、

蹴り飛ばされた。

突然の事態に夢姫、リフォン、グランドール、ロイヤスの三人が目を丸くしていると、女性の声が聞こえた。

「このバカンドール！」

アンタのせいでアタシまでレンロック先生に怒られたじゃない！責任とって殴られなさい！ていうか殺されなさい！」

ツカツカとヒールを鳴らして、ドアを蹴飛ばしたらしいその人？は殺意をむきだしにして部屋に入ってきたのだ。

9・Truth(後書き)

注意*生徒は、取っている科目ごとに時間が違うので、ロイヤラスの取っている授業が無い時、グランドールとリフォンの授業があるということもあつたりするので、ロイヤラスは授業をサボっていたわけではありません。

その姿を見た瞬間「モデルさん!?」と思った。

この世界の怪獣達はみんな背が高い。

リフォンさんは185センチだと、学院内を歩き回っている時に言っていたし、グランドールさんはなんと206センチ。

つまり2メートル越え!の超長身。ロイシヤスさんも、グランドールさんより10センチちょい低いくらいなので190センチくらいであろう。

そして、このモデルさんも170センチくらいあった。

しかも、すごい美人さんだった。

女優やグラビアアイドルなんか比でもないくらい美人、ていうか美女。女。

ボンキュッボンのナイスバディ、ウェーブのかかった、普通じゃありえないが、とても綺麗で良く似合っている藍色の長い髪。色気たっぷりの空色の澄んだ瞳。

高そうなヒールを見事に履きこなし、スラリと長い足がの魅力が存分に発揮されるフリルのついた、でも大人っぽくアレンジされているミニスカートを穿いていて、体に張り付くようなブラウスはそのナイスバディを強調させている。

女の私でさえも、十五年間生きてきた中で、初めて心の底から可愛いと思った女性だった。

うっとりで見とれてしまったのも事実だ。

その女性はバカンドールと呼んだグランドールさんを見つけると、殺意を滾らせて攻撃態勢へ移ろうとするが、ふと、ベッドで仰向けになり、女性を見つめている私の方を見ると、くわっと目を見開いた。

あ、確かに寝てちゃおかしいよね。

そう思って、なんとか起き上がるようになった体をゆっくりと起き上がらせると同時に、何かががばっと抱きついてきた。

ん？抱きついてきた…？

「いやあああん！！」

何この子、超ストライクでタイプなんだけど！！

お嫁に欲しい！てか貰う！

おのれこのド最低糞ドラゴンがツ！こんな可愛い子に惚える気はわかるけど、手を出すとは…。

さっさと誰かにグラウンドで殺されてしまえ！」

私に抱きついてきたのは、モデルさんみたいな女性だった。

「お、お嫁…？」

初めて言われた言葉に動揺するしかない。

説明してほしいと、目で他の男衆三人に目で訴えるが、リフォンはいつも通り無表情で、グランドールは「出してねえよ」と呟きつつ怒りで口元がピクピクしており、ロイヤスは呆れ顔で女性を見つめていた。

「レインさん、そろそろその子から離れてやって下さい。
困惑していますよ。」

せめて名乗ってあげてください」

「あら、アタシとしたことがとんだ粗相を」

ごめんなさいね、と言って女性は渋々離れる。

近くで見ると更に綺麗だった。

興奮しているのか、目はきらきらと輝いており、頬も赤く紅潮している。

「アタシはレイン・アクリア。セイレーンよ。」

未永くよろしくね、お嫁さん」

「…聖夢姫です。夢姫でかまいません」

レインの言葉の意味を聞こうとロイシヤスをちらりと見ると、気ま
ずそうに眼を逸らしながらも答えてくれた。

「あー、その方はですね。あれです。同性、女性にしか興味ない
んです。」

恋愛的な意味で。この方が言った言葉を真剣に考えちゃだめですよ」

「つまりレズ女ってことだ」

「なんか文句あんの!？」

美麗な顔を歪ませ、噛みつかんばかりに男衆を睨みつけるレインは、
雨という名とは対照的に、そんな様子は、無邪気で子供っぽかった。

「はあん、こんな可愛い子が、あんなイグアナに手を出されるなん
て、なんて可哀想なの…さっさと死ねばいいのに」

ポツリと、今度は夢姫を優しく抱きしめながらレインが言うと、そ
の言葉に我慢できなくなったようにグランドールが反論した。

「誰がイグアナだ!しかも手なんて出してねえって!」

「ふうん、本当かしら?」

じゃあ、私が手、出してもいいわよね」

レインは手をわきわきとさせて「頂きまーす」とニヤニヤした顔で夢姫に覆いかぶさるうとするが、それを三人はガシツとレインの首と両肩を掴んでやめさせた。

「なによケチィ！」

ぶーぶーと文句を言うレインをなだめ、「では、やることがあるの
でそろそろ行きましょう」とロイシヤスは立ち上がる。

「立てる？薬効いているから大丈夫だとは思うんだけど」と言った
リフォンの言葉に、夢姫はベッドを降りた。

そつと立ち上がってみると、ゆっくりだが、歩けるようだ。

五人で病室を出ると、ロイシヤスは夢姫とレインに向かって口を開
いた。

「じゃあ、後は女性の貴女に任せますよ。

我々は、理事長にお話ししてこなければならぬので」

それを聞くと、グランドールははあ、とため息をつき、リフォンも
僅かに眉をしかめた。

そんな二人の様子を見て苦笑しつつも、行きますよ、と言って三人
は去って行った。

三人が見えなくなるまでその場に立っていると、夢姫は疑問に思っ
たことを口にした。

「あの、私はここでどうやって…」

生活していけばいいのでしょうか？と聞こうとすると、ぺらり、と
レインは夢姫の前に契約書みたいなものを見せた。

「理事長からは許可取ってあるわ。

これからユメキの立場とか、貴女の話しも聞きつつ学院周りながら
説明するわね」

いつの間にか手を恋人繋ぎというやつで結ばれていました。

10・S e i r e n (後書き)

身長だけ数字なのは、その方がわかりやすそうだからなので、あま
り気にしないでください。

「さつき、イグアナ野郎とリフォンが食堂とかは案内してたみたいだから、二階に来てみたの。」

「ああ、ここがこの学院の大図書館ね」

「そう言っただけで、レインが指差したのは、どこか高級感のある一つのドア。キイイと音を立てて開いたドアの先にあつたのは、活字中毒の夢姫が思わずくらくらとしそうになるくらい広く、それはそれは美しい本達がいっぱいと並んでいた。」

「夢姫は、今すぐにも読みたい衝動をなんとか抑えつつ、歯を食いしばりながらドアを閉めた。」

「そして、このドでかい学院の中でも、たとえ食堂を忘れたとしても、この図書館の場所だけは決して忘れないと心に誓った。」

「そういえば、私の立場ってどういうことなんですか？」

「図書館を出て、廊下を歩いている時、夢姫はレインに尋ねた。」

「うんとねえ、ユメキは人間だから、ここの授業は受けられないの。わかるわよね？」

「さつきみたいなことになったら大変だし。」

「だから、生徒としては無理じゃないの」

「はい」

「あの三人と別れた後、レインに、傷のことを散々聞かれたのだ。曰く、」

「あの三人に酷いことされたの!? 特にあのイグアナ!」とか

「DV!? それどころじゃないわよあんのゴールデンカナヘビ!」

とか。

違います違いますと夢姫が言って、渋々これまでのこと（この世界に来てからの事）を全て話すと、レインは壁を一発深く凹ませるほどの蹴りを入れ、憤怒した。そして、この子を普通の生徒と間違える教師にも腹が立つ！ともう一発壁を蹴り飛ばす。だから、レインが言ったことを夢姫は重々承知しているし、元々生徒になる気はなかった。

「だから、考えたんだけど、

ユメキ、貴女には、ここで、とある事情で普通の学院生活を送れない“特別使用人”としていてもらうわ」

「特別使用人・・・？」

「そ。いわゆるメイドさん。」

メイドっていうから変なものの想像しないでね。メイド服とか・・・

・・・やばっ、ユメキのメイド服姿想像したら鼻血が・・・っ！

んで、やる事と言っても、お使いとか、掃除とか、暇なときには図書館で本読んでてもいいし。

とりあえず、できなさそうなことはやらせないから大丈夫よ。」

鼻の下からツツと赤い線が垂れてきて、レインはそれを手で押さえつつ、真面目な顔で言うものだから、顔がとっても美人さんなので、夢姫は見ているこっちがいたたまれなくなってくる。

だが、それより、

「本、読んでていいんですか……！？」

「？いいわよ？全然」

とっても魅力的な話しでしたので、夢姫、即OK。

ここで断ったら活字中毒じゃない！

「細かい仕事内容はメイド長が教えてくれるだろうし、アタシもバイトでやってる時も多いから教えてあげるわ」

「バイト？生徒なのに、この学院でバイトするんですか？」

「うん。この学校も、休日があるから、そう言う時は、学院外に出てもいいことになっているの。」

門限厳しいけどね。」

「そう言う時、お金ないと楽しめないでしょ？」

ほとんどの生徒は、親からお金送られてきたり、金目の物送られてきたりするんだけど、アタシの家族、住んでんの全員海の底だから無理があつて…。」

だから、そういう生徒のために、男は力をつけるために肉体労働、女は礼儀作法もかねて従事をバイトとして提供しているの。」

アタシもその一人」

へえ、こんな美人さんでも、バイトなんてするんだ。」

「あ、ついでに、ユメキはここでは理事長の親戚つてことで生徒達にまとめてあるから。」

それらしく対応をよろしく。」

人間つてことを知られちゃダメ。」

喰われはしなくても、違う意味で喰われちゃうわ。」

わかるわよね？」

「絶対に知られないようにします。プライドにかけて」

「ここの怖さは嫌と言うほど味わった。たとえ女であつたとしても！

「うん、言い心掛けね。」

「じゃあ、貴女の部屋に案内するわ。」

「いくら生徒じゃないと言っても、部屋はしっかり用意できるくらい敷地広いんだから！」

「しかも貴女は理事長のお気に入りなのよ」

「ええ？ここの理事長の？

会ったこともないのにですか？」

「そうよ。」

今頃、トカゲと鷲獅子と角馬がまた話しに行ってると思うけど、理事長も、貴女のこと気にかけて心配なさっているし、その分、興味もあるってことなのよ」

その話を聞いて、夢姫は近いうち理事長に御礼言いにいかないとなあ、と思った。

ていうか、さつきからレインの中の元から低そうなああの三人のランクがどんどん下がっている気がする。

相変わらず今度は鼻をタオルで押さえながら言っているのだが。

「……とりあえず、医務室的なところへ行きましょうよ。

血、さつきから止まってないです。ていうか、タオルから滲んでます。垂れてます。床に」

「え？心配してくれるの？お姉さん嬉しいなあ。

医務室かあ、面倒臭いけど、ユメキがナース服着て看病してくれるなら一瞬で止まる自身があるよ」

「次行きましょうか」

冗談だよー、嫌わないでようーと、スタスタと前を歩いていく夢姫を追いかけるようにしてレインはいそいそと追いかけてきた。

周りに人がいないのが幸いだ。

見られてたら恐ろしい事になっていただろうに。

この世界には、男女問わず個性的な人しかいないのかと、夢姫は心
の中でため息をついた。

12・Room

その後夢姫は知ったことなのだが、この世界の怪獣さん達は、全員、回復力が人間よりもうんと高いということがわかりました。

「おお！

ここが私の部屋なんですか！？」

いいんですか！？こんなに広くて？」

「みんなこれくらいだから大丈夫よ。

気に入った？」

「もちろんですとも！」

夢姫がレインに連れてこられたのはある一室。

そこは、まるでホテルの一室のように整えられていて、かつ、一部屋が学校の教室一つよりも大きい！

しかも、それが二つもあり、風呂やトイレも別としてついているのだから、感動しないわけがない。

「そつえば、私の日用品ってどうすればいいんですか？」

私、お金もなんにも持ってないんですけど……」

夢姫は、ベッドに腰掛けて、ふと思つた事を口にした。

この世界に来てから、荷物はどこかに消えていたし、今、持っている物と言ったら、身につけている服、くらいだろうか。

夢姫の心配そうな顔を見て、レインは、ああ、と先ほどの鼻血など一ミリも感じさせない朗らかな笑顔で言った。

「貴女をここに呼んでしまったそもその原因は理事長だから、あの方も、それをしっかり反省しているから、夢姫の日用品とか、お金とか、全部出してくれるって、太っ腹よねー！」

あの人痩せてるけど！」

「そうなんですか!？」

今度、御礼しに行かないと…」

「ま、それはそのうちね。」

疲れてるだろうから、しばらくはダメ。

後、買い物行く時はアタシが連れて行ってあげるわ。

男共に連れて行かせたら、怖くて怖くてしょうがない！」

特にあのイグアナ!行く先々で女口説きやがって!水中戦なら100%勝てるのに!とレインはガリガリガリと形の良い親指の爪を噛んでいた。

正直その顔がむちゃくちゃ怖かったことを、夢姫は言えなかった。言えるわけなかった。

「は、はあ、ありがとうございます。」

近いうち、宜しく願います」

「そうね、そうよね。」

誰に声かけられても、OKしちゃダメよ?

もしOKしたら、そいつ等全員溺死させてやるわ」

セイレーンって、つまり人魚のことだから、船を歌声でひき寄せて、海の底に引きずり込むってところから来てるのかなその考えは。

夢姫はぼんやりと考える。

外見とのギャップがありすぎて困る。

これで男だったらさぞかしモテただろうに…。あの鼻血のことがなければ。

「わかりましたって！」

絶対OKしませんし、声かけられないから大丈夫です」

「それはないわよ。ユメキすっごく可愛いもの。」

まあ、とりあえず、お姉さんは安心しました。

色々あったけど、それじゃあ、また明日」

そう言っつて、レインは微笑みながら夢姫の部屋を出たのだが、あつ

！忘れてた！と言っつてすぐさま部屋に戻ってきた。

「ユメキ、お腹すいてない？」

こっちに来てからなんにも食べてないんでしょっつ？

そろそろ食堂も開く時間だから一緒に行きましょうよ」

そっついえば、と、夢姫はちらりと窓の外に目を向ける。

この部屋は眺めもよく、綺麗な夕日を一望できた。

(この世界にも、ちゃんと時間帯ってあるんだなあ)

と夢姫は思ったが、よくよく見ると、部屋に時計があった。

現在 五時三十分

個人的には、少々早い気もするが、この世界に来てから色々あつて、かつ、なんにも食べてないので、お腹は減っている。

意識し出すと、更に胃が変な音を立てるのがわかった。

「そうですね。」

行きましょう。

ていうか、生徒じゃない私が食堂で食べてもいいんですか？」

「うん。」

ここは、メイドさんも、食堂で働く係以外は、私服に着替えてなら食べてもいいことになっているの」

そう言っつて、レインは、再び夢姫の手を取っつて、足早に歩き始めた。

食堂に近づくにつれて生徒の数も増えてくる。

相変わらずジロジロと見られているのだが、レインが視線だけになんて見てんだオラア」と脅すだけでその視線はひっこんだ。

だが、いざ、食堂に入ると、

「ぬぁんでアンタ達がいんのよ！！」

と、レインが激怒して叫び、

レインが叫んだ先には、先ほど別れた三人がいた。

しかも、その三人が座っているテーブル以外、他は空いていなかった。

13・Dining room

「この二人に説教するように理事長から頼まれたので」

「ご飯を食べに」

「ユメキに会えると思って」

「この欲望に忠実なカナヘビがあッ！！」

レインは今にも飛び掛らんばかりだったが、ここは食堂ということ
で自制しているのか、でも、隣にいる夢姫には、レインの出す恐ろ
しい歯軋りが聞こえていた。

「素面で女を口説くとは、さぞ手馴れているんでしょうねえ！

ついこの間まで、娼館なんかで女遊びばかりしていただろうに！

恥を知れ！ドラゴンっていうのは欲深ばかり！

ユメキ！よく聴いておきなさい！

このカナヘビは、ついこの間までねえ・・・」

「言うなーッ！

それ以上言うな！この人面魚！

てめえは男のプライドってヤツがわからないのか！このアバズレ！」

「誰が人面魚よ！セイレーンよ！

それに女だもの！しかも、ドラゴンに比べたら、アタシの一族の方
がよっぽど一途で、女遊びなんてしないわ！」

世間体も何もあったものではないくらい大声で、かつ、遠慮のない
言葉で互いを罵倒しあう二人に、夢姫はええっ！？という顔をして、
周りの様子を伺うと、周りの生徒も、この二人の言い争いは慣れっ
こらしく、特に気にすることなく、穏やかに自分の食事を平らげて

いて、どちらかといえば、夢姫の方が注目を集めていた。

リフォンや、ロイシヤスも、夢姫に「とりあえず席に座ったら？」
「取られますよ」と声をかけ、いかにもほのぼのといった様子で、
リフォンは、とても常人が食べる量ではない料理の数々を、ロイシヤスはユニコーンだからなのか、全部野菜の青々とした料理をもくもくと食べていた。

ついでに、グランドールの食事は、ドラゴンだからだろう、全部肉だった。しかも、どう見ても生と思われるものもちらほら。

「随分、この二人の対話に慣れているんですね・・・」

夢姫がリフォンとロイシヤスの二人に言うと、二人は顔を見合わせ
た後、声を揃えて

「「そりゃあ飽きるほど見てきたので」「」

と答えた。しかも、その後のため息のタイミングも同じと来た。これも無表情なリフォンが不思議である。

「いい加減、決闘でもして、白黒つけてほしいよ」

「あ、でもそういえば、近いうち、あるんじゃないですかね、トーナメント戦のバトルの大会」

また殴り合い関係だと思ったので、夢姫は今の言葉をスルーした。

「そういえば、ご飯ってどこで取って来るんですか？注文？」

周りの生徒はみんな食事をしているが、人が多いため、どうやって食事を準備？しているのかわからない。

「バイキング形式。」

ほら、前の方に大皿とかいっぱいあるでしょ？
あそこからとってくんの。

人気があるやつ早く行かないとなくなるよ、
ついでに、日ごとにメニユーは変わるけど、今日は具たくさん
の魚貝巻きがオススメ」

「あ、ありがとうございます！」

夢姫は二人にぺこっと頭を下げると、比較的長身が多い人混みの中
をてけてけと歩いて行った。
人混みの中に入ると、夢姫は小さいのですぐに見えなくなる。

夢姫の姿が見えなくなると、ロイシヤスは意地悪そうな目をリフォ
ンに向けた。

「珍しいですねえ、貴方が女の子に多く語るなんて。

いつもなら、無言か、一言くらいしか言わないのに」

「あの子は他の女とはタイプが違うから面白いんだよ。

俺がここに連れてくる時、めちゃくちゃ怯えてるのに、心の中で

一人にしないで”って言うてるのがわかったもん」

「へえ、やつと好みの子が現われましたか。

そりゃよかった」

ロイシヤスは、全くよくなさそうな声を出して、再び目の前の野菜
料理を食べにかかる。

リフォンも、そんなロイシヤスのことをじっと見つめたが、すぐに
自分の料理を食べ始めた。

そこで、グランドールとレインの言い争いはひとまず終わったらしく、
グランドールは乱暴に肉にがつつき始め、レインは「ユメキが
先に行っちゃったじゃないのよ！」と憎たらしそくにグランドール
を一睨みして、さっさと夢姫の後を追った。

*

無事、ご飯を取り、リフォンから勧められた魚貝巻きもゲットした夢姫が、レインよりも遅く席に戻ると、レインは、刺身盛りのようなものにがつつきながら、先ほどよりもずっと不機嫌そうな顔で、グランドールではなく、目の前の三人を睨んでいた

「どうしたんですか？」

わけのわからない夢姫が聞くと、グランドールはにやっと笑い、リフォンは無表情で、ロイヤスは淡く微笑んでいて、何もわからない。

そこで、夢姫が、イスに座って、レインに改めて聞くと、レインはいわしよりも緑っぱく、熱帯魚のような小ぶりの魚を丸飲みにして怒った口調で言った。

「コイツらが、買い物、行きたいんだってさ、ユメキと！」

13 Dining room (後書き)

…魚目巻きってなんだろう？

14・Rain VS Grandole

「あ、ついでに言うと、非常に残念なのですが、私は行けないんです。

なので、この埋め合わせはまた次の機会に二人っきりで……」

「させないわよ草食動物。

まったく、油断も隙もないわねえ……！」

ちやつかり出かける約束をしているロイシャスに威嚇しながら、レインはバリバリと魚の骨をかみ砕く。

「まあ、アンタはいいとして、

その二人よ二人！

どういふことなのよ！？

アタシとユメキのデートを邪魔するっていつの……！」

「それくらいいいじゃねえかよ！

第一、人数多い方が色々と楽だろ？

しかも明日学院休みだし！

ユメキはそれでいいよな？」

「……えっ！？」

もぐもぐとパンを食べていた夢姫は、突然自分にふられた話題に頭がついていけなくなっている。

「ユメキに話しをふらなくてくれる？」

確かに、明日は学院が休みだから行くこうと思っていたけど、

それは、アタシと、ユメキのこと！

ついてくんな！」

「ふーん、なら、こっちにも切り札があるんだぞ？」

そう言つて、グランドールが懐からスツと出したのは、数枚の写真。

そして、それを見て、レインが「きゃああああつ！」と、可愛い悲鳴とは裏腹に、目をカツと開いて、歯をガチガチと鳴らし、全身を震わせるという恐ろしい状態で、それをグランドールから取り上げようとすする。

「これ、この人面魚が、昔、一人の女の子に一目ぼれして、その子にストーリーマガイのこととしてた時の写真。

面白いから撮った。

結局ぎつたぎたにふられてたけどな」

それって盗撮では…と、グランドールに声をかけようとした夢姫を遮ったのは、他にもないレイン。

これまでにないくらい怒りで顔を紅潮させて、まるで噴火寸前の火山のようだ。

「ああああああアンタッ！

それをユメキの前で見せるの…！！？」

よ、よりにもよって今！？」

「お前だつてさっき俺の黒歴史ばらしただろー？

ユメキの前でー！

お互い様ー」

ついでに、俺の黒歴史は、ほとんど学院全域に広がってるからもう訂正すんのも諦めてるけど、お前はどうかかなー？こういうこと、今までずっと隠してきたんじゃないのかなー？

と、グランドールは立ち上がって、レインが絶対に届かないであろう場所で写真をひらひらと揺らす。

レインは、それをめいっぱい背伸びして取り返そうとしているのだが、二メートルを越えているグランドールに届くわけがない。

「返してほしかったら、買い物する権、俺とリフォンにも譲れよ。ていうかお前帰れ」

「んなことさせられるわけないでしょ！

アンタはまたそう言ってユメキをどこかに連れ込もうとして…！

この欲に飢えた化け物め！」

「いや、どっちかと言えばお前の方が飢えていると思うぞ。

今にもユメキに齧りつきそうだからな」

「否定はしないけど、アタシはそんなことしない！

フェミニストだからね！」

「それはどうだろうな」

そうして、二人は三分ほど、威嚇を威嚇で返すゲリラ戦（夢姫にとつては）をやっていたのだが、これは、グランドールの言う事を聞かなければ、あの写真を学院内全域にばら撒かれる、そして、そうになると、個人的にも立場がかなり危うくなり、学院中の女子生徒からの評価がガクンと一気に下がるであろう。それはマズイ、ただでさえ今も夢姫に知られて心情的に最悪なのに、これ以上悪くなったら乾燥して死んでしまう！セイレーンは海の怪獣だから乾燥は何よ

り敵だというのに！と考えたレインは、渋々、渋々、答えを出した。

「……わかったわよ。」

でも、どうせ休みは二日間ある。

明日は、アタシとユメキで買い物に行く。

女の子同士の方が、服とか色々買いやすいし。

明後日は、嫌々だが、行ってくればいいじゃない。

リフォン、その時は、アンタが、ユメキを守んなさいよ！」

グランドールを心底憎らしそうに涙目で見つめ、リフォンにお願いだからと言わんばかりに頼んだ。

グランドールは、やった、と口角を吊り上げ、リフォンも、了解、と言って、食後のデザートのパフェをもりもりと食べ進めた。

「ごめんね。ユメキ。」

でも、アタシの名前を呼べば、すぐに飛んで行くから。飛べないけど」

「え、あ、だ、大丈夫ですよ。」

そんな酷いことはされませんって！」

あわあわとしながらも、しっかりと答える夢姫に、レインはすつと涙を拭いながら笑い、グランドールから写真をもぎ取った

まるで時代劇の母と子の別れのようです。

「じゃあ、とりあえず、部屋に戻りましょう。」

あ、ついでに、メイドの仕事が明日と明後日の休日が終わっての明々後日だから。

じゃあ、なんか疲れたから、寝る」

そう言って、レインは夢姫の手を引いて食堂を出る。
後ろでは、グラインドール達がまったねーと軽く手を振っていた。

その日、あまりにも疲れたので、部屋に帰ってくるなり、ベッドに倒れこんだことしか覚えてなかった。

そして次の日の朝、むくりとベッドから起き上がると、お約束のよう「ああ、これは夢じゃないんだな・・・」とがっくりし、次には、やべえ、昨日から服替えてねえ！あ、でもそもそも服がないか。そうか、それで今日買いに行くのか、と時計を見ると、なんとまだ七時三十分。

今日は休日だといっていたし、誰も来ないから、これ幸いと、まだ寝ていようと、ベッドの中に潜り込んだ夢姫の耳に、ババーンッ！豪快な音を立てて、ドアが開く音がした。

「ユメキ！

迎えに来たわよマイプリンセス！」

ドアの前において、部屋に入ってきたのは、白馬に乗った王子様、ではなく、真っ白だがハリウッドセレブのお嬢さんか何かを着るようなワンピースを着たとっても美しいレインさんでした。

寝起きで意識も半分眠っていた夢姫には、その姿が不覚にも女神様のように見えた。

「さ、さっそく行くわよ！

時は金なり！タイムイズマネーと言っしね！」

「あ、朝ごはんはいいんですか！？」

そもそも私、髪の毛とか、整えてもないし、準備も・・・」

「朝ごはんは、学院外のレストランか何かで食べましょ。」

市場とかだってもうやってるし、休日は、みんな早めにやってるのよ。

だって、準備も何も、何にも持っていないから買いに行くんでしょー？

それに、服とか買ったなら、髪の毛もちゃんとセットしてあげるから大丈夫よ。

早く行かないと、他の生徒達にとられちゃうわー！」

レインは、にこっと笑うと、夢姫の手を取って、廊下に出ると、一目散に階段に向かって走り出した。

廊下には、他の生徒もいて、夢姫とレインが走り抜けると、全員、なんだなんだ？という顔をした。

だが、レインはそんなこと全く気にしないというか、気づいていないらしく、暢気に、しかもけっこう上手に鼻歌まで歌ってしまっている様だ。

「さあて、どこに行こうかしら？」

とりあえず、まず、服よね。

下着とか色々買って、日用品、その後、町を一通り回りつつ、カフェでお茶っていうのがいいわね！

楽しみだわー！

久しぶりでー！」

レインがそんなことを言っている間に、いつのまにか、全長三十メートルはあるドデカイ門があり、生徒達が列を作り、一人一人、門番のような人に何かを出して、外に出て行った。

「あれが、外に出る門ですか？」

「そうよ。」

出るためには、生徒帳が必要だけど、ユメキは特別だから大丈夫よ！

そう言つて、生徒達の列に並ぶと、しばらくして夢姫達の番が来た。

「君、この学院の生徒？」

生徒帳持っていないなら、不法侵入になるぞ」

なぜ引つかかるし。

大丈夫なんじゃないんですか！？とレインに訴えかけると、レインは、あれっ？という顔をしつつも、夢姫を助けるためにすっと前に進み出た。

「この子、理事長直属のメイドですの。」

わかっていらっしやらないなら、ここで力付くでもわからしてあげるわよ？」

門番を見つめるレインの顔は、有無を、というか、呼吸すら許さないような顔で、その場にいた全員が、ブリザードに襲われたが如く固まり、見事、夢姫は通ることができた。

「………いいんですか？」

「間違つたことは言っていないわ。」

大丈夫よ」

レインの行動にびくびくしながらも、学院の外に出る。

そこは、緩やかな坂の頂上に位置しており、町をその場から一望できた。

「in Europe!？」

そこは、イタリア、イギリス、フランス、ギリシャ、オランダ、ドイツなどの国の美しい町並みを一まとめにしたようなあまりにも美しい町でした。

真っ白なレンガの家、だけど、屋根は赤かったり、黒かったり、様々だ。

地面には、ぴっしりと赤茶色のレンガが敷き詰められており、高級感がたつぶりだ。

町には、美しい木や、大きな植木鉢に入れられた美しい花々が咲き乱れ、道行く人の心を癒す。

もちろん、それは夢姫とて例外ではなく、こういう美しい町並みも、夢姫の心にドストライクしたのだ。

それに感動して涙を流しそうになりながら、嬉しそうにレインと共に、その坂を下り、そして、坂を下ると、何十倍も素敵になった町並みについてポロリと涙が出てしまい、レインを慌てさせ、それに大丈夫ですといながら、近くのレストランで美味しいパスタを食べ、それを食べ終わると、二人で洋服を買いにお店を回り、そこでレインが夢姫のために買った服の量が多すぎたので、お金は本当に大丈夫なんですか!？と聞くと、理事長からももらったものなので全然大丈夫だと言うレインに、ひとまず安心して、買った服に着替えて、髪も、夢姫自身があんぐりするほど綺麗に整えてもらって、そのいきおいで、様々な日用品を買い、昼に、近くのお洒落なカフェでサンドイッチを食べ、しばしの間のんびりとして、その

後、また、綺麗な町を散歩しつつ、夕方までとても楽しんだ。

唯一困ったことといえば、服を選んでいるときに、レインが夢姫に「この服を着て！」とどうみても普通の人が着る服ではないものを持ってハアハアしていたり、日用品を選ぶ夢姫を見てハアハアしたり、いつのまにか持っていたカメラで夢姫のことを撮ってハアハアしていた、ということだろうか。

まあ、こうして、夢姫は一日を堪能し、夢姫は、荷物を持って部屋に帰ってくるなり、昨日と同じように、ベッドに倒れこんでそのままぐーすかと寝てしまったのだ。

「……………あの、」

「なんだ、ユメキ？」

「なんか……………すごいですね……………」

夢姫が、ボソリとそんなことを言ったのにはわけがある。

数時間前

次の日の朝、今日も、八時頃に目が覚めたのだが、グランドール達から、待ち合わせ時間についてなど、全く聞いてなかったのも、もうひと眠りしようと、瞼を閉じかけたのだが、そこで、窓からバツサバツサと、灰色のフクロウが入ってきたのだ。

そして、そのフクロウは、足に括りつけられていた手紙をスツと夢姫の方へと押しやる。

夢姫が、手紙を括りつけていた紐を外すと、フクロウは飛び去って行き、夢姫が不審に思いつつも、手紙を開くと、綺麗な字で、

『11時 学院外、時計塔の前にて集合 遅刻厳守 by Grandole and Rephone』

とだけ書かれていたのだ。

ついでに、あのフクロウが、この世界で、伝書鳩的な役割を果たし

ていたと知るのは、まだ先である。

そして、それを見た瞬間、時間に安心して夢姫はまた眠りこけた。

夢姫が次に目を覚ましたのは十時。

「あるえー、寝すぎたー」と独り言を言いつつ、昨日レインと買った（買ってもらった）服を適当に選んで着る。

正直言つて、服があまりにも可愛すぎて、着ている方が疲れてしまうような服だ。

ゴスロリのようなフワツとしたスカートの下に、それとセットの黒く長めのタイツのようなズボンを合わせる。
スカートなんて嫌いなんだよお！！

上は、赤いリボンのついたお嬢様風のブラウス。

それで髪の毛を整えると、まるで自分ではない気がしてくる。

本当は、こんな服は嫌だが、致し方ない。

これでも、持っている洋服の中では一番シンプルなのだから。

レインはどこか自分をリカちゃん人形的なものにしている気がして夢姫はならなかった。

そして、それを着て、昨日の門のところまで行き、顔を青白くする門番にっこりと笑いかけ、そのまま通り過ぎる。

いわゆる顔パスってやつですな。

その門を抜けると、すぐにわかるくらい大きな時計塔がある。
その前が待ち合わせ場所だろう。

昨日、レインにも案内してもらったので、場所の確認はばっちりだ。

時間を確認しつつ、時計台の前まで行って、周りのカップル達が
ちやいちゃする中、ぼけっと一人寂しく孤独に夢姫が待っていると、

「おっ、ユメキいた！」

「おなか減ったー・・・」

と言ってこちらに近づいてくる二つの人影があった。

グランドールとリフォンだ。

だが、そのいつもの違う姿に、夢姫は目を見開いた。

グランドールは長い縦ロールの金髪を頭の後ろで結びあげ、ポニー
テールにしている。

そうすることで、意外と筋肉質な身体の線が、モデルが着るような
オシャレなコートに出てきている。下は黒のスラックスで、グラン
ドールの足の長さが強調されていた。こうなると、どう見ても女に
は見えなくなる。

リフォンは、淡い亜麻色のセーターに、下は鳥か何かの刺繍の入っ
たジーンズで、グランドールに比べればシンプルなものだが、それ
だけに、リフォンの性格と容姿をよくあらわしているように見えた。

ダメだ、次元が違いすぎる。

今更思つてももう遅い、夢姫は、今からあんな美形らと過ごさなくてはいけないと思うと、普通なら大喜びする所を、うう〜・・・と呻き声を出した。

荷が重すぎるのだ。レベルが高すぎて。

「あー、ユメキ、すっごい可愛い」

「っ！ちよ、これあの人面魚が選んだのか!？」

思いつき顔を逸らすグランドールに、うん、と夢姫は答える。

グランドールが、「センス良すぎだろ・・・」と一人れずボソツと呟いていたのは余談である。

「・・・あの、」

「なに、ユメキ？」

「なんか・・・すごいですね・・・」

ここで、最初に戻るわけだが、なにがすごいかって、服とか、顔とかも、ものすごくスゴイんだけど、何より、この二人に向けられる、女性の視線がスゴイ。

むんむん、というかギラギラ？

しかも、夢姫に対しては、嫉妬オーラ全開で向けてくるので、多分、そのうち、町中で後ろから刺されるんじゃないだろうか。

女の嫉妬は怖い。

そう、つくづく思ったのだが、その原因を作っている二人は全然わからないようで、グランドールは「ん？」という表情をし、リフオンも無表情で首を傾げていた。

「……そういえば、今日、どこ行くの？」

特に買いたいものはないんだけど……」

「何って……せつかくのデートだぞ？」

行けるとこまで行っちゃいまーす！」

「デートなの？」

それにグランドル、その言い方、周囲から誤解されるからやめてよ。

俺の立場も危うくなる」

「大丈夫、男の趣味はない」

「ねえ、それに私の拒否権は入らないの？」

大丈夫、夢姫を満足させてあげられるテクは持っているよ、にこつと笑うグランドルに、なぜだがぞわつと鳥肌が立った。

助けを求めてリフォンを見ると、彼は「やめておいてあげなよ」と言っ、グランドルから距離をとってくれた。

グランドルは、ちえつと不服そうにしたが、「とりあえず、あの魚女だけ夢姫に服買ったとか、許せねえから、俺達が、好みの服買ってやるよ」「それなら、いつのもあそこがいいんじゃないかな？品揃えいいし」リフォンの言葉に、グランドルはにやりと、リフォンも、フツと軽く笑って、夢姫の手を引いた。

夢姫も、なすがままで、女達の嫉妬の視線を一身に受けながら、ここから立ちされるのなんだってするという思いで二人に引かれて行った。

グランドルとリフォンは、夢姫を、レインと行ったところとはまた違う大きな、どうみても高級ブランドらしき店に連れてきて、店員に「この子に似合う服、全部持ってきて！」「アクセサリーもね」と言っ、かしまりました、と頷いた店員に引きずられ、衣装室のようなところで着せ替え人形の如く、何枚も着せられ、着替える

度にグランドールが「今まで会ってきた女性で一番可愛い」と夢姫を口説き、リフォンも「そこら辺にいる女よりずっといいね」と褒め称え、夢姫は、そんなこと言われるのが初めてだったので、みるみる顔を真っ赤にして逃げようとしたが、瞬く間に店員達に捕まえられた。

そして、じれったくなったグランドールが、「んじゃ、これ全部お願いな」と言っ、持ってきた殆どの服を買って「じゃあ、彼女に似合う小物、全部買い取るよ」とリフォンが行って、夢姫の必死の制止の言葉もむなしく、見事お買い上げとなった。その後、夢姫はこの二人が大富豪であることを知ったのだが。

そして、大量の荷物を、後で部屋に送ってもらうことになり、二人にこれでもかというほどの御礼を言いながら、店を出て、帰ろうと足を進めていたのだが、ふと後ろを振り返ると、

「グランドールさん？
リフォンさん？」

見れば、二人はどこにもいない。

迷子…？はぐれた…！

夢姫が元来た道を慌てて引き返そうとすると、とたん、ガシッと、誰かに腕を掴まれた。

夢姫が振り向くと、そこにいたのは、いかにも感じの悪そうな数人の男達。

ヤバイ、と瞬間的に思った。

でも、腕を掴まれているので逃げられない。

しかも、時刻は夕方、学院は、門限が厳しいので、生徒達はできるだけ早く帰り、人通りも少ない、しかも、ここは声が聞こえにくく、人も通らず、かつ、暗い場所だった。

顔を青くする夢姫に、夢姫の腕を掴んだ男は、下品に舌なめずりしながら言った。

「おい、お嬢ちゃん、迷子かあ？」

「いいえ、違います。」

離して下さい今急いでいるんです」

口早にそう言っって手を振りほどこうとするが、さすがに男と女の差。敵わない。

「つれねえなあー…こんな可愛い子、ほっといたらすぐとられちゃうよお。」

せつかくだから、ここで頂いちゃいましょーか？」

腕を掴む男が、甘ったるい声でそんなことを言つと、周りの男達も、いいねえ、とニヤニヤしながら頷く。

同じニヤニヤ笑いでも、なんでこう、上品さのあふれるロイシャスの笑いと違うのだろう。

真白な彼を思い出して、夢姫は叫び声を上げて逃げようとするが、すつと、首筋にナイフを突き付けられていた。

「おおつと、もし、声出したり、逃げようとしたら、喉に突き立てるぜ？」

おい、お前ら、この女の服脱がせ」

とっさのことに頭がついていけない。

服を脱がす？私の？

いくら動揺していても、これからされることなんて想像できる。

腕を掴んでいる男が、他の男に指示を出して、あっという間に夢姫を取り囲む。

サツと顔が青ざめるのがわかったが、そんなことになって止まるわけでもない。

だが、助けを求めれば殺される。

あの二人は今、どこにいるのだろう。

おそらく、自分を探しているに違いない。申し訳ないことになった。唇を噛むと、ビリッという音がしてブラウスが他の男が持っていたナイフで切られる音がした。

自分で言うのもなんだけど、可愛くねえ女。こんな時、涙でも流して保護欲でも誘えばいいのに。

でも、そのうち飽きるかな、と自虐的に考えている自分がいた。

「さつきから見てたんだかよおー、あの男のツレがいて中々手エ出せなかつたんだよなあー。

ようやく離れてくれたよ。いやあ、人送っておいてよかった。

今頃、探し回ってるんじゃないか？」

やっぱり、はぐれたのはコイツらの差し金か。

わざとらしく言うところから、おそらく、二人はここから結構遠くしかも、ここがわからないくらいの人混みか何かの中にいるに違いない。

ビリッ　ブラウスが大きく切られ、下着のシャツがさらけ出された。

「そもそも、あの学院の有名人が、こんな女に構うとはなあ。こんなところでいいカモに出会うとは冴えてるよな」

あの二人はけっこう知られているらしい、確かに、金持ちだったし、女にモテるし、でも、何でこんな私をここへ一緒に連れてきてくれたのだろう。ここへ、私を召喚してしまったのは確かにそうだけど、それはもう何とも思っていない。

もしかしたら、あの二人は、こんな私に情けをかけてこんな風にかまってくれるのかもしれない。
絶対そうだ。

だって、そうでなければ、あんな美形が構ってくるわけがない。

それならそれで、私がいなくなった方がいいんだろう。

それでも、こんな男の手にかかるとはなあ、とぼんやり考えていた。ザクザクザクツ、キレのいい音がして、持っていたらしい布切り鋏で下着のシャツが切られて、肩や胸元が大気にさらけ出されるのがわかった。

そして、一気に裸にされるのかと思ったら、次は、着ているズボンとスカートを同時に切り始めたのだ。

怖い。

いい加減、夢姫の自己防衛本能が目覚めてきて、ごそごそと動こうとするが、そうすればするほど、首にナイフが強く当てられ、ツィと一筋の血が、鎖骨の辺りまで流れるのが見えた。

「つい…！」

ジヨキンツとスカートがばさりと地面に落ち、ズボンがスタスタになって脱がされる。
もうあとは下着しかない。

「いやだ…っ！」

零れたのは僅かな声で、自分でも情けなかった。

男達が一斉ににやにやと笑う。

それがあの二人の怪獣よりもずっと化け物じみて見えた。

後ろは壁、周りは男、逃げる場所などどこにもない。

必死に手で体を隠そうとするが、両手は男達に掴まれてどうすることもできない。

「うがああああああああッ！！！！」

突然、一人の男から悲鳴が上がった。

他の男達も、その声の主の男を見ると、その手には、鋭利なナイフが貫通していた。

それを見て、他の男達も警戒の色を濃くする。
こんなところに入って来るヤツはいないと思っていたのだろう。

「ぎゃあああああッ！ナイフが、ナイフがあっ！」

上から降って来るようにして、夢姫の手を掴んでいた男の腕に数本のナイフが刺さった。

そこで、男達が一斉に青ざめた。

カッーンカッーン ブーツが何かの靴音が、こちらに向かってくる。

その音を聞いた男達が、さっと武器を構えて靴音の主を待ち構えるが、いつまで経っても出てこない。

数分経つても出てこないの、男達が全員で顔を見合わせ、ナイフを刺された男は、苦悶の表情を浮かべながら血の吹き出す手を押さえていた。

だが、

カカカカツと何かが一斉に刺さる音がしたと思ったら、何十本ものナイフが、音もなく空から降ってきたのだ。

「うわあああああッ！！やめろおおおッ」

「血が血がああッ！」

「狼っ、人喰い狼か…ッ！」

「あああああああッ！！」

「ちくしょお…！何でこんなところにアイツがいたよっ！！」

一瞬のうちに血まみれとなった男達は、何やら叫びつつ、夢姫を置いてどこかに走って行った。

空からナイフが降ってきた時、夢姫も殺される、と思ったのだが、幸いなことに、ナイフは一本も刺さらなかった。

男達が去ってから、カッーンカッーンと、再びこちらに近づいてきた靴音に、夢姫はびくりと体を震わせた。

男達が去ったのはいいが、もしかしたら、このナイフの持ち主が、自分も刺そうとしているのかもしれない。

そう思つて、体を手で隠しつつ、靴音の持ち主に向かって身構えろと、

そこに立っていたのは、学院の生徒であろう一人の青年。

「君、大丈夫かい？」

だが、その顔を見て、愕然とした。

「っあ……ッ！」

声がつまく出なかった。

ただ、目だけは、青年から離せなかった。

だって、あまりにも、似ていたから。

その昔、自分が本気で惚れた男に。

「あーあ、あんな怖い目に遭ったんだもんね。
大丈夫だよ。

あいつ等は全員どっか行つたから」

そう言つて、青年は、自分の着ていた上着を、そつと夢姫にかけてくれた。

そうして、もう一度、大丈夫？と夢姫に笑いかけながら聞いてきた。

三歳上で、今高校三年の姉に中学二年から高校二年まで家庭教師をしていた男、それが、夢姫が本気で惚れた相手だった。名前は…なんだつただろうか。今となつては思い出せない。思い出したくもない。

夢姫が小学校五年の時に、母親が連れてきて、そこで夢姫はその男に一目惚れというものをした。

その頃は、けっこう面食いだったのだと思う。

違つところと言えば、夢姫の惚れた男は日本人で、二十六歳ぐらいだったと思うが、目の前の青年は、どう見ても綺麗な外人で、歳は、二十にいくかいかないか。そして、目の色と、髪形だろう。

オッドアイというヤツで右はサファイアのような青、左はアメジストのような紫だった。

髪形は、惚れた男と同じ、胡桃色で、だが、やんわりとしたショートカットだった男とは全然違い、後ろの長髪をそのまま流して、上の方の髪は、結びあげてあるけれども、そのまま広がらせていた。

青年は、近くに落ちてあったナイフを拾うと、取り出したハンカチで血を拭き取って、懐にしまい込んだ。

「全く、か弱い女の子を襲うなんて、信じられないな。後で、理事長に連絡しておこう」

ふう、青年がため息をついている間も、夢姫は目をそらせなかった。そして、そんな夢姫の視線に気付いたのか、青年は微笑んだ。

見れば見るほど似ていた。

いや、でも、絶対に違う。

「俺は、学院の生徒で、フェンリルって言うんだ。よろしくね、ユメキちゃん」

あの人は、こんな風に、冷たい笑い方をしてはいなかった。

姉の家庭教師の男は、姉に約三年間勉強を教えていて、私はその人に一目惚れした。

だが、落ちこぼれの私を嫌う姉は、私の思いを知っていたらしい。時折、にやりと、意地悪そうな笑みを私に向け、わざとらしく、男に腕を絡ませ、部屋に入って行くのを何度も見たことがある。

その一目惚れした男を奪われたから嫌いなのではない、その姉の笑みが、ずっと嫌いだった。

だが、それよりももっと酷かったのだ。実際は。

「…なんで私の名前を知っているんですか」

夢姫が体を隠しつつ、警戒しながら言うと、フェンリルと名乗った青年はんー、と言って口を開いた。

「君、学院じゃかなりの有名人なんだよねえ。理事長直属のメイドさん…だっけか」

「まだ数日しか経ってないのに…」
そんなに広まってるのか、と心中で呟く。

「だって、君、グラウンドのバトルで問題起こしたらしいじゃないか。」

すぐに広まるだろう？普通」

フェンリルは、目を細めてにこりと夢姫に笑いかけるが、その笑みに、夢姫は心の底からぞくりとした。

男達に服を切られた時など比ではないくらいの。

「俺はね、君に興味があるんだ」

この人の目は、私を全く信じていない。私を、映してはいない。

「君、他の世界からやってきたんだって？

面白いよね。

前代未聞だよ」

くるくると、片手でナイフを弄びながら、一步一步夢姫に近づく。そして、一步一步こちらに近づくたびに、体が震えた。

「会いたかった。すつごく。

こんなところで会えるなんて、不謹慎だと思っけど、本当に感謝感激だよ」

この人は、笑顔で人を傷付けられる人だ。あの男達のように。

この笑顔が近づいてくる度に、頭を巡る思い出したくもない記憶。

そう、家庭教師なんて甘いものじゃなかったのだ。
姉と、その教師は、

恋仲だった。

ある日、姉が夜遅くまで勉強し、家庭教師の男も、我が家に泊まりがけで勉強を見ることになった。

そして、真夜中。

トイレに行きたくなって、起き出した夢姫は、姉の部屋から、変な物音がすると思って、ドアの隙間から、姉の部屋を覗いてみたのだ。

見なければよかったのだ。

部屋から聞こえる甘い嬌声、それを聞いただけでも、なにをしているかなど一目瞭然だった。

夢姫は、音をたてないように、でも足早にその場を離れた。

次の日、姉と男の二人は、何事もなかったかのようにしていたが、姉は、夢姫の思いに気付いていたらしく、時折、「ざまあみろ」と

いう笑みを夢姫に向けていた。

姉のことを大嫌いになったのはその日だった。

「でも、せつかく会えたのに、こんなところにいるのもなんだし、移動しようか、血生臭いし。まあ、俺がやったんだけど。立てる？」

夢姫は、フェンリルの言葉にびくっと再び体を震わせ、こくりと頷く。だが、いざ立ち上がろうとすると、先ほどのことで腰が抜けてしまったのか、力がうまく入らなかった。その様子に、気付いたのか、フェンリルは、クスクスと面白そうに笑って、「ほら、俺が運んであげるよ」と、俗に言う、お姫様だっこをした。

「えっ!？」

そ、わ、んなあっ!？」

「声になってないよ？」

面白いなあ、君は「

夢姫は、かけてもらった上着で体を隠しつつ、変な声を出してしま
った。

そりゃそうだ、お姫様だっこのなんて、この歳でされるとは思ってい
なかつたのだから。

フェンリルは、そんなことをわかつていないのかわかつていないのか、
ひたすら楽しそうな笑みを浮かべるだけだった。

その笑みを見ていると、先ほどナイフで男達を刺していたのと同じ
人物だとは思えないし、今も、錯覚かもしれないが、さきほどより
も視線が柔らかくなった気がする。

状態が状態なので、下手に暴れることもできず（フェンリルも怖い
し）、お姫様だっこの状態のまま、明るい場所へと出ていく。

幸いにも、人の数は先ほどよりもぐっと減り、数えるほどしかない
いが、それでも、夢姫の姿は注目の的となっていた。

このまま学院の方へと向かうのかな、それはさすがに嫌だな、と夢
姫は思い、悩んでいたところで、

「ユメキっ!？」

どうしたんだその格好」

「大丈夫？」

グランドールと、リフォンが、向こうからかけつけて来た。

二人とも、はあはあと息を切らしていて、よほど必死に夢姫を探し
てくれていたのだとわかる。

「やあ、グランドール、リフォン。

この子、君達の連れ？」

「ああ、そうだ、だが、なんでてめえがここにいるんだ、フェンリ
ル」

「酷いな、ユメキちゃんの危機を救ったつてのに、まあ、詳しい事
情はこの子から聞いてよ」

そう言つて、フェンリルは、お姫様だつこの状態の夢姫をリフォンへと渡す。

リフォンは、夢姫を受け取つた途端、ぎゅっと抱きしめるように腕の力が強くなつたのに、夢姫は気付いた。

フェンリルは、グランドールの激怒を押し殺しているような顔と、リフォンの、無表情だが、何かを耐えているような顔、そして、夢姫の青ざめている顔を一樣に見る。そして、

「じゃ、またね、ユメキちゃん」

そう言つて、フェンリルは夢姫の額にキスを落として、去って行った。

「ユメキ、何があった!？」

もしかしてあの狼に何かされたか!？」

そうだろう!？そんなんだろう!？」

「男はみんな狼だーってよくレインが言ってたけど、アイツは間違
いなく狼中の狼だから、何されてもおかしくない」

フェンリルって狼の怪獣なんだよー、襲われてない?とリフォンは
口調だけとても心配そうに言った。

「えっと

戸惑いながらも、グランドール達とはぐれた後のことを語っている
と、あの時の恐怖が蘇ってきて、ガタガタと体が小さく震えだすの
がわかった。

グランドール達も、夢姫の説明を聞いているうちに、顔が青くなっ
ていた。

「すまない、俺達のはぐれたばかりに、怖かっただろ?辛かった
だろ?」

嫁入り前の女の子に、そんな辛い目に遭わせていたなんて…」

グランドールが、リフォンにお姫様だっこされている夢姫の頬を優
しく撫でた。

その感触に、思わず、視界が滲んでしまう。

「本当にごめんね。

謝ってはっかりだけど、でも、ある意味でフェンリルがその場に来
てくれてよかったよ」

リフォンも、夢姫の額に顔を擦りよせた。

「ッあ…っう……」

怖かった、辛かった、嫌だった、助けて欲しかった。

二人の純粋な謝罪と、心配、そして、恐怖から逃れたという安堵感から、たまらず涙が溢れた。

嗚咽を上げる夢姫を、二人は、学院への道へと戻りながら頭を撫でてくれたり、抱きしめてくれたりした。

ようやく涙が収まった頃には、学院の門の前で、夢姫は、門限が厳しいということを出し、ちらりと二人の顔を見るが、「大丈夫」と言っつて、門番に生徒帳を見せる。

すると、門番は、胡散臭そうな顔から一変して、尊敬の眼差しを二人に向けて、すぐに門を開けた。

「俺達、ここじゃ顔が効くんだよね」

「こっついう時役立つからいいよね」

学院内は、薄暗く、人もほとんど歩いていなかった。

これ幸いと、とりあえず医務室行こう、と二人は足を進めた。

「…あの、そういうえば、あのフェンリルって人、そんなに危険な人なんですか？」

夢姫は、先ほどの二人のフェンリルに対する反応を思いだして聞いてみると、二人は、「ああ」「この学校で危険なヤツランキング五位の中に入るね」と素直に頷いた。

そして、わけを聞いたそうな夢姫に、リフォンは重たい口を開いた。

「アイツはね、

殺人狂、なんだよ」

「…え？」

夢姫が固まるを構わずに、リフォンは続ける。

「授業とかでね、バトル実戦があると、アイツは、対戦相手を、殺す、まではいかないものの、瀕死状態くらいまで、追い詰めるんだよ。

それはそれは楽しそうにね。

多分、アイツは一瞬で対戦相手なんて倒せると思うけど、それをわかってて相手をいたぶるんだよ」

「で、相手を瀕死状態にして、教師が“なんでここまでやった！”って激怒するとな、アイツは、返り血を浴びたとびっきりの笑顔で言うんだ、

“弱いのが悪いんですよ”

ってな」

先ほどのフェンリルの笑みを見た夢姫には、その様子をはっきりと想像できた。

確かに、ナイフで男達を襲った時、笑っていた。それはそれは楽しそうに。

「まあ、戦闘以外なら、性格も悪くはないけど、まあ、許容範囲内だし、頭の良いから、嫌われちゃあいないけど、アイツとだけは絶対に戦いたくねえよ。」

文句無しに強いかな」

「でも、バトルーナメントで戦うかも。」

アイツ毎回出るし」

うっわ、そうだった、とグランドールは顔を押しさえる。

そして、着いたらしい医務室のドアを開ける。

医務室に入ると、誰もいなく、真白なベッドの上に置かれた。

そこで、着替えらしきものを渡されて、今の状態を改めて理解する。顔を赤くしながら、フェンリルから渡された上着を置いて、カーテンを閉めて着替えると、カーテンの外から声が聞こえた。

「とりあえず、今日はここで寝る」

「良い夢を」

二人が優しく微笑んでいる気がした。

夢姫はゆっくりと目を閉じた。

19・Tears (後書き)

Tears II
涙

20・Devil!?

「バカですか、アンタらは」

目覚めると、グランドルとリフォンは、いつもの服、髪型をしており、なぜか目の前にいる、珍しく、真黒な（比喻表現で）笑みを浮かべているロイヤスは、夢姫が目覚めてから数分後に、グランドルが呼んだらしかった。

そして、リフォンから話を聞いた後、どす黒い笑みをリフォンとグランドルに向けていた。

「貴方達がついていながら、守れなかったと？
かつ、あの狼に会った？

あの狼が自ら助けるなんて、気に入られたに決まっているじゃないですか」

最悪です、とロイヤスは呟く。

それほどまでにフェンリルを嫌っているのがわかった。

「あ、あの……」

どうしても言いたい事があって、ロイヤスにそつと声をかけると、二人に対してとは全く違う態度、つまり、女なら誰もがボーッと恍惚状態になってしまうような笑みを夢姫に向けた。

「はい、何でしょう、ユメキさん」

その笑顔の対象差が逆に怖かったとは言えない言えない。

「この上着、フェンリル、さんのヤツなんですけど……返した方がいいですよ、ね……?」

「大丈夫。俺達もついてつてやつから」

グランドールの言葉に、夢姫はパツと顔を輝かせるが、それを遮ってロイシヤスが口を挟んだ。

「私達が次、三人揃えるの、三、四日先ですよ？」

そして、私は今から授業です行ってきますでは二人ともユメキさんをよろしく願います」

ロイシヤスは一気に言うと、さっさと部屋を出て行ってしまった。それを見送ると、グランドールが、「あ」と突然嫌そうな顔をした。

「そういえば、俺も、次の時間から世論の授業だ。」

どうする？」

「…フェンリルは三日待つてくれるとは思っけど、それを理由にして、ユメキのところに来られても困る。」

俺は今日、三時間目まで授業ないし、俺がユメキをフェンリルのところへ連れて行くよ。」

で、もしフェンリルが授業だったりしたら、日を改めたりする」「リフォンが淡々と言うと、グランドールは若干不満そうな顔をしたものの、鏝付きの帽子を被り直し、「じゃあ、頼んだ」と言い残し、そのまま出ていくのかと思ったのだが

ぺろっ

夢姫は自分の額に冷たいものを感じた。

珍しく、リフォンが啞然とした表情をしているのを余所に、グランドールは満足気に言った。

「除菌」

舐められた？舌で？

夢姫が何をされたか理解した時には、既に、グランドルは部屋を出て行ってしまっていて、何も言うことができなかった。

「あの

」

どうすればいいんでしょう？とリフォンに機構とした時、今度は、顔に、フワリとした物を被せられた。そして、そのままゴシゴシと顔を拭かれる。

「ちよっ…！？」

数秒もすると、それがタオルだということに気がついたが、頭を押さえつけられているので、逃れることができない。

「舐めるって…何なの？」

俺に対する嫌がらせ？確かに、ドラゴンって独占欲強いけどさ…」
タオルでゴシゴシと額、および顔をこすられている状態なので、リフォンの表情はわからないが、少なくとも笑ってはいないだろう。

大体、いつも無表情なのだが。

ようやく、タオルが離れた時には、リフォンの表情はいつも通りで、相変わらずの淡々とした口調で、「フェンリルのところへ行こう。アイツ、機嫌損ねると、後々怖いから」と言っただけで立ち上がるところだった。

「あ、はい」

夢姫も、心のそこでは、先ほどの、リフォンのらしくない行動に首を傾げつつ、これ以上、変に刺激を与えるのもいやなので、黙ってリフォンの後についていった。

*

「あの、フェンリルさんって、どこにいるんですか？」

医務室を出て、十分ほど経った時、どこに向かっているのかさえわからないので、夢姫はたまらずリフォンに訊いてみた。

「わからない。

でも、絶対そろそろ出てくるよ。勘でわかる」

二人が歩いているのは、生徒がほとんどいない、広すぎる中庭。

こんなところにどうやって出てくるのだろう、そんな思いを抱きつつ、夢姫は辺りを見回す。

当然ながら、どこにもフェンリルの姿はない。

「あの、ここにはいないんじゃないですか…？
場所を変えたほうが」

「来るよ」

リフォンの目が、警戒の色を濃くし、だが、肝心の姿が見えないので、どこに？あ、でも、出てこないほうがいいなあ、あの人（怪獣）、めっちゃ怖いし、と下を向いていた顔を上げた。

「やあ、ユメキちゃん。
久しぶりだね」

そこには、

悪魔がいた。

出
や
が
っ
た
！
！

そう言いたかったのを、夢姫は必死にこらえた。
目の前で、さも楽しそうにニコニコと笑うコイツは殺人狂なのだ。

「あれ？

でも、何で君までいるのかい？

リフォン君」

「ユメキ一人で来いなんて書いてなかったし。
なにか問題でも？」

二人の目が冷たく交差する。

リフォンの一歩も退かない様子を見て、フェンリルは目を細めた。

「いいや。

確かに、書かなかったのは俺だしねえ。

あ、ユメキちゃん、上着、ありがとね」

前半はリフォンに、後半は夢姫に言った言葉は、誰が聞いてもわかるくらいの温度差があった。

そして、フェンリルは、それはそれはわざとらしく、夢姫の両手をぎゅっと握って上着を受け取ると、リフォンの纏う空気がガラリと

変わった。

あえて言うなら、殺気と邪気が混ぜこぜになったような。

「フェンリル。」

お前、トーナメントの時、俺がグランドールかロイシャスが潰してあげる」

「わあ、それは楽しみだなあ。でも、ごめんよ。」

先約いるんだ」

「……ニツクか？それともクワイエル？」

「さあて、どうだろうね？」

でも、二人とも空中戦のヤツだよ」

クツクツと笑い声を上げるフェンリルに、リフォンの纏う空気が、今までよりもどす黒くなる。

それを見かねた夢姫が、そろりと声をかけた。

「あの、私、そろそろ失礼してもいいですかね？」

「あ、そうだ。」

ユメキちゃんに言いたいことがあるんだ」

私の意見は無視か！

夢姫は口元をひきつらせたが、それに気付いたか気付いていないの

か、フェンリルはぐつと顔を近づけた。

「今週末、二人っきりでデートでもしないかい？」

「お断りします」

リフォンが隣で何かを言う前に、夢姫はぴしゃりと答えていた。

この人（怪獣）と一緒にいると、いいことはない、と身をもって知ったからである。

しかし、フェンリルの瞳孔が細くなったのを見て、夢姫は「しまった」と顔を青くした。

だが、次の瞬間には、それが唾然としたものへと変わった。

「くっふふふふっ…！」

「いやあ、君、本当に面白い反応してくれるね」

いきなり、フェンリルは心底可笑しそうに腰を折って笑い始めたのである。

リフォンも、そんなフェンリルを怪訝そうな目で見つめている。

「今まで、声をかけて、俺の誘いを断った女は、君が初めてだよ。それも、はつきりとさ」

顔を上げたフェンリルの表情は、この状況を楽しんでいるようだった。

夢姫は、フェンリルが怒っているわけではないことに安堵しつつ口を開いた。

「私はナイフに刺されて死にたくありませんし、それに、立場上の仕事の方も」

そこまで言ったところで、夢姫は面白いように固まった。

仕事？

そういえば、メイドの仕事、今日からじゃね？

「んなああああああああッ！」

夢姫は絶叫すると、リフォンとフェンリルに高速でお辞儀をして、リフォン達から見ても、人間とは思えない速さで学院内の方へ去って行った。

「　　　　　狼、お前、ユメキのことに気に入ったの？」

「気に入ったどころじゃないよもおー。」

大好きになっちゃった、ユメキちゃん」

残る二人がそんな会話をしていたことを、夢姫は知らない。

「ユメキ、貴女の仕事を説明する前に、まず、メイドならば、これを絶対に着なくてはいけないわ」

夢姫の目の前に、仁王立ちになって“ソレ”を夢姫に見せつけてくる女の名は、レイン・アクリアという。

彼女は、持ち前のナイスボディの長身でドアを押さえ、産まれたてのバンビ、もとい夢姫に向かって、男なら誰しも虜になるような微笑みを投げかけている。

今の状態になる成り行きは、数分前に遡る。

*

夢姫は、リフォンとフェンリルのところから離れて、学院内を走っていた。

走っていたと言っても、道などわからないので、ただがむしやりに彷徨っているという状態だ。

だが、少なくとも、レインの所へ行けば、仕事内容、および、暇な時の図書館での読書の詳細がわかるだろうと思っていたのだが、こ

のただっ広い学院で、そう簡単に捜し人（怪獣）が見つかるはずもなく、途方に暮れていたところで、いきなりガシツと誰かに腕を掴まれたのである。

声を上げる間もなく、連れ込まれた部屋には、セイレーンという人魚の一種であるという怪獣のレインが、夢姫の前の前に、ドアを押しさえつつ立っていたのだ。

「レ、レインさん……！？」

「レインさんなんて他人行儀な呼び方しないで。

呼ぶなら、名前呼び捨てか、“レインお姉様”って呼んで」

いきなり何を言い出すんだこの美女は！夢姫は怒鳴りたかったが、この美女には、力でも、美しさでも、その他もろもろで勝てないとわかっていたので、あえて逆らわなかった。でも、いきなり呼び捨ては無理なので、とりあえず恥を捨てた。

「……レインお姉様、いきなり何ですか？

捜しましたけど」

「敬語禁止」

「……レインお姉様、いきなり何だ？

捜したんだけど」

有無を言わさない声音で言われ、イライラしながらも、夢姫が言い直すと、ここでやっとレインは嬉しそうに口を開いた。

「貴女に見せたい物があるの」

嫌な予感がした。

そして、その予感は見事に的中した。

ごそごそと部屋にあるクローゼットの中から、レインが“ソレ”を取り出すと、夢姫の背に、ぞわりと鳥肌が立ったのだ。

“ソレ”は、一般的に、『メイド服』と呼ばれる物だった。

「メイド服は着ないって言ってたじゃないか!!」

「あるえ？」

メイド服じゃなくて、これ、従事服って言うのよ？」

ニヤニヤと笑うレインは絶対に確信犯だと思う。

「……………レインお姉様、私、どうにも具合が悪いようです。

吐き気、頭痛、腹痛で倒れそうなのでこれにて失礼

「あら、それは逆に好都合だね。」

ほら、お姉様の腕の中に倒れ込みなさいな。

アタシが、ゆっくり、着せてあげるわ」

ぞわぞわと手を不気味に動かしながら、レインがこちらへ近づいてくる。

“失言だったか!”と夢姫が後ずさると、レインは、獲物を見つけた獣のような目をして舌なめずりした。

そんな動作さえ色気&美しさたっぷりなのだから、美人とは凄くも

ので、だが、夢姫には、その様子が悪魔か何かに見えなかった。

こんなモン着るくらいなら、……えっと、全力で逃げてやる！

ゴスロリのようなふっわふわのフツリフリの、超がつくほど可愛らしいメイド服のような服が大嫌いな夢姫は、レインが近づいて来て、ドアから離れた瞬間に、パツとレインから走り出して、ドアの外に逃げようとした。

が、ガシツと効果音が出そうな程強く腕を掴まれ、そのまま床に押し倒される。

だが、そんなことで諦められるかと、夢姫は必死に暴れる。

「嫌だっ！

メイド服なんて！

そんな服着ていられるほど私は美人じゃない！

大体、レインお、お姉様だってメイド服着てない！！」

「夢姫は美人じゃなくて、美人だけど、超可愛くもあるから全然大丈夫よ。」

それに、これは従事服だし、それに、アタシは服をアレンジしたの着るし」

その言葉を聞いて、夢姫は即座に叫ぶ。

「じゃあ、私も自分でアレンジする……！」

23・Make

チヨキンッ！

鋏が音を立てて布を切った。

その鋏の持ち手は夢姫だ。

ジヨキジヨキジヨキと切っている布は、黒と白の色合いの、メイド服というヤツで、愛らしいデザインのソレを、夢姫は、何の躊躇もなく切っているのだ。

先ほど、レインに「じゃあ、私も自分でアレンジする！！」と叫んだ後、「いいわ。でも、スカートのリボンを残さないと、無理矢理でもコレを着せるからね」と言われ、ポンっとメイド服と、どこから取り出した裁縫セットを渡され、部屋まで送ってくれたのだ。

「ご丁寧にも、「楽しみにしてるからね…？」と素敵な笑顔で投げキッスまでくれて。

そして、今に至るといわけだ。

正直、裁縫は苦手ではないのだ。

料理にしてもそうなのだが、家庭科の成績を上げるためには、裁縫と料理のスキルは必須だったので、死に物狂いで練習した覚えがある。

料理なんかは特に、一時期、自分で自分の食べる料理を全部作っていた時があつたくらいだ。

だが、二つとも、決して好きではないだ。

むしろできればやりたくない。

両方とも、楽しみを見出せないのだ。

両親は、落ちこぼれの夢姫のことなど見向きもしない。

姉は、夢姫をいつも見下していた。

兄は、夢姫が存在していないかのようにしていた。

つまり、誰も夢姫のことを優しくしても、褒めてもくれなかったのだ。

ぼんやりと、頭で家族のことを考えつつも、手だけはしっかりと動かす。

頭の中で、どういった服にしたいのか、構造はできていたので、アレンジするのはそこまで苦ではなかった。

現に、全体の八割方は出来あがっている状態だ。

後は、淡々と、地味だが、ただひたすら大切な作業を繰り返す。

裁縫セットの箱の中には、アレンジ用のボタン、リボン、布などもぎっしりと入っていて、道具にも苦勞しなかった。

よって、作業は着々と進んだのである。

「でえきたあー！」

両手で出来あがった服を掲げて、歓喜の声を上げる夢姫。

できあがった服は、スカートのフリルと取り、シンプルにして、丈を短くし、それに、グランドールに買ってもらった黒い、スラックスのようなすっきりとしたズボンを会わせる。

俗に言う、スカートズボンというやつだ。

ズボンを穿いてはいけないと、レインは言っていなかったので、文句はないはずだ。

上も、フリルを大幅に取り、リボンも大きい物から小さいものへと変え、袖口も、装飾を取ってシンプルなものにした。

これなら着れる。

一人で怪しくニヤニヤとそんなことを考えながら、そういえば、サイズ大丈夫だろうか、と着てみることにした。

レインに、鏡を買ってもらったので、それを使ってみるいい機会だと、服を脱ぎ始める。

ついていた専用のカチューシャと、従事の印だというバッジをつけて、鏡の前に立つと、まあ、悪くはないんじゃないか、という思いになった。

そして、すぐに脱ごうと、服に手をかけた時、
コンコンと、ドアがノックされる音がした。

「あ、はい。」

今、手が離せないなので、入って大丈夫だよー」

夢姫は、レインが様子を見に来たのだと、気軽に返事をした。

キィと音を立てて、ドアがゆっくりと開いた。

「ああ、ユメキさん。」

これ、理事長からのここでの仕事内容とか資料とかマップとかその他もろもろを全部集めたものなのでどうぞ使ってください」

「あ」

入ってきたのは、ユニコーンの美男子ロイシヤス。

てっきりレインが入って来ると思っていた夢姫は、自分がメイド服を着ている姿を見られて固まった。

「何も言わないで下さい」

「いや、まだ何も言ってますん」

ていうことは何か言おうとしたんじゃないか！

実際、ロイシヤスの顔はにこにここと笑みを浮かべている。

その笑みは怖いということをも本人は知らないのだろうか。

へえへえそうですね！そりゃあ、私はレインさんとは違ってナイスバディでも美女でもありませんよ！

日本人だし！仕方ないやろ！！

やけくそにそんなことを頭の中で叫びながら、ロイシヤスから差し出された資料とやらを受け取る。

だが、自らが資料を受け取ろうと差し出した手はロイシヤスに引かれた。

体ごと。

「可愛いですね」

「え、あ、ああこの服？」

頑張ったんですよ、中々良くないですか？」

「いえ、服ではなく、ユメキさんが」

What?

「ははっ、ものすごい口説き文句ですね。
冗談はこの世界観だけで充分すぎてます」

真顔でそんなことを言われたからには、もう笑うしかないだろう。
さすが外国人！いや、外国怪獣！
女を口説くのがうまいなあ！

そういえば、怪獣とかの逸話に、若い女を誑かしてどーのこーのという話があったと思う。

だが私は騙されんぞ！ここに来て私は色々学んだのですよ！

「冗談に、聞こえるんですか？」

耳元にそんな甘い声で囁かれる。

そして、顔を夢姫の視線と合わせる位置にした。

目の前にあるのは銀灰色の美しい瞳。

正直、その色を見ると、わけがわからなくなりそうになる。

ロイヤスは夢姫の唇の少し横に、自らの唇を重ね合わせる。

「人間って、初めて見ましたけど、本当に無防備なんですね。」

よく、ここまで生きてこれたものです。

私達なんかよりよっぽど若いのに」

そのまま、ツーっと顎の辺りを舐める。

突然の挙動にただ突っ立っているだけとなったが夢姫は、動く思考を働かせて、

ああ、この人（怪獣）
フェンリル並にあぶない。

直感的に、そう思った。

今まで会ってきた怪獣の中での危険度の最上位はダントツでフェンリル、レイン（発情的な意味で）、グランドール、リフォン、ロイヤスとなっていたのだが、今ここで、ロイヤスの危険度がレインと並んだ。

「あれ　　？」

だが、ロイヤスの発言内に、どうしても気になることを発見。

「どうか、しました？」

どうかも、何もって

「つ、つかの事をお伺いしますが、ロイヤスさん、今、お歳はいくつで？」

「えっと、確か今年で122歳だったような……」

「ああ、22歳ですね。わかりました。」

冗談キツインでやめてくださいね次からそういう冗談ホントにやめてびびるから」

テンパリながらも一気に述べると、ロイシャスは怪訝そうな顔をした。

「本当ですよ？」

怪獣は寿命が腐るほどありますし、グランドールだって223歳ですし、リフォンだって118です。

ああ、確かレインも219歳ですね。

つまり、私達はまだまだ若造にもなっていない部類です」

アンビリバボー！

驚愕でポカンとしている夢姫の顔に、ロイシャスはまた舌を這わせる。

普通なら赤面するところを、夢姫は、驚愕して、十分ほどそのままにさせていたのが事実であり、ようやくロイシャスの行為に気付いた頃に振り掃うと、ロイシャスはとっても満足そうに頷いて去って行った。

「そんなに寿命あんならくれよ……」

人知れず夢姫が呟いたのは余談である。

24・Age(後書き)

Age||年齢

25・Letter

従事の仕事および詳細。

- ・ 学院内の清掃
 - ・ 学院の料理を作る
 - ・ 行事などの時の手伝い
 - ・ 教諭の手伝い
 - ・ 買い出し
 - ・ 生徒の服の洗濯
- などがある。

この学院では、料理班、清掃班、洗濯班、手伝い班などにわかれて行動する。

一度班が決まると、事情がない限りその班から別れ、違う班に行く事はできない。

ロイヤスに渡された、理事長からだという資料には、そんなことがずらずらと書いており、それぞれの班の時間なども事細かに書いてあった。

だが、そもそも夢姫は、理事長直属のメイドだとレインが言っていたので、正直どれに当てはまるのかわからない。

夢姫が首を傾げていると、資料の間に紙が挟まってあった。

“初めまして、ヒジリユメキさんですね。

ワタクシ、この学院の理事長であるランドレア・メータムフォースと申します。

お話しは伺っております。

ワタクシの軽率な発言のせいで、我が生徒に本の解析を頼み、そし

て、そのせいで貴女をここへとやってこさせてしまったこと、深くお詫び申し上げます。

絶対に許されないこととは存じております。ですが、ワタクシ達教員や、生徒の研究部には、このことを話して全力で元の世界へ還れるように日々研究しておりますので、しばし時間を貰いたいです。

必ず、貴女を元の世界へ還すと約束致します。

ところで、話は変わって、仕事の方ですが、レインから聞いたそうですね。

ここでの立場上、貴女には、ワタクシ、つまり、理事長直属の従事者となって頂きます。

…だって、人間である貴女に、一トンくらいある洗濯物、運ばせるわけにはいかないでしょう？

それに、調理場でグロテスクな生肉なんて、ワタクシだって切りたくありません。

なので、理事長直属の仕事というのは、まあ、庭とかの清掃だったり、窓ふきとか、あと、書類整理なんかもできるんじゃないでしょうか？

あと、できれば買い出しとか頼みたいですね。買い出し用の籠と乗り物はお借りしますの。

先日、恐ろしい目に遭ったそうですね。これからは、買い出しに行く時、お付の者をつけるので安心して下さい。

とりあえず、できそうなことは頼む所存ですので、宜しくお願います。

大丈夫です。人間の貴女にもできそうなことを頼みますから、そう悲観的にならなくても大丈夫です。

詳しい仕事内容はレインから聞いて下さい。

あの子は、今日から、なんて言ったそうだけど、とりあえず、出来

る日から大丈夫です。

でもさすがに一年とか待たせないでね。

…そういえば、あの子ったら、まだ貴女に仕事内容話していないのね？

全く…あの子の分まで、お詫び申し上げます。

あと、この学院のことなのですが、さすがに迷うでしょう？

なので、地図、つけておきますね。

慣れれば大丈夫だと思うのですが…そこは気合が何かで頑張ってくれると嬉しいです。

生徒達は、仕事中の人間に何かしたりはしないと思うのですが、もし、何かあったら、レインか、それか信用のできる者をすぐに呼んでください。

まあ、人間の貴女が珍しいだけだとは思いますが、とにかく、この学院内に居る限り喰べられたり、殺されたりはしないので大丈夫です。

あと、傷の方、大丈夫ですか？

年頃の女の子なのでとても心配です。

あの教諭には厳しく処罰しておきましたので安心して下さい。

近々、いい薬を取り寄せますので、待っていて下さい。

薬が届いたら、そちらへ届けます。

近いうち、直々に会ってお話しがしたいです。

書面での面会、まことに申し訳ありません。

では、長文失礼致しました。

追伸、この学院で恋をしてみるのも、また一興だと思わない？”

呼んだ途端、あまりの長さど、ところどころにある茶目っ気に思わず笑ってしまった。

この理事長が、この学院を纏めていける理由がわかった気がした。

てっきり、男かと思っていたのだが、文からして女だということにもびっくりだ。

ロイヤスが出て行ったので、着ていた従事服を脱いで、胸の辺りの傷に手を当てる。

これを見た時はやっぱりショックで、軽く涙が出そうになった。

正直、結婚したいとか、恋愛がしたいとかは思っていないのだが、将来のことを考えると、この傷がトラウマになりそうな気がした。しばらくすると、慣れたのだが、傷はそのままなので、いい薬をくれるというのはいがたかった。

会った時には御礼を言っておこう。

ていうか、怪獣とどうやって恋しろというんだ。

そして、あんな超絶美形を相手にしたら、こっちが壊れる。

ええ、精神的に。

最後の言葉は正直スルーしつつ、他の資料も見てみると、この学院の規則とか、授業内容とかが書いてあったので、丁度字に飢えていた夢姫はそれらを時間をかけてじっくりと読んだ。

26・Work 1

この学院の学年制度について

この学院では、知識や力で段階別に行っています。

力がない者は、知識で上に上がり、知識のないものは力で上がることができます。

年齢制限もなく、この学院では、年齢のバラバラな者が一緒になっています。

段位は上から、一位から十位まであり、十位まで昇ったものが卒業できます。

学院の名物行事であるバトルトーナメントでも、この段位で力の組み分けすることもあるので、従事者はよく覚えておくように。

「バトルトーナメントねえ…」

他の資料に、学院の生徒は、ドラゴンのように肉食系の怪獣は好戦的な奴らが多いらしい。

そういう怪獣は、授業などで、ストレスを発散させないと突然暴れ出すことがあるとのこと。

そういうののためのバトル授業で、バトルトーナメントというのは、簡単に言うとそれの大きいバージョン。

ようするに、力で渡り合えるなら、十位の人と、七位の生徒が戦う、なんていうことがあるらしい。

ここの行事はこんな血生臭いのばかりなのか、と思っていたら、そ

んなでもなく、ハロウィンとか、クリスマスパーティーとか、バレンタインとか、年明けパーティーなんてのもある。他にも、理事長の気まぐれで、女装男装パーティーとかその他もろもろやるらしい。

ていうかこれ絶対理事長の趣味だよな。

少なくとも、私は従事人だから、こんな行事には参加しなくてもいいのだ。

特に、バトルトーナメントなんて人間にやらせんじゃねえという心境だ。

それで、資料は終わりなようで、読み終わった資料をテーブルに置くと、胃が急に凹むのを感じた。

「お腹減ったからご飯食べに行こ…」

空気が抜けて音が鳴る胃を押さえて、夢姫は立ち上がった。

*

「あ、ユメキ」

「グランドールさん」

食堂に行くと、グランドールがデカイハムにかぶりついていた。

時間が早いのか、他はあまりいなかった。

グランドールも、何か急いでいるようなので、じっと見てみると「この後すぐ授業」と言っただけ最後の一口を大口で飲み込んだ。

その様子を見て、グランドールが行かないうちに聞こうと、夢姫は口を開いた。

「そういえば、レインさん知りませんか？」

「あの人面魚ならほら、」

お前の後ろに「

ん？と後ろを振り向くと、そこには、メイド服？をもっと派手にしたものを着ているレインがいた。

レインとグランドールはしばらくならみ合ったが、時間が危ないのか、グランドールは「ユメキ、じゃあまたな！」とすぐさま走って出て行った。

「何で着てこないの」

あの服のことが。

「いや、お腹減ったんですよ」

「敬語禁止。」

「三回使ったら罰ゲーム」

「いや、お腹減ったから」

罰ゲームでなにをされるかなんて、逆に思いつきすぎて怖い。

「服」

それでもしつこく言ってくるレインに、半場呆れながら「…じゃあ着替えてくるからここで待ってて」と言って部屋へ走って戻る。

部屋に戻ると、すぐさま着ている服を脱いで、自作メイド服ズボン付きを着て、再びレインのところへと走って戻る。

そのズボン付きの服を見ると、レインはものすごい不満そうな顔をしたが「ズボン無しとは言ってませんでした」とにっこりと、自分でも最上級の笑顔を浮かべると、とたんにでれっとした顔になって「じゃあ仕方ないわね」といつのまにか床に置いてあったモップを持ちあげた。

「ではユメキ、お仕事の時間です」

モップを片手に持ったレインは、恐ろしく美しかった。

ゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシ

「レ、レインお姉様…！」

これ、いつまで続くの？

一向に終わる気配がないんだけど」

「この身が滅び行くそのときまで」

え、嘘だろ、という顔をした夢姫に、レインは笑って冗談よ、と返した。

だが、それほどまでに長いのだ。

この廊下は…！！

がり勉少女となつてから、与えられたものはしっかりやり遂げようという生真面目な性格となつた夢姫は、レインが「じゃあまず廊下の掃除をしまーす」と言つた時も素直に従つたのだが、いざ、掃除をやってみて愕然。

かれこれもう二時間ほどやっているのだが、終わらない終わらない。

しかも、夕食を食べていないので、お腹もペコペコだ。

「確かに長いから、週に一回ぐらいでいいんだけど。

貴女は新人だから、とりあえず、やり方ぐらいは覚えててもらおう
と思つて」

「じゃあ、覚えましたから行くつよ。
腰が大変なことになってる」
はいはい、とレインは夢姫の分のモップも片付けて、「じゃ、次い
くよー」と声をかけた。
夢姫は痛む腰を擦りつつその後を追った。

「はい」

「・・・はい？」

スツとレインから差し出されたのは一枚の紙。
その紙には、時間割のようなものが書いてある。

「仕事のシフト表。」

もちろん明日からの」

疑問符を浮かべている夢姫にレインは答えた。

「え、じゃあこれからどうするの？」

「今から、明日の仕事の場所とやり方を紹介するわ。
当日わけわかんなくなったら大変だからね」

レインはくるりと背を向け歩き出す。

夢姫はそれを追いかけてながら明日のシフト表とやらをじっと見つめ
る。

主に清掃ばかりで、料理や洗濯などというものはなかった。

「あの」

「料理とか洗濯とか、あれ、普通に無理だからね？
やったら死ぬわよ？大変すぎて。」

だから清掃。

あと、たまに買出しと手伝い。

それは別として、その日に伝えるから今はいいわ」

さすがにそれはまずいのではないか、ここに居候させてもらっている身なのだ、できることはやっておきたいと夢姫が言うと、レインはこれが今貴女にできること、と言って一蹴された。

第一、人間にできるような仕事ではないと。

「それ、ここの理事長から来た手紙にも書いてありました」

「でしょ？」

あの方は基本的にそんな感じなのよ。

まあ、それが魅力だとは思っただけだね」

レインの目は、何とというか、柔らかい目をしていて、理事長のことを信頼しているんだなあ、という思いが伺えた。

そんなことを喋りながら、夢姫は明日、中庭の掃除と、窓拭きを頼まれ、それぞれの場所へと案内された。

注意事項とすれば、あまり生徒と接触しないことが一番だそうだ。特に夢姫は今、この学院で有名になっているから尚更だ。

「アタシがついてあげられたらいいんだけど、明日はアタシも授業だからそういうわけにもいかないの。」

もし何かわからなかったら教員に聞けば大丈夫よ」

そう言われて、やっと食堂へ行けることとなった。

二時間におよぶ廊下の清掃で、お腹は減って体に力が入らない。

食堂に入ると、食べるようにして食事をした。

レインがあきれ気味に夢姬を見ていたが、その自分の大皿に乗っている魚の大群、もとい、魚さしみや焼き魚はなんなんだ。

食事を済ませると、レインに先にさよならを言って自分の部屋へと向かう。

お風呂があつたので初めて入ってみると、何とというか、一流ホテル並みで、大声を上げそうになったのは余談である。

そして、夢姬は風呂からあがると、寝巻きに着替え、すぐさま歯を磨いてベッドに潜り込む。

この世界に歯ブラシがあつて本当によかつたと思ひながら。

朝6時 起床

そういえば目覚ましも買ったなあ、と夢姫は思いつつ、鳴り響くアラーム音を止めた。

昨日見たシフト表では、7時半頃から仕事と書いてあった。

従事をする者は、基本的に、一般生徒達よりも早く朝飯を食べてそれぞれの仕事を朝一でこなし、それが一通り終わったら自らの授業へ向かうのだそうだ。

そして、また自分の授業がない時は仕事をする。

いちいちめんどくさいが、服が汚れていない場合はいちいち着替えなくてもいいのでまだいいと思う。

しかも、その日一日ごとに日当が貰えるので得だ。

当人が働いた分だけ給料がもらえるということなのだが、その給料の量は、こここの理事長が決めているらしい。

え、でもこここのメイドさんとかって、少なくとも百人はいるし、執事？とかも合わせたら軽く三百人くらいいくだろう…と思っていたのだが、どうにも、この理事長さんはそんじょそこらの怪獣さん達とは違って、一人一人の仕事ぶりを観察できるといってんでもないスキルを持っているそう。

しかもそれを一日の自分の仕事の中で精算できるという有能さ。

ここまで来ると恐怖も尊敬に変わるわ。

つまり、一言で言うと、サボるな、ということなり。

まあ、でも、仕事中的おしゃべりくらいは目を瞑ってくれるそつだ。

夢姫は重たい体を引きずりながら顔洗い、自作のどつちかと言えばメイド服よりも執事服に近くなった服を着る。

早めにいかないと、席がなくなるのですぐに出たのだが、食堂につくとけっこう賑わっていた。

周りから奇異の目を向けられる前にすぐさま朝食を済ませ、仕事場である中庭へ向かい、長い廊下を歩いていった時だ、

「やあユメキちゃん。

元気？」

悪魔再来。

夢姫が、こちらの世界に来て一番嫌いになった男がいた。名を、フェンリルという。

夢姫が全力疾走で逃げるのはこの三秒後である。

が、

「そんな照れなくても」

思いつきり腕を掴まれ、そのまま体を反転させられる。

そうすることでフェンリルの、思い出したくない思い出に重なる笑顔がそこにあるのが見えた。

「君にね、お願いがあるんだよ」

「それはまたの機会にしてくれませんか？」

今仕事中的ですよ」

「にとしては余裕じゃないかい？」

ちよつとしたことだよ」

フェンリルの目が狼のように細められる。

リフォンがいつぞやに言っていた、「アイツは狼だから」という言葉が頭をよぎった。

ああ、どうしよう。

面影が被って仕方ない。

足が震えて仕方ない。

逃げ出してきてたまらない。

だって両方嫌いだから。

“あの人”も、この狼も。

それでも、夢姫がフェンリルの言葉に頷いてしまった理由は、自分でもわからなかった。

おそらく、あの目が怖かったからだろうと、後から思った。

「ありがとう。」

じゃあ、昼休みに中庭のベンチに来てよ。
待ってるから。

逃げちゃあ、ダメだよ?」

最後の微笑で、見えるはずのない、狼の鋭い牙が見えた気がした。
夢姫は、唇を噛んで、去っていくフェンリルの背をただ見つめた。

逆らったら、喰い殺される気がしたから。

憂鬱だ。

酷く憂鬱だ。

夢姫はげっそりとした顔で、だが、手だけはしっかりと箸を動かす。なんであんなヤツの言葉に頷いてしまったのだろう。いくら初恋の人に似ているからと言っても別人は別人。顔を思い出すだけで吐きそうさだ。

狼の撃退法的な本はないのだろうか、熊に場合は、死んだふりをするのではなく、荷物を全部置いて逃げるとよいということを昔テレビで見た気がする。

まあ、こつちの世界にテレビはないのだが。

イヌ科は鼻がいいから、玉ねぎかニンニクでも持っていくか？ いや、だめだ。

そのためには食堂で何らかの交渉をしなくてはいけないし、何しろ、食べ物をあんなやつのために無駄にしたくない。

くっそー、犬は好きなのに狼は嫌いになった！

しかも、この仕事が終わってからの昼休みってなんだよ。せっかく図書館に行こうと思ってたのに！

そこで充電してから窓ふきをしようと思っていたのに！
おのれ許さぬぞ！

その怒りを掃除への活力へと変換し、今までよりもスピードを上げて箒を動かす。

今は授業中なので生徒はいない。

授業がない生徒も、自室で自習をしていたり鍛錬をしていたりと忙しいそうだ。

レインに相談しようか、と考えた。
でも諦めた。

夢姫を猫可愛がりするレインなら、フェンリルに問答無用で喧嘩を売るであろう。

どちらの実力が上かなどわからないし、二人の段位も知らないので、喧嘩をしてどちらが勝つかはわからない。

なので、尚更会わせたくなかった。

それに、この学院では、基本的に、授業以外の戦闘は禁止されていて、もしやったら罰則だ。

レインが罰則を受けるのは勿論嫌だし、いくら嫌いなヤツだとしても、自分のせいで罰則を受けさせるのはやはり気分が悪い。

そこから悶々と掃除をしながら考えに考えた結果が、今になるのだが、もうすぐ昼休みとなる。

夢姫は、更に顔をげっそりとさせて、その場にしゃがみこんだ。こついう時、あのロングスカートじゃなくてよかったと本気で思う。

昼食を食べる気力はなく、昼休みになると同時に、夢姫はそのままの格好で中庭のベンチへ向かった。

昼休みで中庭は賑わっているが、フェンリルの姿はなかった。

「フェンリルさん、いないんですかぁー？
帰りますよー？」

ベンチの周りに声をかけてみても、フェンリルは出てこなかった。一人でやっていて恥ずかしくなってくるが、そのうち来るだろうと、夢姫は、ベンチに腰を下ろした。
のだが、

「へ」

ベンチに座った瞬間、腰の辺りにガツンという、明らかに違う感触を受けた。

痛い。

腰を擦りながら頭を上げる。

そこには、会いたくなかった者と、会ったことがない者がいた。

「のう、狼や。」

我の言う事は正しかったじゃろう?」

「はいはい。」

感服致しましたよ貴方には。

でも、用があるんなら早くしてくれないかい?

俺、我慢強くない方なんだよねえ」

「そりゃそうじゃとも。」

お主のナイフで切り刻まれたら痛いからのう」

一人は、言わずと知れずの狼、フェンリルだ。

もう一人は知らない人、おそらく怪獣で、藍色のフードを深く被っていて顔が見えない。

だが、声からして若そうなのに、爺口調だった。

「お主の恋人なんじゃろう?

こんな狼のどこがいいんだか、我にはわからんのう」

またシュールなのが出てきたなあ。

てか恋人ってなんだ恋人って。

29・Surreal(後書き)

Surreal||シュール

「恋人じゃねえしふざけんな蹴り飛ばすぞ」

無意識で紡いだ素の言葉に、フードを被った人獣は（人みただけど実は怪獣の略！）ピタリと動きを止め、フェンリルは腹を押さえ、爆笑した。

「ちよツ！最高！！」

俺とケツトにそんなこと言う女はいないよ！

ねえ君もそう思わないかい？」

「お主が気に入ったのはわかったが、こちらさんは心底お主を恋人にしたくないようじゃのう。」

よかったのう、コイツと付き合ったら最後、見るも無残なことに

「あはっ！」

ダメだよ、これから口説いてく予定なんだから。

人の楽しみを奪わないでくれるかい？」

フェンリルは、夢姫は個人的に気になる言葉を、ケツトというらしき人獣が言っているのを半場強制的にその口の辺り塞いで黙らせた。

そのアメジストとサファイアの瞳が冗談を言っではないことに、夢姫は気付けなかった。

それよりも、夢姫は、言葉の最後の見るも無残なことに、の後に聞きたいような聞きたくないようなそんな気分を駆られた。

そして、その言葉の後に言ったフェンリルの口説くという発言で死にたくなつた。

夢姫は別に恋愛に疎いというわけではない。

ただ、恋愛に興味がないだけだ。

結婚？なにそれ一生独身の何が悪いの？

恋愛？馬鹿なこと言ってる暇があるなら勉強しろ！

恋人？ああ、参考書のことですねわかります。

彼氏？一人に対して使われる三人称代名詞で、もともとは男性、性別不明、女性の場合に使われていたが、明治以降、女性に対しては彼女を使われるようになったということですね。ついでにテストには出ないんじゃないかなあ、多分。

という感じなのだ。

落ちこぼれ時代なら漫画や小説の素敵な恋愛にも恋をしたかもしれないが、今は面食いではあるにしろ、とりあえず眺めているだけではないかなーと思いついてる。

まあ、これから心境の変化がどうなるかは夢姫自身もわからないが、ていうか人外じゃん。

夢姫が一番重要なことをここで思い出した。

「てことでユメキちゃん。

こちらさんが、研究部部長のケトライア・シャルコム。

一言で言うとな愛想な研究オタク」

「殺人狂に言われとうないわ。

そして我はお主より年上なのだから、敬意を払え。

あとお主はいらんから出て行っていいぞ」

しっしつとフェンリルに向かってケトライアは手を振るが、フェンリルは「お前に預けると俺のユメキがどうなっちゃうかわかんないからここにいるよ。それでも出ていけつて言うなら殺すー」と、誰が俺のユメキだと拒絶オーラをムンムンにする夢姫の態度などお構いなしに、強引に首に腕を巻き付けですりすりとその頭に顔を寄せ

ひい、と小さく悲鳴を上げる夢姫に、フェンリルは、そのままの状態で言った。

「あ、ついでにコイツの愛称はケットだから」

「我の言葉を無視するでない」

そんなケトライアの言葉などなんのその、フェンリルは抵抗して逃げようとする夢姫の首に舌を這わせた。

ぞわり、とした感覚が全身に行き渡り、鳩尾に肘打ちでもしてやろうと思つた夢姫の行動は皆無に終わる。

するり、といきなりフェンリルが離れたのだ。唐突に。

「ここに居るのなら、私の研究報告を邪魔しないのが礼儀じゃろうて」

ケットの手にあるのは、拳銃でも、刀でもない。

ただの小瓶。

だが、その小瓶を見て、フェンリルはあらかじめ顔をしかめて、夢姫から離れたのだ。

それを驚きの目で見つめている夢姫に、ケトライアはフードから黄色の目を覗かせた。

「これは、その狼のような犬系の怪獣の嫌がる物質を配合しておつてのう。

これを一度嗅ぐと、それはもう地獄のような匂いに最低でも一週間は苛まれることになるんじゃない」

こやつに昔部品を壊されたので仕返しにやったら、それはもう面白くてのー、とおそらく笑っているであろう口調で言うケトライアに、フェンリルはため息をついた。

「あれはもう二度と嗅ぎたくないね」

その一言で、ケトライアは、夢姫の中の好印象ランキングのトップになった。さつき言った暴言を帳消しにしてほしい。いつかその薬をわけてもらおうと心の底から思った。

ケトライアは、小瓶をしまい込むと夢姫に向き直る。

「我がお主をここへ呼んだのは、他でもなくてのう。聞きたいことが色々あったんじゃない」

そう言って、ケトライアは自らのフードをゆっくりと下ろした。

30・Cait Sith(後書き)

Cait Sith=ケット・シー

詳しくはウィキペディアで。

主要人物多くてすみません。

できるだけゆっくり出して行きたいと思います。

見た瞬間、猫だ、と瞬間的に思った。

髪の毛は、まるで、アメリカンショートヘアのように、灰色の髪の毛に、黒のメッシュが何本も入っていて、丸めの、だが、猫のように少々つり上がっている目も黄色だった。どうみても若干猫背だし、おそらく、本性は猫か何かの怪獣なのだろう。

開いた口から、猫のような八重歯がちらりと覗いた。

「異界から来た少女、か。

まっこと面白いのう」

にやりと笑ってこちらに顔を寄せてくるケトライアを見て、夢姫は、まるで不思議の国のアリスのチエシヤ猫のようだと思った。

「我はのう、理事長に、お主を元の世界に還すための研究を頼まれたのじゃ。

我も丁度暇をしておったし、何より我の好奇心が激しく刺激されてのう！

喜んでそれを承ったのじゃ」

その言葉を聞いて、夢姫は脳裏にある映像を思い浮かべる。

「じゃあ、理事長が、学院の研究部にも頼んだってというのは…」

「まっごうことなき我のことじゃのう」

夢姫が理事長からの手紙の内容を思い出して言うと、ケトライアは

にっこりと笑った。

「あ、ありがとうございます!! ありがとうございます!!」
夢姫は頭を何度も下げて礼を言った。

嬉しかったのだ。

親しくもなく、会ったばかりだという小娘相手にここまでしてくれるのが。

少なくとも、家族はこんなに優しくなかった。

ケトラリアは、そんな夢姫の様子を見て少々目を（他人が見てもわからないくらい）丸くしたが、やがて、ふっと軽く息を吐いて夢姫の頭にぽん、と手を乗せた。

「異界の子は面白いのう。

我が想像していたのとは大分違う。

狼が狙うのもわかる気がするのう。

だが、それゆえに危うい」

「ケットお？」

まっさかお前まで狙うとか言わないでよね。

こちららドラゴンとグリフォンとユニコーンまで相手にしてんだから」

「ああ、あの三人が。

うむ、それはそれで面白そうじゃが、少なくとも今現在動くつもりはないのう。

我の一番の優先対象は研究じゃからの」

「ユメキちゃん、聞いたー？今の言葉ー。

コイツ、女より研究取るヤツだからー、絶対惚れちゃダメだよー」

研究という言葉で、目をキラキラと輝かせるケトライアは、まるでエサを前にしたライオン？のようだ。それに対するフェンリルは夢姫にぐっと顔を近づけて忠告をした。ちなみに不機嫌顔で。

うん、少なくともこんな飢えた狼は問題外、いや、そもそも人外だ。

「ていうか、そもそもなんであの美形三人組？
確かに責任はあると思うし、目の保養にすごくいいんだけど…」

美しすぎて目がチカチカするんです。

そう言おうと思っていた矢先、フェンリルとケトライアは顔を見合わせて、フェンリルは、はあー？と、ケトライアははあ、と息を吐いた。

「鈍感？天然？

好意っていう感情を知らなかったりするのかな？」

「うーむ。これくらいの女というのは、色恋に狂っていたりするものじゃがのう。
やはり面白い」

色恋に狂うって…発情期かよおい！

「失礼な！

人の好意に気付けないほど馬鹿ではない！」

人じゃないけれども！

「しかも、あんな輝く美形がなんで大した容姿を持っていない女に

構う必要がある？

情けよ情け！責任よ責任！

そりゃ私をここに連れてきた当事者なんだから色々と感じて

「こりゃだめだ…」

「まあ、そのうち理解するじゃろうよ」

そんな二人の呆れ気味の言葉にイライラする。

ほう、そうか、私を馬鹿だと言いたいのか。成績優秀の私を！

成績のことにはかなり敏感な夢姫である。

正直、ブスとか言われるよりも、馬鹿とか言われる方がイラツとくる。

だが、この二人に敵う気など全くない。

だって人外だもの！

数少なくて残った理性を総動員で働かせてさりげなく話題を変えようと、思いついた疑問を口にした。

「そういえば、大丈夫なんですか？

そんなに研究好きなら、他にやりたいこともあるでしょうし。

そもそも、異界に還る術なんてどうやって…」

「ああ、技術的には問題ないよ。

ケットはこの学院内でいつも三番以内には入ってるから。

あれ、今回はあのユニコーンのロイヤスに負けたんだっけ？」

「うるさいのう狼。

前回のテストは勝ったわい。

…目の前にこんなにも美味そうな食事があつて、それを後回しにして、格の下がる食事を食べる阿呆はいないじゃろう？

放っておいたら、他に盗られたり、腐ったりもする。

第一、こんなにも好奇心そそられる研究課題はないもののうー!」

二人の会話で、技術面では安心すると同時に、あのロイシヤスとケトライアがライバルであるらしきことがわかった。

うん、勉学に励むのはいいことだ。
とてもいいことだ。

夢姫がうんうんと感心していると、ケトライアがすつと隅から椅子を取ってきて、そこに夢姫を座らせた。

夢姫が礼を言って座ると、ケトライアは小さく頷いて、自身は紙やらプラスチックやらがごちゃごちゃと置かれているテーブルに浅く腰かけた。

「…ねえ、俺の椅子は?」

「犬なら犬らしくその辺にお座りでもしていたらどうじゃ」

「犬じゃなくて狼だし」

フェンリルは苦笑しつつ、その場で壁にもたれた。

「さて、ユメキ殿」

ポーツとして視線を彷徨わせっていると、ケトライアの黄色の目が夢姫を捕えた。

「はい」

「異界への還り道を調べるためにはそれなりの情報が必要じゃ。

だから、これから言う質問に答えて欲しいのじゃ。

よろしいかな?」

今までよりもずっと真剣なケトライアの声に背筋が自然と伸びるが、断る理由も、必要もなかった。

「はい」

夢姫が頷くと、ケトライアはにこっと笑って近くにあったポットから、カップにコーヒーを注ぎ淹れ、それを夢姫に渡した。

コーヒーの味はブラックで、よく、受験勉強のときに、毎晩のように飲んだなあ、という思いを夢姫に思い出させてくれた

31・Cat(後書き)

∴ 中々更新できなくてすみません。

誤字報告ありがとうございました！
重宝します。

「では、お主の世界で、こちらに来る時は特になにも変化はなかったと?」

「はい、ほとんどなにもなくて…」

「ううむ、おそらく偶然の一致じゃな。」

いい話を聞かせてもらった」

「いえいえ、こちらこそ」

多分、こちらで電車と言ってもわからないだろうと思って伏せておいた。

もうどれくらい話しただろうか。

コーヒーをもらってからかなり時間が立ったと思う。

色々な話をしたが、結局はこんな形でまとまった。

その間、ケトライアは心底興味深そうな、時折嬉しそうな表情を見せていたのだが、フェンリルはかなり不機嫌そうな顔をしながらフラフラと部屋を彷徨っていたり、たまにどこかに消えてまた現われてを繰り返していた。

話がひと段落ついたところで、ここがどういった場所なのか、部屋をじっくりと見回すことが出来た。

改めて気付いたが、暗めの部屋に漂っていたのは淡い何かお香のよくな匂いだ。

決して嫌になるような匂いではなく、何と云うか、お線香のようなでも、香水ではない独特の香り。

そして、暗いのは、柔らかいオレンジ色のランプが光っているからだと分かった。

部屋にはぐるりと壁一面に大きな、正確に言うと二メートルくらい

の棚が並んでいるのだ。

その棚の中には赤い液体が入っているフラスコだとかよくわからない機械だとか書物だとかがたくさんあった。

黒魔術かよ。

そう思わずにはいらなかった。

それこそ、テレビか何かで見た占い屋敷の中のような。

まあ占いと言っても色々あるのだが、ここは、タロットとか水晶玉占いとかの雰囲気合っていた。

「…手荒なマネをして悪かったのう。」

じゃが、我はめつたにここから出ないゆえ、顔も知らぬお主を連れてくるのは一苦労だったんじゃない？」

「え？」

「近々話をしたいとは思ってたのじゃが、どうするか迷ってたのう。」

唸っていたところを、その狼が「じゃあ俺が指定場所に誘導するからそこから瞬間移動の式使って連れてきちゃえば？」って言ったのう。

責めるなら狼を責める」

「ちよつとーなにそれ！」

“君ならそれくらいできるだろう？”って俺が訊いたら、超不機嫌になって“そこまで言うんだったらやっちゃってやるわい”て自慢気に言っていたのはケツトだろう？”

そこからまたからかうような言い争いになっていく二人の会話内容は、十中八九夢姫をここへ呼びだした方法のことだとわかった。

「狼、お前そろそろ帰れ。」

「ここが獣臭くなる」

「ケットも黙じゃん。

俺のことも言えないし」

フェンリルがそう言うのと、突然ケトライアがぬっと立ち上がる。

怒ったのかと思って夢姫がびっくりすると、ケトライアは近くに置いてあった銀色の鍵を手を取って、そのまま、壁を覆うようにしていたようにしていたカーテンをどかす。

そこには、こげ茶色のドアがあり、そのドアの金色のドアノブに、手に取った鍵を差し込んだ。

カチャリという軽い音がしてドアが開くと、ケトライアはフェンリルに“さっさと出る”という視線を送る。

この人も190センチ以上はあるなあ、と思いつつ、はて、と思った疑問を口にした。

「ていうか、ドアがあるなら普通、そこから私を連れていけばよかったのでは…。」

それに、私を元の世界に還す研究をしている方に会わずと言うんだつたら普通についていきますけど」

その言葉を聞いて、ケトライアがその場で硬直し、フェンリルがゲラゲラと笑いだしたのは言うまでもない。

「ケット。

ね、ほら、面白いだろ？

ていうか、何で気付かないの？俺、ドアがあるのにいいのかなーと思っただけで黙ってあげたんだよ？」

「……白々しいヤツじゃ。」

お主、本当に性格悪いのう」

「知ってるよ。」

やあ、でも、この学院で三位に入る成績優秀者がこんなところで馬

鹿をするなんて、思っでなかつたからびっくりというか笑える…」
その言葉を聞いて、ケトライアは無言で小瓶を取り出すと、フェン
リルは笑うのをやめた。

「じゃあ、ユメキちゃん。

話も終わったことだし、一緒に帰ろうか」

「ユメキ殿に帰れとは言っておらん。

お前は帰れ」

「いや、ここに可愛い女の子を残しておいたらどうなる事か…。

考えるだけで恐ろしいね。

てことで一緒に帰るよ」

フェンリルの水を得た魚のように潤いというか生気に満ちた声を聞
いて、お前の方が危ないというツッコミを夢姫は心の中で三回ほど
唱えるようにして言った。

ケトライアも、逆らう気をなくしたのか、夢姫に一言、「苦勞する
のう」と声をかけ、再びテーブルに座り、そのモデル並みに長い足
を組んだ。

フェンリルはそんなケトライアを見て気を良くしたのか、にっこり
と笑う。

「どうせだから他の部も見せてくるよ。

ユメキちゃんにはここを早く覚えてもらわないといけないしね」

「ふん、他の男に盗られないように見張っておくがいい。

まあ、我はお主の応援などせぬがな。

それと襲うなよ」

襲わないよ、まだ、まだ！？フェンリルの問題発言に夢姫はたまら
ず口を挟むが、フェンリルは意味あり気な笑みを浮かべ、ケトライ
アはそのうちそっちにあの小瓶を送ってやろう、と憐れみを込めた
視線で夢姫を見てきた。

お願いします、と心の底から頼み込んで、ドアから外へと出る。先は、暗い一本の廊下が続いていた。

振り向くと、フェンリルがケトライアの耳元で何かを囁いたのを見たが、その内容は全く分からなかった。

最後にちらりとケトライアを見ると、その黄色の目を細めて、フェンリルの方を無表情でじっと見つめていただけだった。

33. interesting (前書き)

ケトライア視点です。

33・Interesting

あの異界からの娘

狼が言っていたと言うこともあるが、興味が強かった。

理事長に、その娘のことを聞いた時、体中が好奇心で張り裂けそうになったのを覚えているのう。

己の人生の中でこれほどまでに胸がときめいたのは初めてであろう。

会ってみたい、と正直に思ったんじゃ。

こんな口調と、フードを頭からすっぽりと被るというスタイルのせいで、爺とか言われるが、ぶつちやけ、そんなことを言っている奴らと年齢ほとんど変わらないのう。うむ、どうしたものか。

こんど道端にアンモニアでも撒いておいてやるうか、うむ、そうしよう。

自分でも決して社交的な性格ではないと自負している。正直、知らない相手とか喋りたくもない。

だが、今回は、我にもよくわからないのだが、その娘と無性に話してみたくなつたのじゃ。

だから、理事長が、その異界への還る道を研究してくれと言われた時、理事長の言葉を途中で遮ってまでして了承の返事をしてしまった。

不謹慎じゃったかのう？

じゃが、その娘のことなど全くわからぬ。

理事長もまだ会ったことないと言っておったので、聞いてもわからぬじまいじゃった。

だが、学院中の生徒に聞くのも面倒じゃし、かつ、我は“実験室の黒猫”という怖いんだか怖くないんだかわからない異名をつけられているらしく、あらかさまに他人に避けられる。

……猫、は猫でも怪獣なんじゃがのう。

そんな風に我が研究室で一人悶々としていたところを、どこからともなく狼　もとい、この学院でトップ中のトップクラスに危険な怪獣であるフェンリルがやってきおって、「ああ、ユメキちゃんのことね」と直々に名前まで教えてくれた。

あれは絶対に確信犯じゃのう。

じゃが、来てしまったもんは仕方がなく、どうしたらいいかと我が渋々、渋々言ってみると「じゃあ俺が指定場所に誘導するからそこから瞬間移動の式使って連れてきちゃえば？」と誠に軽い口調で言ってきた。

確かに、瞬間移動の式は私の得意分野の一つである。

そうか、その手があったかと我は納得して頷いたのじゃが、いかにせん、怪獣はともかく、人間を瞬間移動なんてさせたこともないし、もし失敗したら、我は問答無用で理事長に殺される。

いや、殺されるどころではないじゃろ。

異界からの娘の話をする理事長の目は輝いておったからな。

おそらく、見る前に死んだとわかったら……想像するだけで恐ろしい。

そう考えると、うーんと唸ってしまうわけなのじゃが、考え込んだ我に、狼はニヒルな笑みで「君ならそれくらいできるだろう」と馬鹿にしたかのように言ってきたのじゃ！

おのれ狼、外見が女受けするからと言って我を愚弄するか！

お主は我より成績低いじゃろが！

もちろんこれで力チンとこなければ男じゃないわい。

そこまで言うんだっいたらやってやるわい、と我はかなり念入りに魔方陣を書いて“式”を発動させた。

基本的な順序は、

1、移動用の魔方陣を書く。この時、距離が離れているほど魔方陣は大きく書かなくてはならない。ついでに、線の場所を一つでも間違えると術は失敗して、移動させたものを違う場所へと送ってしまう。

2、移動させる対象がいるところ（今回の場合はベンチ）を思い浮かべて、思念を一気に集中させる。一瞬でも気を抜くと術は失敗する。

3、そして、対象を魔方陣の上に下ろすイメージをする。我の場合、ユメキ殿の姿は知らないから、大体の大きさじゃな。で、完成じゃ。

…補足じゃがこちらが移動するときは、魔方陣の上に自分自身が立つのう。

じゃが、自分が移動する方が何倍も難易度が高い。正直、走った方が楽じゃ。

見た瞬間、驚いた。

見た目は、我々怪獣の人型姿とまるつきり同じじゃった。

じゃが、それ以上に驚いたのは、その娘の纏う雰囲気じゃ。

なんとというか、ごちゃまぜ、と言ったところか。

安心してると、どこか怯えているような。

しっかりしているけれど、少し力を入れれば脆く壊れてしまうような。

顔を隠すように伸びている真黒な背中まである長髪と、憂いを含んだような濃い茶色の瞳。

絶世の美少女というわけではなかったが、放っておけない、構いたいという雰囲気が出ておった。

ふと、横を見ると、狼がユメキ殿のことをじっと見ておった。

それは、いつもの獲物を見つけたかのような冷徹で無邪気な目ではなく。

激情を含んだ愛欲の視線、と言ったらいいじゃろうか。

こやつにこんな目をさせる娘を知りたくなつた。

まあ、最初聞いたのは恋人ということだったのじゃが、どうにも違つらしく、というか、ユメキ殿は狼のことが大嫌いのようじゃつた。笑えるのう。

しかも、狼によると、学院屈指の猛者、グランドール・S、我と肩を並べるほどの賢者、ロイヤス・セリス、そして、あのグリフォンの血を誰より濃く受け継いだという、リフォン・ネアの三人がユメキ殿をどうにも、好いているらしい。

見目のいい三人のことだ、ユメキ殿が惚れるのも時間の問題じゃろう。

じゃが、当の本人であるユメキ殿は、「人外に興味がない」という表情をしていて、狼の熱すぎる視線にも、あの三人のことも恋愛対象としては見ていないようじゃつた。

時間をかけてユメキ殿の話聞いたのじゃが、異界というのは本当にこちらとは違う世界のようじゃつた。

全部話すのは疲れるから省かせておくれ。

正直、年頃の娘なら、故郷と離れて寂しくて泣くかもしれないと思

つていたのだが、そんなことは全くなく、むしろ堂々とした様子じゃった。

ただの娘ではないと思ったのは「ドアがあるなら普通、そこから私を連れていけばよかったのでは」「という発言からじゃった。

狼が惚れる理由がわかった気がした。

だからこそ、応援する気にはまったくなれんのう…。

他愛ない話をしてから、そろそろ帰らせようとユメキ殿を先に廊下に出させると、狼は足早にこちらに近づいてきた。

「惚れんなよ、猫野郎」

耳元で脅すように囁いた狼の言葉は、二人が去って行ったあとに、我が大爆笑するものじゃった。

ああ、面白い。

33・Interesting(後書き)

別にケトリアアさんを贖っているわけではありませんよ？
ただ、あんまり出てこないキャラだと思ったので…

研究部、戦闘部、家庭部、芸術部、就職部、勉学部、執行部、広報部
これが、この学校にある部活の種類らしい。

研究部は授業よりもより高度な実験などをする部活で、戦闘部とい
うのは、戦って戦闘能力を上げたりするこの世界で言うスポーツだ。
家庭部は料理とか裁縫とか女の子がやるようなことをやるようで、
実際この学院の女子のほとんどがここに入っている。

芸術部は絵画、彫刻などはもちろんのこと、音楽関係もやってる部
活らしい部活だ。ついでに演劇や合唱などもここ。

就職部は将来自分が就きたいと思った職業の勉強。就職支援的なや
つだと自分では解釈した。

勉学部は自分がやりたいと思った学科（特に数学など）を徹底的に
やる部活。ていうかこれと就職部って本当に部活なの？

執行部、これは、学院の行事や季節ごとの飾り付けなどを考えたり
する。

広報部、この中には新聞部や写真部、放送部というような公にする
部活を全部ひっくるめてのことらしい。

ていうか、部活がなくてもこの生徒達は自分達でけっこうやりた
いことはやってしまいうらしい。

聞いた話だと、自作映画を作った生徒もいるとか。

……あー確かにこれは部活だなあ、と思える部活が異常に少ないの
はなぜだろう。

人外だからかな？

ついでにテストには出ないから安心してください。暗記系は好みの
問題だからね、うん。

そしてなぜ私の隣には狼さんがいるんでしょう。
私は赤ずきんではないので喰べられませんよね色々な意味で。

ついでに、今の内容もその狼さんから聞いた話である。
ええ、今も私の隣で満面の笑みでいらっしやいますけど何か？

超ご機嫌っばいんですけど何か？

ケトラリアさんの部屋から出て暗い廊下を歩いていくと（後ろにフ
エンリルさんがいるのもものすごく、ものすごく怖かった。本当に）
、またしてもドアがあり、そこを開くと、学院の裏側に出ていた。

これからどうするのかと言えば、部活を回るのだそつだ。

だが、就職部は熱意だけあって傍からみてもわけがわからないらし
く、芸術部は今、絵などが上手い生徒が全員合宿中のため行っても
意味がないとのこと。

執行部はただ今会議中で、広報部にはフェンリルが行きたくないそ
つだ。

じゃあ家庭部に行こうと思ったのだが、……どうやら先ほど、調理
中に大爆発が起きて、そのせいで女子生徒が喧嘩中のようで、危な
いので行くのを断念。レインさんじゃないことを祈る。

結局、研究部はケトラリアのところまで済ませたというフェンリルの
強引な意見で、戦闘部と勉学部へ行くことにした。

ついでに余談だが、この学院にも生徒会のようなものがあり、風紀委員会とは統合しているらしい。執行部の意見はここで決まるらしい。でもやっぱり最終的に理事長が決めるらしい。理事長の権限恐るべし。

ともかく、グランドールとリフォンが所属しているという戦闘部に向かい、前に自分が行ったグラウンドとは別のグラウンドに足を進めているのだが、

「最初に言っておくけどユメキちゃん取り乱したりとかしないでね？」

「は…？何で取り乱す必要があるんですか？腐っても部活でしょう？」

「腐ってもって…つまり、いきなり血とか噴出しても平気ってこと」

血…！？

いや待て私、自分だって流血沙汰になったじゃあないか、うん、今更だけでも私テレビで手術シーンとか出ると一目散に自分の部屋に戻るタイプだからこれはやめた方がいいんじゃないかなでもいつまでもこんなヤツと一緒にいたくないしできるだけ安全を確保できるところに行きた

「うん、大丈夫そうだね、じゃあ行こう」

にこりと笑ったフェンリルは、表情ではポーカーフェイスを保っているが、頭の中は色々と考え込んでいる夢姫の手をとって、角を曲がった。

そこは、人通りもあり、フェンリルと夢姫の姿を見た者達が、物珍しそうな視線を向けてくるのを夢姫は感じた。

いつのまにか手を“恋人繋ぎ”に結ばれてるし、振り払いたいけど、ここで振り払ったら目立つし、なにしろあとで何されるかわからないチクシヨー！

しかも何なの血って！血って！

これ以上見たらご飯食べられなくなるでしょーが！

フェンリルとしてみれば、先ほどケトライアに構いっぱなしで面白くなかったので、今いちゃついてやろうという魂胆なのが、夢姫にとっては嫌がらせ以外の何物でもない。

嫌々ながらもフェンリルに手を引かれ、ついていくと、フェンリルはある大きなドアの前で足を止めて、重量がありそうなドアを片手で軽々と開けた。

「グランドール、また女の子ふつたんだって？性格悪いよ？」

「さっさとくたばれええええええ！」

「そういえばグランドールってこの学院の教師の研修生の女にも手出したことあるよね。」

拳句の果てにその女の方がグランドールにゾツコンになっちゃって
どうにかしてこの学院に勤められるように理事長をお願いしてたけ
ど、理事長が面談拒否して結局泣く泣く諦めたんだっけ」

「いつの話だあああああっ！！！」

「ていうか何でいきなり女遊びやめたの？まさか本気で惚れた女が
できたとか？」

でもお前が女遊びやめたのって数年前だよね…？

その頃にいた女って誰だったかな…」

「出た出た、グランドールとリフォンの漫オバトル」

フェンリルがケラケラと夢姫の隣で笑って言っているのを夢姫は呆
然としながら聞いていた。

そこはまぎれもなく闘技場、つまりグラウンドだ。

そこでリフォンはトンファーを、グランドールは身の丈ほどある大
剣を振りまわしている。

どうにも、この学院は人型での戦闘と獣型での戦闘の両方で戦える
らしい。

じゃあ、名物だというバトルーナメントはどうするのか、と夢姫
が聞くと、基本的にはどっちでもいいんだけど、ほぼ、ていうか全

員獣型で戦うね、その方がリーチとか視野も広がるし、スピードも上がるから、とフェンリルは答えた。

ついでに、この学院のほとんどの生徒がバトルトーナメントに参加するが、生徒の中には草食系（生物的な意味で）で、戦う術がなく、どうしても参加しても負けてしまい、参加できない、したくないという人もいる。

そういう人達は参加を断念するしかないそうだ。

まあ、この学院は力がなくても学力で上げられるのだから大丈夫か。

「…そういえば、ロイシヤスさんって草食系じゃないですか？」

確か、挿絵で見たユニコーンというのは白馬に角が生えただけの姿だった。

牛じゃあるまいし、角で戦ったりするのだろうか。

そもそも馬ってバリバリの草食系…。喰うより喰われる側じゃね？

「俺と居るのに他の男の名前を出すなんて大胆だね。

…冗談だよ、そんな気持ち悪そうな目で見つめないでよ。

うん、確かにユニコーンのロイシヤスは草食系だねえ。

でもね、ユニコーンって、凶暴なんだよ？」

フェンリル曰く、ユニコーンは極めて獰猛で、力強く、勇敢で、相手がゾウであろうと恐れずに向かっていくという。足が速く、その速さはウマやシカにも勝る。角は長く鋭く尖っていて強靱であり、どんなものでも容易に突き通すことが出来たという。

とのことらしい。

牛かよっ…！

思わず叫んでフェンリルに疑問符を浮かべられ、周りから奇異の目を向けられたのは言うまでもない。

そして、その瞬間に夢姫の叫び声に気付いてこちらを向いたグランドールがリフォンのトンファーに思いつき殴られた。

「あ」「あらま」

夢姫とフェンリルが声を上げると同時にグランドールがリフォンのトンファーに、

噛みついた。

それはもう、美麗すぎる女顔が歪むのも構わずに犬歯を立ててトンファーの動きを封じると、ひるんだリフォンの鳩尾に履いているブーツで思いつき蹴りを入れた。

負けじとリフォンもそのままグランドールの足を掴み、もう一つのトンファーで顔を容赦なく殴る。

観衆の声援もピークになって、そのまま決着がつくかと思ったところ、グランドールの腕が骨格から見て不自然に伸びた。

「…え？」

愕然とする夢姫があればどうなってるんだと思ったところでピーッという耳の痛くなるような音が響いた。

「そこっ！」

獣型になるのは反則だって前々から言ってるんだろっ！

腕一本でもだ！」

グランドールとリフォンを引き剥がし、グランドールにがみがみと説教をしているのは教師だろう。

見れば、むすつとしてゐるグランドールの右腕からは金色の鱗が見えていて、やっぱりなんだかんと言つても正体は爬虫類のデカイヤツなのかあ…と夢姫はため息をついた。
あんなに美人なのにな。男だけだ。

「あれ？」

そこで、夢姫は隣にフェンリルがいないのに気がついた。が、

「やつほー！グランドール、リフォン、ご機嫌いかがかな？」

次の瞬間には、今までいた客席から、グラウンドの方へ来ていた。

いつのまにか、フェンリルと夢姫の手は固く繋がれている。

…瞬間移動？

実際には、フェンリルが神速で動いただけなのだが、夢姫がそれを知る由もない。

「げっ…フェンリル…と、ユメキ？」

「珍しいね、こんなところに」

グランドールとリフォンは、突然現れた二人に、フェンリルには心底嫌そうな顔をするものの、夢姫には笑みを見せた。

「は、はあ、どうも」

「いやあ、ユメキちゃんに部活紹介しててね、見てたよー今の」

フェンリルがにやつと笑いながら言うと、グランドールの顔が面白いように固まった。

「さ、さっきの俺とリフォンの会話、見てたのか？」

さっきの、というのは、自分とフェンリルが入ってきた時に二人が繰り広げていたものだろうか。

とりあえず、夢姫は聞いていたのでこくりと頷く。

「全部…？」

再びこくり。

「Noooooooooooooo!!!!」
グラウンド全体に響き渡るグランドールの絶叫は、フェンリルを爆
笑させるには十分だった。
リフォンと夢姫、そして周りの観客にとっては耳が痛い以外の何物
でもなかったのだが。

35・Cry(後書)

Cry
= 叫ぶ

「でも何で噛みついたんですか：人型でやらなくても…」
「ドラゴンってほとんど牙で攻撃すつから、つい人型の時もその癖が出るんだよなあ…」

ようやく立ち直ったグランドールに聞いたのは、あんな美麗な顔を歪めてまでした噛みつき。

乙女としては許し難いことである。客観的に見てもだ！
目の保養が台無しなのだ！

夢姫達が今居る所はグラウンドのすぐ隣、休憩室のような所だ。
グランドールとリフォンは首にタオルを引っ掛けて、グラスに入った水を飲んでいる。

二人とも来ているシンプルなシャツのボタンが二、三個（グランドールの場合は今にも脱げそう）外れていてもものすごくセクシーだ。

そういえば学院外に出た時も女性達の視線がすごかったなあ、今にも喰いちぎられそうな…まさに獣の目。

そう言えば、ここでは異種同士の結婚はできるのだろうか？
子供は？やっぱり混ざるのか？両親の外見が。

でもぶつちやけ鳥系の怪獣と獣系ので“ごによごによ”できるとは思えない。

ん？でもリフォンさんの獣型の姿ってあれ顔と上半身鷲で翼生えてるけど、下半身ライオンじゃん。

どうなってるんだろう。

ついでに“ごによごによ”は察して。

こうなると、夢姫の好奇心は簡単には抑えられないのである。

「あの、この世界で異種同士の結婚ってできるんですか？
子供ってやっぱりミックスされるんですかね？」

そう聞いた私が間違いだった。ちょっと考えればわかることだった。
普通、男にはこういうことは聞かないって。

しかも、正真正銘の“獣”に。

にい、と嬉しそうに狼が笑う。

「じゃあ、実践してみるかい？」

へらり、と楽しそうにドラゴンが言う。

「ちょうど異種同士だしなー」

くす、と無表情だが目は本気の色を漂わせながらグリフォンが訊く。
「大丈夫、優しくするから」

おや、嫌な予感だ。鳥肌が立っているぞ。

これは噂に聞く貞操の危機、というやつか？まてやめる私は未成年
だ。犯罪だぞ！

お前ら自分の年齢わかってるのか！普通かなりジジイの歳だぞ！手
をわきわきさせながらこっち迫ってくんな！

だが、壁に追い詰められそうになっている夢姫に、救いの声が差し
伸べられた。

夢姫自身が、自分が何をしてしまったかに気付いた時には、額に激痛が走っており、「うわあああああ！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいい！！」と狂乱してひたすら倒れ込んだレインに謝罪するしかなかった。

火事場の馬鹿力というものは、人間が本当に恐怖を感じた時に発揮されるものであると、夢姫はこのあと実感した。

人間でも怪獣を気絶させることができると、気絶したレインも含めた怪獣組の四人が知ったのはこの後である。

36・Crime(後書)

Crime
= 犯罪

37・Worry

「あだだだだっ…しーみーるー！」

ぬりぬりと人がいない方向を向いて薬を傷口に塗りたくっているのは他ならぬ夢姫さんその人である。

そしてその後ろでへばっているのがグランドール、無言で椅子に座っているのはリフォン、じっと夢姫の方を見つめているのはレイン、フェンリルは、というと、当然のようにどこかへ消えた。

初めてこの学院に来た時に出来た、普通なら死んでいるはずの傷。その傷口に塗っているのだ。

最初、散々塗らせると言ってきたレイン黙らせ、見事奪い取った薬だ。

使わない手はない。

「なあ、ユメキ、いい加減敬語とさん付けやめねえか？

かたっ苦しくてたまんねえんだが」

「あ、それは俺も思った」

ぐしゃぐしゃと輝かしい金髪を掻きながら僅かに照れを含んだ声で言うグランドールと、相変わらずの無表情で言うリフォンに、夢姫が言おうとした言葉は、レインの怒声に遮られた。

「あんたらは遠慮と言うものを知らんのかこの愚か者が！タメ語と

“さん”無しはアタシだけで充分だわ！

あんたらはそこらへんのむさい男と適当に絡んでればいいわ！」

「絡っ…っってお前なあ…！」

俺は別に男色家じゃねえっつての！俺は女が好きだ！」

「グランドール、それ、自分の評価下げてるから」

リフォンのもつともな意見を、グランドールは「ふんふふーん」と鼻歌を歌ってスルーした。それを知ってか知らずか、リフォンがおもむろに夢姫に問いかけた。

「で、どうなの、ユメキ？」

「え、あ、へ、はい？ いいんじゃないですか？」

薬のふたを閉めて、それをもぞもぞとポケットの中に仕舞い込んでいる夢姫は、何を聞かれていたのかが全く分からないが、とりあえず頷くと、「よっしゃー！」とか叫んでいるグランドールと「そ、んなあ…」とガツクリ肩を落としているレイン、そして、無表情ながらも口元に僅かに笑みをうかべているリフォンを見て、おかしなことに返事をしてしまったのではないかと、夢姫の顔が青くなり始めたとき、「敬語」とリフォンが一言呟く。

「え？」

「敬語と、さん付け、やめてね」

ああ、そのことか、と一瞬、思ったが、すぐに、顔をしかめる。

なんか、裏がありそうだ。だって人外だもの！

「時と場所と必要に応じて考えてみます」

そう言つて、営業スマイルを夢姫は顔に貼り付けた。

「つれねえなあ…まあ、こんな魚類に比べりゃあ何百倍も、いや、何千倍もいい」

グランドールはなでなでと夢姫の頭を撫でる。

ほう？とレインは汚物を見るような目でグランドールを睨み付ける。

「そのうち“色狂いのドラゴン”っていう題名でアタシがあんたの本を出してやる…！」

「おい、それ題名からして中身が想像できるんだが！お願いだからやめろ！やめてくれ！やめてください！」

親父にばれたら殺されるどころじゃ済まない！」

「知るか。」

ああ、ドルフェリアさんはすっかりとした紳士なのに、なんでその息子のあんたはこんなゴミクズ以下なのよ……」

なんだとう！と、グランドールとレインがピーギーギヤーと、まるで猛獣のような声を出しながら言い争い、今にも本性を現して激しい戦闘を始めそうになっているのを見ていたリフォンが、不意にその無表情な顔を上げた。

「フェンリル、どこ行ってたの？」

そこには、先ほどまでどこかに消えていた柔らかな胡桃色の髪を持つ青年の姿。

夢姫はその姿を見て若干たじろく。

「いや、ちょっと野暮用、というか、噂を確かめに」

「噂？」

突然再来したフェンリルの言葉に、リフォンは首を傾げる。

その反応を待っていたかのように、フェンリルはニヤリと笑って言った。

「バトルーナメントが、始まるらしい」

フェンリルが言った言葉に、全員が固まった。

そして、ぱっと振り向いてきたグランドールとレインは表情を見たこともないくらい固くしていた。

「おいおい、嘘だろ？何でこんな時期に？」

「さあ、詳しい事はわからないよ。」

だって、こここの行事って理事長の気まぐれでやってるんだから」

「だからって言ってるんでこんなの……？」

「だからわかんないって。」

でも、恐らくは……関係じゃないかな？理事長の考えている事は昔っからよくわからないからねえ」

……の時、一瞬にも満たない時間、フェンリルは夢姫のを見たように、そんな気がした。

だが、すぐにいつものような飄々とした笑みを浮かべて、持っていた封筒からスツと何かを取り出す。

「これ、参加申込書、必要だろうか？」

そう言っただけ、おそらくは、レイン、グランドール、リフォンの分であるが、“バトルトーナメント参加申込書”と書かれた紙を三枚、ちらつかせた後、それを近くに置いた。

「まあ、レインさんは水中系だから闘うことはないだろうけど、フェンリルは、一瞬レインを見て残念そうに目を細めると、つ、とグランドールとリフォンを見て、今とは対照的に笑って言った。

「君達とグラウンドでまみえるのを、心から楽しみにしているよ」
その時に見えた舌の色は、まるでたった今鮮血を吸ったかのような真紅だった。

37・Worry(後書き)

更新遅くなってすみませんっ！

そろそろ、バトルーナメント編、始まります。

<追記> 10/13 お気に入り登録数2000人突破いたしました！

読者である皆様のおかげであります。

これからも出来る限り精進していこうと思しますので、宜しく願い致します。

本当にありがとうございます！

38・ Foresight (前書き)

ここ最近更新できず本当に申し訳ありません。
誤字、脱字、矛盾などがありましたら報告してくださると嬉しいで
す。

「あそこまで言われて、黙ってられるっつー男はいねえっつもの！」
ガッツン、グランドールは思いつきり壁を蹴る。

そうすると、見事に壁に大きな凹みのできたので夢姫は肝を冷やした。

「何でこの時期が危険かって言うかね、あれよ、繁殖時期が多いのよ。だから、闘争本能が普段よりも上がって、死ぬかもしれないから、絶対にこの時期はやらないはずなんだけど……」

レインは整っていて、髪の毛と同じ、藍色の爪を噛んだ。
マニキュアだろうか。

「理事長は何考えてるんだろう。今年は今までとは違うのに」
リフォンはちらりと夢姫を見る。

おそらく、今年は夢姫が居るからなのだろう、三人はそれを心配しているのだ。

怪獣である自分達よりもよっぽど脆い人間の夢姫のことを。

「あの、じゃあ私も前々から会いたかって思ってたんで、理事長さんに会いたいですか」

ギンツと三人の目が一齐にこちらを向いた。

その顔は、無表情のリフォンでさえも強張っている。

「あの人に？」

「死ぬわよ、普通」

「危険」

三人の顔は一様に青ざめていて、その表情が、この学院の理事長の恐ろしさを物語っていた。

いや、でも、この理事長女でしょうが、そんな君達バリバリ肉食獣が三匹襲いかかったら一たまりもないでしょうよ。

「あの人、多分、この学院の生徒が束になってかかってきても確実に勝つだろ」

「前にニツク達が理事長に不意打ちくらわしてたけど、見事に返り討ちにあつた」

「あらざまあみなさい」

レインが女らしからぬ大口を開けて、でもやっぱり綺麗にケタケタと笑った。

「この学院の生徒が束になつてもかなわないというなら、夢のような話のだが、三人の表情とこんな顔を見てしまったからには信じるしかないだろう。」

手紙ではものすごく物越し柔らかかだったんだけどなー……。

*

「ええ？ バトルトーナメントですか？ 知ってましたよ。というより、もう参加申込書出しました」

カリカリカリと紙に何かを書き綴っていたロイシヤスはそう言うて顔を上げた。

「早っ！ てかいつ出したんだよ」

「ついさっきですよ。私も、ただの草食獣だと思われるのは嫌ですのび」

ぎらり、とロイシヤスの銀灰色の目が怪しく光った。

「ここは、ユニコーンのロイシヤスの部活である勉強部。」

勉強部の部室は、大きな机が何個も置いてある部屋で、部員は全員その机に向かって勉強をしていた。

やっぱり勉強が部活動なのか。

夢姫を含めた四人がとりあえず申込書を出しに行こうとしていた所、たまたま通りかかった部屋にロイシヤスがいたので話しかけたのだ。

「ついでに貴方方も出したらどうですか？ フェンリルがさっき申込書を出していたので今回はやめておきます？」

「いいやあ、そのフェンリルに喧嘩売られたんだよ。受けないわけにはいかねえだろうが」

グランドールが低い声で言うと、ロイシヤスは少し驚いた顔をしたが、すぐに表情を元に戻し、真剣な顔をする。

「そつえば、今回のこの時期、どう思います？」

「さてな、俺達もそう思ってたところだ。理事長は何を考えている？」

やはりロイシヤスも気になっていたらしく、周りの生徒に聞こえないように声を小さくして三人に問いかけた。

「知らないわよ。理事長、最近なんかおかしいのよ。でもそれを聞きに行く勇気はアタシにはないわ」

「理事長も色々あった人だから、何か考えがあるのかもね」

ロイシヤスの問いに、レインとリフォンが順に答える。

夢姫はこの学院の理事長を知らないが、話を聞く限り、相当な変人らしい。

「ここの生徒を怯えさせるくらいなのだから、ものすごいのだろう。」

「しかもユメキさんが来たんですよ？ 余計心配じゃないですか…」

…」

その言葉に、他全員が黙り込む。

だが、それをぐしゃぐしゃと金糸のような金髪を掻きながらグランドールが口を開いた。

「まあ、どうせ俺達は全員バトルーナメントに出るし、機械があればどっかしらで合うだろ。それに、理事長だってユメキの事心配

してたんだろ？ なら心配いらないだろ。あの人は嘘が嫌いだからな」

グランドールの言葉にロイシヤスはそうですね、と頷いた。リフオンも無表情ながらもこくりと小さく頷く。

そんな二人に反比例して、レインの反応は悪かった。

「でも最中にユメキに何か遭ったらどうするの？ ユメキは人間なのよ？」

「それこそ俺達を守ればいいじゃねえか。お前は一人の女を守ることができねえのか？」

鼻で笑ったようなグランドールの口調に、レインはあからさまに不快な表情をしたが、それもそうだと気を落ち着かせた。

その時、そんな四人の姿を見ていた夢姫がおずおずと意見を言う。

「あの、トーナメントの最中、私が部屋に引き籠もっていればいいんじゃないですか……？」

「だめだ」

夢姫は自分が部屋に居れば、図書館で本を数冊借りてさえいればそれでいいと思っていたのだが、夢姫の意見は口に出して拒否したリフオン、目で同じ事を言ってくるグランドール、レイン、ロイシヤスに却下される。

「見る分には楽しいよ。それとも俺達の晴れ姿をユメキは見てくれないの？」

そう言われてしまえば、夢姫としては返す言葉がない。

血が流れるようなものなら、正直見たくはないのだが。

夢姫のそんな心境には気付かずに、他四人は勝手に話を進める。

だが、ロイシヤスが壁にかかった時計を見て、イスから立ち上がった。

「私は、そろそろ戻らなくてはいけないのでこれにて失礼しますよ。じゃあ、遭ったら理事長に報告でいいですね。ユメキさんも、何かあったらすぐに私達に教えてください。」

ロイヤスはそう言って微苦笑しながら立ち上がると、ひらひらと夢姫に手を振って入り口から去っていった。

その一つに纏めたパールホワイトの髪の毛が完全に見えなくなるのを確認すると、残る四人も動き出す。

向かう先はもちろんバトルーナメントの受付所だ。

四人がバトルーナメント申込受付と書いてある場所に行くと、そこには大きめの机とイスに座る受付員がいた。

無表情の受付員の前に置いてあったペンを手に取り、グランドール、レイン、リフォンの三人は用紙に名前を書いていく。

グランドール・S（省略）

レイン・アクリア

リフォン・ネア

全員が一人一人筆跡の違う字で名前を書いて、それを机に出す。

夢姫はそれをじつと見ていた。

この申込書に書いたら、闘えなくなるまで参加をやめることはできないのだ。

たかが申込書と思っていた物がそういう物だと考えると、酷く憂鬱になった。

そんな夢姫の視線に気付いたのか、グランドールが心配すんなとばかりに夢姫の頭を荒く撫でた。

受付員は三人が書いたそれを無言で受け取ると、「では、参加登録を行います」と言った。

少しすると登録が終わったようで、受付員がその場から去ろうとする四人に声を掛けた。

「発表は一週間後です」

受付から聞こえた機械的な声の内容に、夢姫は僅かな不安を覚えた。

38・Foresight (後書き)

foresight 予知

今回から、人物の軽い自己紹介を。

主人公 聖 夢姫 (ひじり ゆめき)
十五歳

落ちこぼれから秀才になった女の子。本好き、活字中毒。
最近ここが異世界ということを忘れかけている。

口調がけっこう男っぽい。

人外は恋愛対象外だが最近は……

D e s c r i p t i o n (前書き)

かなり更新が遅くなってしまっって本当に、本当に申し訳ありません！

しかも、今回は本編ではなく、今作の説明などです。
興味が沸きましたら読んで頂けると嬉しいですよ。

Description

<出会った貴方(達)は人外でした。>の説明、メモなど

・世界観について

夢姫のいる世界は主に、中心に学院があり、その学院の塀の外には人型で暮らす怪獣の町が広がっている。そしてその町の塀の外には外界、つまり、怪獣が怪獣の姿のまま暮らしており、砂漠や崖、海などもある。

外界に住む怪獣は、人型でいることをよしと思わない者が多く、気軽に外界に行くとかかなり危険。

尚、人型で町や学院に住む者は、大体、夢姫のような人と同じものを食べる。

だが、外界に住む者は共食いや狩りなどをして他の怪獣などを食べたりするものがほとんど。

よって、草食系(馬系などの怪獣)などは、その怪獣の一族全員がそろって町に住むことが多い。

逆に、肉食系(ドラゴンなどの怪獣)は、強い戦闘能力と生存能力を持っているので、外界に住むことを好む。

町や学院に住む者の中には、一族から何かしらの理由で追い出された者、深い傷などを追って、仲間と一緒にには生きていけなくなつたものなどもある。

町には、学院在学中は休日しか出ることができないが、学院を卒業した者は、学院の就職援助のもと、町で住む家や就職などを決めて働く。

町の世界観としてはヨーロッパのフランスあたりの町並。

ビルなどの高い建物はなく(マンションやアパートなどは別)、広大な大地に綺麗な家が連なっているような感じ。

職業としてはOLなどの事務はなく、店や何らかの業界に入ることが多い。

ネイルサロンや、モデルなどのおしゃれな仕事もある。

・魔術などについて

基本的に怪獣なので魔術は使えませんが、術式などはある（ケトライアなどが得意分野とする）

逆に、全く使えないという怪獣もいる（フェンリルなどがそれ。グランドールもほんの若干使えるが、本当に微弱程度。レインはセイレーンなので、声だけ力があるっぽい）

17話のフェンリルの空から降ってきたあのナイフも、術式とかは使ってなくて、単に夢姫達の居る場所に向かって大量のナイフを力いっぱい空にぶん投げただけ。それが降ってきた。

つまりは、ケトライアなどが行うのは黒魔術のようなもの。

やり方はチョークかなんかで地面に魔方陣みたいなものを書いて行ったりする。

主に魔方陣でやることは“移動”“召喚”など。

移動はやっぱり瞬間移動だけど、目的地が遠いほど、魔方陣は大きく、複雑に描かなくてはならないのでかなり面倒。

召喚も同じで、大きいものほど大きく複雑に描く。

夢姫を召喚した時も、けっこう大きくて複雑（大体直径八メートルくらい）のかなり複雑な魔方陣を描いて行ったらしい。

ついでに理事長は魔方陣いらずで、指パッチンで現代で言えばアフリカ大陸まで行けるくらいの力の才能の持ち主。

でも、魔方陣みたいなものを描くよりも、ぶっちゃけ飛んで行った方が魔方陣を描く手間が省けていいし、速いんだよねーって言う者が多いので飛ぶ速度、走る速度が速い怪獣は全く使わない。

その他にも、物質と物質を組み合わせてどーのこーのなどの実験

も魔方陣で行ったりするが、これは研究部の専門。

たまに、体に魔方陣刻んで肉体強化するヤツとかもいる。

でも、体に負担がかかるので、バトルーナメント時だけとか、ある期間が過ぎれば消える、というもので、しかも、刻む時がけっこう痛かったり、間違えたら大変どころではない状態になるので、やる者はほとんどいない。

肉体強化すれば火を吐いたり、再生能力が高くなるようになるのか？ と聞かれればそもそも獣型なら火を吐けるような怪獣やらがいるし、再生能力も、人間に比べれば普段の状態でも十分高い。

・季節などについて

時間帯などは現実とほぼ変わりはないが、季節や季節は若干変わる。

冬で、ものすごい快晴なのに大雪が降ったり、雹が降ったり、霰が降ったり。

夏は夏で、天気が悪くていきなり大雨が降ったかと思えばその後の気温がなぜか下がるのではなくて上がる。

蒸し暑くて死にそうになります。

春も秋も似たようので、春雨、秋雨が降ったりやんだり、バラバラである。

・怪獣について

この世界にいる怪獣は基本的様々な種類がいるが、一番多い種類なのは合成獣、キメラ。

異種交配により産まれるキメラは、ライオンの頭に狼の体だとか、様々な部類を併せ持つ。

親によってはドラゴンにも負けなくらい強くなる場合も。

理事長もキメラで、その姿はトラウマになるほど恐ろしいという

のはグランドール&レイン談。

ちなみに、この作品では、鷲の頭と羽にライオンの体を持つグリフォンのリフォンは合成獣ではありませんが、別の生き物です。

生態系で言ってしまうえばトップに君臨しているのはドラゴン。

種類も多く、色も様々なものがある。

だが、全部の種類に共通しているのは気性が非常に荒く、性格も凶暴で残酷、好戦的で攻撃的。

鋭い牙に爪、鋼のような鱗が生えた皮膚、体を覆うほどに大きな翼。

グランドールも例外ではなく、単に理性が本能を押さえているだけで、短気ということもあるが、スイッチが入ると暴れます。

ほとんどの怪獣はドラゴンに敵わず、一息に殺されてしまう場合が多い。

学院は、共食い等を禁止しており、もしやった場合は生徒であるうと容赦なく死刑。

だが、学院外の町の外、つまり外界についてはほったらかし状態で、外界はまさに弱肉強食の世界が日々繰り広げられている。

そのドラゴンの下につくのがグリフォンやフェンリルなどの、現代で言えば狼とかのポジションの者達。

だが、ドラゴンの下につくといっても、決して弱いわけではなく、グリフォンがドラゴンを殺すという場合も充分にありえるのである。簡単に言うくと下克上。

レインなどの海洋生物などもここなのだが、海などの水中に住むため、あまり地上の生物とは関わらない。

だが、戦闘能力はけっこう高い。

恐らく、水中なら無敵の怪獣も多い。

ここまで来ると、その下につく草食動物は弱いのかと思いきや、ユニコーンのように、見た目は清楚な白馬なのに、性格はドラゴンにも勝るほど凶暴なものもあるので油断は禁物。

ケトライアのように、本性が猫の時は、獣形の時もそこまで体は大きくないので素早さや俊敏さで敵から身を守るような物もいる。

つまり、現代の生物社会とあまり変わらない。

さすがにドラゴンなどはいないが。

あと、この世界に、獣形で半身半獣などの、人の顔や体を持つ怪獣はいません。

つまり人間要素を持つのは夢姫のみ。

「でも犬の体に人間の顔みたいなのだったら怖いからいない方がいいかな……人面犬になるし」というのが夢姫の本音。

最近あんまりびびりではなくなってきた主人公。

これからどうなるかは、本人は全くわかっていない。

おまけ

ハロウィンは過ぎたけれども、キャラクター達が何を欲しがるのかをチエック！

a t??

Trick? それともTre

夢姫

無難にお菓子。

悪戯をする度胸がないというのと、昔悪戯をしてちょっと酷い目に遭ったらしい。

でもどつちかと言ったら参考書の方がほしいかな。

解説が詳しく載ってて問題数の多いやつ。

甘い者はもたれない程度になら普通に好き。

リフォン

大食いなのでお菓子。

籠いっぱいもらいたいというのが本音。だがさすがに誰も籠いっぱいはいくれない。

総合で貰った数数えれば籠いっぱいになるのに、それはいまいち満足しないらしい。

でも、悪戯もできるならしてみたいというのも少しある。

好きな菓子はマシユマロとチョコレート（ホワイトチョコ以外）

グランドル

もちろん悪戯。お菓子よりも君が欲しい、なあ？　だめか……？

がグランドル流ハロウインの決まり文句。

もちろん女限定。

腰に手を回して耳元で低い声で囁くようにして言うのがポイント。そしてこの後レインに飛び蹴りされる。

存在がエロい。

ロイヤス

好きな人にはお菓子、嫌いな人には悪戯（という名の嫌がらせ）

ハロウインは仮装もせずに窓際に優雅に読書しながら紅茶飲んでそう。

たまに窓の外からリフォンやグランドルの声を聞きつつうっす

ら笑っている。多分。
でもその数分後にリフォンが部屋に入ってきてお菓子を強請られる。

お菓子というかココアと紅茶の甘いやつなら好き。つまりは砂糖

レイン

肉食系女子はやっぱり悪戯。

というか、悪戯という名のセクハラ。

もちろん女限定。

甘い物だったらフルーツケーキが好き。

最近女の子からの扱いがエロ親父で気にしていない素振りをしていながらもけっこう気にしており、隠れて落ち込んでいる。

毎年ハロウインの季節は女子全員に警戒される。

まあ普段もだけど。

フェンリル

え？ お菓子と悪戯両方に決まってるだろ？

お菓子貰った後ににこにこしながら一歩ずつ近づいてきそう。

なぜかその笑みに生命の危機を感じるのは気のせいではない。

そこからどうやって彼を説得するかは貴方しだい。

場合によっては鬼ごっこになったりかくれんぼになったりするかもね。

好きな菓子はクッキー。

意外にも自分で作ったりもする。

あげないけどね。

ケトライア

甘い物は好きじゃないので悪戯。

存在が既にハロウイン。

悪戯と称して新しい薬品とかぶっかけて効果試したり、大丈夫、

と言いながら怪しい実験台に乗せたりしてる。

まあ、生きては返す。

でも最終的にチヨコあげたり飴あげたりするので、どっちかと言えは貰う方というよりあげる方。

大人気ない……。

でもやっぱりフードは外さない怪しすぎる猫さん。

Description (後書き)

説明というより、後半は番外編のようになったかもしれませんが。

ハロウィンといえば、ハロウィン用の小説なのですが、絶対に更新するのでもうしばらくお待ちを！

く……クリスマスまでには、間に合う、間に合わせてます。

そして、ここまで読んでくださり、本当にありがとうございます。
誤字、脱字、矛盾などがありましたら遠慮なく願いたいします。
これからも出会った貴方々をよろしく願いたいします。

Halloween 1 (前書き)

かなり遅くなりましたが、ハロウィンの小説です。
あまりにも長くなってしまったため、1と2に分けました。
本編ではないですが、どうぞお楽しみください。

「Trick or Treat?」

私、聖夢姫、純粋な日本人でございます。

ただ今、異世界トリップ中にて、毎日を満喫しております。もう正直現実逃避中であります。

人生の経験だと思っっているであります。

ですが、

「ねえ、お菓子頂戴な。それとも、悪戯がいい?」

異世界でこんなこと言われるなんて思っておりませんでしたよ私は。

ハロウィン、あるいはハロウィーンはヨーロッパを起源とする民族行事で、カトリックの諸聖人の日の前晩に行われる。

ケルト人の一年の終りは十月三十一日で、この夜は死者の霊が家族を訪ねたり、精霊や魔女が出てくると信じられていた。これらから身を守るために仮面を被り、魔除けの焚き火を焚いていた。

六百一年にローマ教皇・グレゴリウス一世が宣教師にケルト人へキリスト教改宗の策として、「ケルト人の信仰法である木の伐採は行わずに、木の真上にはキリストの神様がいてそのために木を信仰し続けなさいと広めなさい」と言ったのがいまのハロウィンになったきっかけでもある。

行事について書かれた本を暗記した結果がこれである。

「いやいやいや、こんな異世界になんてハロウィンなんてあるんで

すか？ 怪獣でしょう？ 何で怪獣がハロウィンするんですか！
そもそも怪獣って完全にハロウインの死者の霊的なモノだと思いま
すよ！ 怪獣が何でハロウインなんですか！ しかも仮装なんて！
そのままでも充分ハロウインじゃないですか！」
「ユメキ、言葉がおかしくなってる」
そう言ってくすくすと笑うのは一人の魔女。

いや、魔女の姿をしたレインだった。

絵本に出てくるような黒い服を着た魔女姿のレインは、起きたばかりの夢姫の部屋に来て早々そんなことを言ったのだ。

少し先の垂れた黒い帽子を被り、背中には同じ漆黒のマントを付けていて、フリルのついたミニスカートからは真っ白で黒く長いソックスを履いた白く、魅惑的な足が覗いている。

ウエストの辺りはリボンが何かできゅっつと締まっており、そのスタイルの良さが伺える。

胸元も、大きく開いており、そこからは零れそうなほどに大きな谷間が見えていた。

つまりはボンキュッボン。

相変わらず破壊力抜群のスタイルである。しかも顔も最高だ。

「ところでユメキ」

「え」

「なんで仮装してないの？ まさかパジャマで？ そんなっ、興奮するでしょ！？」

この性格さえ直ったら全てが完璧なのに。

曰く、この世界にもハロウィンはあるとのこと。

曰く、この学院では、全員強制仮装とのこと。（理事長の趣味）

曰く、メイドも同じ。

つまりだ、レインさんが言うには、私も仮装しろとのこと。

というか、させるとのこと。

「お菓子くれないなら、悪戯してもいいのよねえ……?」

というのが、レインさんの言い分で、その後、私がどれだけ逃げ回ったかは、想像していただきたい。

*

「……妖精？」

「ゴーストです」

今日何回も言ってきた言葉を繰り返す。

レインに追い掛け回され、私は羊か！ ならアタシは狼でいいわ！ という会話を繰り返り広げつつ、わかった、とりあえずシャツ被ってゴーストでいいじゃないか！ とレインに提案したところ、可愛くねえ格好は許さん！ と一刀両断され、レインとは対照的に、全身真っ白な服を揃えられ、これだけは！ と夢姫が懇願して、頭にヴェールのような物を被っている状態だ。

理解はしたけど納得はしてないよ、うん。でも露出が少ないだけマシ。

スカートということは納得できないが、下に長めのスパッツを穿いているからまあよしとしよう。

だが、これを妖精と間違えるのはやめてもらいたい。
そんなファンタジックなものに当てはめるな私を！

そして、そんな私の目の前にいるのは他ならぬグリフォンのリフオン君である。

現在、学院から出た、中庭の見える広い通路に居るのだが、その通路を通っている者達も、全員仮装していた。
もちろん、教師もだ。

彼も、その大層美しいご尊顔（無表情）だが、仮装だけはしっかりとやっており、ぴよこん、と絵に描かれる虫歯菌のような力チューシャ、（矢印のような）を付けていることから、おそらくは悪魔の格好だろう。

これまた黒のコートを着ていてカッコイイ。

服のセンスが超好み。

「ていうか、何でレインまで居るの……？ 今日女限定でお菓子を貰いまくるわよー！ イタズラするわよー！ ってはしゃいでたのよ」

「するわよ、しっかりね。ていうか、もうしてきたわ」

「ああ、だから広間で女の子達が泣きそうな顔してたのか」

リフォンがぼそりと呟くと、レインは「え、泣いてた！？ 泣くようなことしてないんだけどなあ……」と首を傾げていた。

恐らく、純粹で無垢な女の子達に、セクハラまがいのことを散々したのだろう。

これで悪意じゃなくて下心だけなのだから恐ろしい。

「……ていうか、ハロウィンって何するんですか、お菓子もらうだけでしょう？」

「それもあるけど、ハロウィン限定の料理とかも出て、それを広間にテーブル出して並べて皆で食べたり、パフォーマンスとかやるやつもいるし。まあ、そんなもんかな」

「あ、なら」

「いや、今年はやるわよ」

よかつた、と、何か恐ろしい事をさせられるのではないかと思っていた夢姫は安堵するが、それを、レインの何か企んでいる声が邪魔をした。

赤い唇をにい、と吊り上げた妖艶かつ美麗な顔には、ありありと悪だくみをしている表情が浮かんでいた。

リフォンもそれに気づいたらしく、関わりたくないとはかりにレインから後ずさる。

その時、聞き覚えのある声が聞こえた。

「そんな泣かないでくれよ。可愛い顔が台無しになるぜ？ ほら笑って？」

あんな人面魚のやったことなんて気にするなよ。君は十分綺麗なんだから。そんなこと気にしちゃだめだ。あの女は俺がぶん殴つとくからさ。

だから一緒にデート何てどう？」

声の聞こえた方を見れば、そこには長い金髪の縦ロールを靡かせる、女のような顔をした長身の男がいた。

そして、泣いているらしき女性を慰めつつ、そつとその腰に手を回す

「お前はぬぁにをやってるんだこの下郎がああッ！」

突然、隣にいたレインが、持っていた魔法使いの杖をその金髪の男に勢いよく投げつける。

そしてそれは見事に男の顔面に当たった。

ホームラン、夢姫は小さく呟いた。

レインはずんずんとその男に近づき、腰を曲げて呻いている男の

髪をガシツと掴む。

「何が人面魚だオラ！　そしてアンタの手の早さは感服せざるお得ない！　昔よりマシになったかと思ったら、このザマか！　全然変わってないじゃないの！　この万年発情期！　女顔！　そして女性をどさくさに紛れて連れ去ろうなんて言語道断！　男は度胸！　その度胸がないなら今すぐ去勢してくるがいいわ！　アンタの女みたいな面ならきつと男からモテるでしょうよ！」

「何でてめえがここに居るんだレイン！　どこから見えた！」

「お前がくっさい台詞吐き出した時からだよこの性犯罪者！」

レインに髪のを掴まれ、ぐいぐいと引つ張られている男の名はグランドール。

金髪の縦ロールを持つ女顔のドラゴンだ。

彼も、今日はしっかりと仮装をしていて、襟の立った裏地の赤いマントと黒いベストと同じスラリとした長い足を強調するズボン、そしてどう見ても本物にしか見えない尖った八重歯。

吸血鬼の格好をしていた。

どうやら今慰めていた女性は、レインが“悪戯”をした女生徒だったようで、その女生徒も、レインの姿が見えた瞬間どこかへ逃げて行った。

酷い嫌われようである。

だがレインは、そんなことには全く気付かず、ひたすらグランドールを殴る、叩く、蹴るを繰り返す。

「死ぬツ！　本気で死ぬツ！　マジでやめろ！　本性出すぞおい！」
「おーっほっほっほっ！　出せるもんなら出してみなさい！　その首喰いちぎってあげるわ！」

そろそろ本気で顔が青くなってきたグランドールに、レインはき

らきらと楽しそうに顔を輝かせて言う。
早くその首を喰いちぎってしまいたい！ と心の底から言っている顔で。

「……止めなくていいんですか？」

「だって怖いし」

夢姫が訊いた質問に、リフォンは無表情で淡々と答える。

それもそうだろう。こんな二人を止められる人はいないに違いない。

しばらくして、腕が痛くなった、とレインがグランドールの頭をぱつと離す。

どさつと音を立てて、グランドールは地に落ちる。

「死ぬかと思ったー……ってリフォン！ 居たなら助けるよ！」

「嫌だよ。怖いし」

ざっくりと切り捨てたりフォンにグランドールはちっ、と一回舌打ちすると、

「ユメキ、どこから見てた」

「数年前まで荒れてたって本当だったんだなあ、と。女癖が悪いのって本当なんだあ、って」

リフォンのマネをしてボソリと呟くようにして言うと、グランドールの顔が固まる。

そして、一気に顔を赤く紅潮させると、「レイイーン………？」と金色の髪を風に靡かせて振り返る。

「アタシの女を奪った罰よ！」

豊満な胸を張って、レインは言い放った。

その言葉を貴女が言うと、なぜか微妙な気分になるのはなぜ

だろう。Why?

少しの間ずーんとした空気を纏っていたグランドルだが、不意に顔を上げて、面白いことを思いついたかのような表情で夢姫に言葉投げた。

「じゃあユメキ。Trick or Treat?」

「……え?」

いきなりのグランドルの言葉に対応できず、夢姫は焦る。

まさかここで言われるとは考えていなかったのだ。

あわあわとする夢姫を見て、好都合とばかりに唇を楽しいげに歪めるグランドルはすっと夢姫と顔を同じにするようにして少し屈んだ。

「なら、さ、俺に悪戯でもされてみるか……?」

そう言って自身の唇を舐め上げた舌は赤く、夢姫の背中にぞわりとした感覚が走る。

ぜひお引き取り願いたい!

そう思って身を引こうとするも、すぐにグランドルの手が夢姫の腰に回り、グランドルの顔が夢姫の首元に近づく。

その姿は、お話に出てくる麗しい姿の吸血鬼が、若い娘の血を吸うかのようだ。

レインとリフォンに目を向けると、なぜか二人は夢姫達のいる方とは違うが、二人で全く同じ方向を向いていた。

万事休す?

動けない夢姫が、思わず目をつぶる。

が、

「うぎゃああっ！　なんだよこれっ！？」

突然グランドールは、頭から黒いレースのような網を被った。

正確には、巨大な網に覆われたとでもいおうか。

とっさに夢姫のことは守ろうとしたのだろう、網の届かない場所へと突き飛ばした。

「くっくっく……見事に引っ掛かりおったのう」

かつかつ、と、重い靴音が響いた。そして、ずるっずるっという布が擦れ合う音も。

笑い声のした方を見ると、そこにいたのは藍色のフードを深く被った一人の長身の青年。

おそらく、レインとリフォンは青年が近づいてくるのを見ていたのだろう。

少なくとも、夢姫にとって、そんな容貌をした知り合いは一人しかいない。

青年の姿を視認したようで、グランドールは威嚇音を出しそうなくらい顔を顰めた。

「てんめえ、なにしやがんだこの野郎！」

ケトライア・シャルコム。

学院有数の成績優秀者。

マッドサイエンティストな研究&実験バカ。

そんなケトライアはいつもの姿とあまり変わらず、いや、全く変わらず、藍色のフードを頭からすっぽり被っているだけだった。

まあ、その姿でも十分ハロウィンの仮装っばいのだが。

血走った目で睨みつけてくるグランドールの殺人兵器さながらの視線にケトライアは全く同様せず、むしろ慣れているかのように「気にするでない」と言った。

「気にするわー！」と叫ぶグランドールの声はどうやっても届かない。

逆に夢姫は、やっと解放されたとほつと胸をなでおろす。

「あははははっ！　ざまあないわねえ！」とレインは腹を抱えて大爆笑だ。

「あ、ケツティ、お菓子ちょうだい」

だが、そんなことは関係ないとばかりにリフォンはケトライアに菓子をせがむ。

狙われているのはグランドールなので、ケトライアはリフォンには全く害を及ぼしていないのだ。

「うむ、来ると思ってたわい」

ケトライアは予想していたかのように、ふつとフードの下で表情を緩めると、ごそそとフードを動かして手を出し、差し出してくるリフォンの手に数個の飴を落とした。

リフォンにとっては数個の飴の量が少なかったのか、少々不満そうな顔をしたが、すぐにそれを持っていた籠の中に入れた。

それを確認してから、ケトライアは、歯で噛み切って網から逃れようとするグランドールの傍へと寄る。

「無駄じゃ。その網は特別製のう。ドラゴンの炎にも耐えられるようになつとるんじゃ」

つまりは、捕獲用。

ケトライアの台詞の裏にはそんな言葉が隠れているような気がして、グランドールはひくつと口元を振るわせ、夢姫も、冗談ではないということを知っているから、何も言えない返せない。

リフォンは、漫画に出てくるような大きなペロペロキャンデーを舐めつつ、その様子を無表情でじっと見つめている。口をもごもごと動かしているのが少々滑稽であったが。

レインはレインで、ケトライアを応援しているらしく、再び網から抜け出そうとするグランドルを網の上から踏みつける。まるで女王様だ。

いや、今は魔法の格好をしているから、魔法女王様ってところか。夢姫は、我ながら面白いことを言ったと自画自賛するが、今はそんな状態ではないと、ケトライアの方を見た。

そこには、グランドルの首根っこを掴み、顔を上げさせ、にたり、と笑うケトライアの姿があった。

可哀そうなグランドルは、抵抗したくても、レインの美脚に両手のひらを思いつき踏みつけられていてできず、痛さからか若干泣きそうだった。

おいおいドラゴンがこれでいいのか？ ドラゴンって生態系で上位なんだろ？ 相手猫だろ？ と夢姫は心の中で突っ込んだが、瞬間的に、トカゲと猫の闘いというものを思い浮かべてしまって考え直した。

トカゲが猫に敵うわけないか。イグアナでもない限り。

……イグアナってトカゲの仲間だったかな？

そのうち調べよう、夢姫が自己完結させると、くっくく……とケトライアの怪しげな笑い声が響く。

「トカゲよ、お主を捕まえたのは他でもない、このケトライアさんのマジカル 実験の実験台になってもらうためぞ」

藍色のフードの下からちらりと見えたのはとがった八重歯。

手にはどうみても怪しすぎる蛍光色をしたフラスコを何本も持っている。

その使用先は、まぎれもなくグランドルだ。

そして、そんなケトライアの姿があまりにも、今言った台詞とミス

マッチしていて、あまりにも、楽しそうであったから、青ざめた顔のグランドルは動けなかった。

確かに、ケトライアは実験と研究が趣味のマッドサイエンティストの鏡だが、それに、同じ学院の生徒を使うか！？

俺、コイツになんかしたか！？ くっそ、思い出せねえ！

「なあに、死にはせんぞ。我は優秀じゃからのう」

その優秀さが怖いんだって！ あとリフォン助ける！ レインも離せ！ 手が痛てえ！ あとユメキに見せんなこんなところ！ 見る、あの同情とも哀れみとも言える顔を！

「世の中弱肉強食だって言ったのは君だよ、グランドル」

「アタシがやる手間も省けるわあ。まあ、自分でやりたいっていう気持ちはあつたけどねえ」

「猫とトカゲかあ。うん、生態系の問題だよな」

三者三様の意見を聞いて、グランドルは、唯一ケトライアと肩を並べられる白い、だが、腹の中は真っ黒である一角獣の友人のことを思い出し、人知れず助けを求めた。

Halloween 1 (後書き)

更新遅くなって申し訳ありません。本編じゃなくてすみません。
ハロウィンなどについてはWikipediaから。

全然関係ありませんが、グリフォンっていう犬の種類がいるんですね。

え？ この小説のグリフォンには全く似ておらずめちゃくちゃ可愛かったですよ。

あとグランドールはさりげなくM気質があると思います。

Halloween 2 (前書き)

超遅くなりました。

本当にごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

そして、あけましておそよぶございます。

遅すぎるにもほどがありますよね。はい。

では、遅すぎるハロウィン小説二弾目です。

ばたん、ケトライアに連行されたグランドールは、ケトライアの研究室の中に入れられ、そのドアが閉まった。

夢姫達も深追いは絶対にしない。グランドールの二の舞は踏みたくないからだ。

「これからどうするの？」

「この部屋の中に行く以外なら何でもいいや」

そんなレインとリフォンの言葉を聞いて、夢姫はうわあ、と口元を引きつかせる。

二人があまりにも興味のなさそうな、やる気のない顔をしていたからである。

「……少しは楽しそうな顔しましょうよ」

「え？ アタシは充分楽しいわよ？ あ、でも、ユメキが触らせてくれるのならもっと楽しくなるわねえー！」

じゅるり、レインがよだれを拭う音が聞こえた。

己の貞操の危機を感じて、夢姫はびくりと体を震わせて数歩後ずさる。

そして、話題を変えようと、口を開いた。

「あ、な、何か、さっきから人通りが少ないですね！ 何ですかね？」

そう、ハロウィンの祭りだというのに、人通りがあまりにも少ない。

かと言って、外にいるわけでもない。

では、生徒達の大半は、どこにいるのだろうか。

「そういえば、広間の方でパーティをやっているのよね。そこに生徒の大半が行っているのよ」

「あー……なんかそんなことがあるって言うってたなあ、グランドールが。ん……？ でもアイツ、実行委員じゃなかったかな」

「あはははっ！ 後で理事長に絞られるわねえ、不運続きでいいものだわ！ ていうか、毎年あるのにアンタは覚えてないの！？」

「パンプキンパイ美味しいよね」

「おいアタシの話聞きなさいよ驚頭」

「リフォンさん話聞いてあげましょうよ」

見事なまでにレインの言葉を見殺したリフォンは腹が減ったらしく、すりすりとお腹を擦りつつ「広間に行こう」と歩き始める。

レインはレインで自分の言葉を見殺されたことにイラついて、リフォンの後ろから威嚇音を出しており、夢姫は、そんな様子を見ていつもどおりだと、ある意味で安心した。

*

ギイイ、と鈍い音がして大きな扉が開く。

扉の表面には豪華な装飾のされていて、まるで芸術品のようだ。

そんな、人間だったら一人では決して動かせないであろう扉を、リフォンは片手で軽々と開ける。

扉の中から漏れてきた光に、夢姫は思わず目を細めた。

「わあー……」

そんな感嘆の声が出たのも仕方がないだろう。

天井に吊り下がっている輝くシャンデリア。

壁には、カボチャや蝙蝠などの、ハロウィンらしい飾り付けが施されている。

大きなテーブルの上に置いてある様々な、ハロウィンの料理。

そして、変装し、広間を歩き回りながら、楽しそうに談笑したり、食事をしたりする生徒達。

その光景に唾然とすると同時に、感動する。

日本じゃこんなことしないからなあ、と夢姫は思っ、辺りをきよるきよると見回す。

そんな夢姫の手を、リフォンが掴んで歩きだす。

レインが不満げな顔をするが、そんなのお構いなしだ。

広間の中央には、広くスペースが設けられていて、後ほど、ここでダンスをするらしい。

舞踏会か！ と夢姫が呟いたのは余談である。

だが、そんな呟きも、テーブルの上に乗っている豪華で美味しそうな料理を見た瞬間にすっぱりと忘れさられた。

それはリフォンも同じだったようで、だらーっと、その端正な顔立ちを損なわない程度によだれを垂らしつつ、小皿を取り出し、あらかじめ置いてあったフォークで、チキンとカボチャが炒めてある、これまた美味しそうな料理を取り分けようとする。

だが、

「あー！ やつと見つけた！」

いきなりこちらに向かつて、人混みの中からそんな声が上がったのだ。

そして、かつかつかつ、と靴音を鳴らしながらこちらに近づいてくる。

その靴音に気づいて、リフォン、レイン、夢姫の三人が振り向くのは同時だった。

「まったくどこ行ってたかと思えば！ そんなところろついてはった

んか！ リフォン、お前、食事運ぶ係やる！ 働けや！」

靴音の正体は燃えるような赤毛を持つ青年だった。

だが、夢姫は、そんな知らない青年の突然の登場に驚くよりも先に、

なんで、関西弁？

と、心の底から思った。

だって、怪獣でしょ？ なんで怪獣が関西弁使っているの！？

元の世界でも、関西弁を使って喋っている人を、夢姫はテレビ以外で見たことがなかった。

一方話しかけられたリフォンは、心底嫌そうな顔をして、ぱくつと一口、チキンをほうばる。

「やだ。お腹減ったから働きたくない。動きたくない。面倒くさい」
そんなリフォンの言葉に、うぬぬぬぬ！ と赤毛の青年は唸り声を上げる。

「あんなあ！ 今、お前に食えって言ったら、ずうつと食べ続けて、全く仕事しないやる！ お見通しや！ ほな、さつさと行くぞ！」

「もう食ってるけど」

「うっさいわ！」

青年は今にも噛みつかんばかりに怒鳴る。

そんな二人を夢姫の後ろから見ているレインがひよっこりと顔を出してへらりと同情した目で青年に話しかける。

「あんたも大変ねえ、こんな日に従事だなんて。アタシだって今日はシフト外したのよ？」

「……ひっじょーに言いにくいんやけど、今までバイトサボってたなあ。そのツケが今日回ってきたんや……」

ぼそぼそとした声だったが、聞き取れないほどではなかったのだから、なるほど、と夢姫は納得する。

「こちらの世界でも、そういうとばっちりはやっぱりあるのだ。」

だが、そんな会話の際にリフォンはこそこそとその場から逃げようとする。

律義にも、料理の載った皿を持って。

「やませんよ」

ドガツ！ そんな音と共に、一陣の風が夢姫とレインの前を通り過ぎた。

え？ と夢姫が振り向くと、そこには、頭にくつきりと靴跡を残し、床に倒れこんでいるリフォンの姿があった。

「え、えええええっ！？」

怪奇現象！？ と夢姫は口をあんどりと開ける。

「あら、ざまあ」

レインは少し愉快そうに言った。

「しゃあないから、お前の代わりにロイシヤスにやってもらったんや。コイツも相当お怒りやで？」

その言葉に応えるかのように、赤毛の青年の隣にいた、ミイラ男の恰好をしたユニコーンのロイシヤスがにっこりと笑った。

正直その笑みが相当怖い。

目が全く笑っていないのだ。

そこで、夢姫とレインは状況を理解する。

ロイシヤスが、思いつきり飛び蹴りをリフォンにかましたのだとさすが馬。

脚力が半端ない強さだ。

「……じゃあ、リフォンさん、グランドールさんのこと人事だと言えないじゃないですか。自分も逃げてるし」

「正当防衛だよ」

夢姫が若干震えながら言うと、むくり、と床から起きだし、相変わらずの無表情ではっぱと服についた埃を掃うリフォン。

「君の代わりに、この私が、やらされているんですよ？ 君のせいで。いいですか？ もう一回言いますよ？ 君のせいで！」

ロイシヤスは、再び蹴りを入れようと、リフォンに近づきながら言う。

赤毛の青年は、もっと言ったれロイシヤス！ とロイシヤスの後ろから叫んでいた。

「せっかくのハロウィンだというのに！」
がつん、とリフォンを床に蹴り倒す。

「恐ろしく嫌味なことをしてくれませぬ君は！」
そのままぐりぐりと踏みつける。

リフォンは抵抗をしない。

「一体、なんのマネなんでしょうねえ！？」
拳句の果てに、ぐいっとリフォンの首元を掴んで持ち上げた。

その様子に、誰も手が出せない。

ロイシヤスの体からどす黒いオーラが出ているのは気のせいだろうか。

「レインさん、君も説得してくださいよ！」

ぐるん、と男嫌いなレインならリフォンに一括してくれるだろうと振り向いたロイシヤスは、リフォンの首元を掴んでいた両手をぱつと開き、目を見開く。

どさつとリフォンが床に落ちる。

あー、やっと終わった、と呟くりフォンの声は幻聴ではないだろう。

「うへへへへ〜！ お姉ちゃん、綺麗だねえ〜アタシと遊びましょ〜？」

酔っ払いのエロ親父がそこにはいた。

いや、酔っ払い以上にタチの悪いエロ女がそこにはいた。

「よ、酔っ払ってる……！」

レインの手には、大きなワインの瓶。

レインが大きく瓶を振っているにも関わらず音がしないのは、瓶の中身を全部飲んだということなのだろう。

顔は紅潮しており、目は潤んでいる。

胸元を肌蹴させ、床にへたりこんでいるその姿はとても煽情的だが、そんな姿のレインに誰も近づかないのは、彼女の日頃の行いからだろうか。

「レインって、酒、弱いんだった」

珍獣を見るかのような目で、リフォンはレインのことを見る。

「えっへへへ〜！ 皆どうしたのお？ そんな顔しちゃってえ」
「にやあつと満面の笑みを浮かべるレインに、ロイシヤスはちっと小さく舌打ちをする。」

「誰ですかこの女に酒を渡したのは」

ロイシヤスがそんなことを言っても、周りの者達は全員素知らぬ顔をするばかりだ。

おそらく、レインが自分でワインの瓶を見つけて飲み始めたに違

いない。

「ユメキちゃあ〜ん」

甘ったるい声は夢姫の背後から聞こえた。

のしつと肩に重しがかかる。

いつのまに！ と夢姫が勢いよく横を向くと、そこには、今にもキスをせんばかりの距離に、レインの顔があった。

「ひい……！」

「ひいつてなによあ〜！ ユメキちゃ〜ん。アタシと遊びましょうよ〜！」

「あ、遊び……！？」

嫌な予感がびんびんするが、夢姫は興味本位でレインに問いかける。

そんな夢姫の問いに、レインは待っていましたとばかりに目を輝かせる。

まるで肉食獣のように。

「そう、とっても楽しい、楽しい遊びよ……？」

そう言ってレインは、

夢姫を床に押し倒した。

ここで、夢姫もやっと、レインの言っていた遊びというものを理解する。

そして、いつもながら、ここまでされるまで、レインの行動が読めない自分を心の中で嘆いた。

じゅるり、耳元でレインの唇を舐める音がする。

危険！

「え、あ、ちよ……！」

「そこまでですよ」

がしつとロイシヤスが、レインの肩を掴む。

本気で貞操の危機を覚悟した夢姫は、はあ、と安心して大きく息を吐いた。

夢姫から引き離されたレインは、そのままぐだーつと床に伸びた。

「あーっ！」

レインの姿を見た後、赤毛の青年がいきなり大声を上げた。

「あいつ、逃げやがった……！」

ギィ、と鈍い音が再び聞こえる。

扉の開く音だ。

夢姫、ロイシヤス、赤毛の青年が一斉にそちらを見れば、獣化してグリフォンとなったリフォンが、大きな扉から出て行くところだった。

「ま、待ちなさ」

ロイシヤスの言葉が途中で途切れたのは、レインがロイシヤスの足をがしつと掴んだからだ。

だが、肝心のレインは眠っている。

仕方なしに、ロイシヤスは夢姫に向かって叫んだ。

「ユメキさんっ！ 追いかけて！」

「え、あ、はい！」

びくつと体を一回震わせて、夢姫はいそいで閉まりかけていた扉に体をすべり込ませて、扉の外に出る。

リフォンを探して廊下を走る、が、あまりにも廊下が長すぎて息切れしてしまう。

とにかく息を整えようと、夢姫が歩きついた場所は中庭だった。

そこで、見たくない者を、夢姫は見てしまった。

空に昇る月を憂いを帯びた表情で見つめる一人の青年。

胡桃色の髪に両目で色の違う瞳を細めている。

その姿をじっくりと数秒見た後、夢姫は何事もなかったかのようにくるりと後ろを向いて、その場から立ち去さ、

れるわけがなかった。

「ユメキちゃんでしょ？ 出てきたら？ 出てこないなら捕まえに行くけど」

「はいここにいますよだからこっちを向いて舌舐めずりするのやめて下さい本当に怖いから」

「ふふふ、君はこんなときでもいつも通りだねえ。でも、今夜は“いつも”じゃられないようにしてあげようかな……？」

夢姫が心底苦手としている青年、フェンリルは、狼男の恰好をしていて、正直、ハリウッド俳優にも負けないくらいかっこいい。

だが、かっこいいのは外見だけなのだ。

それをよく知っている夢姫は、ドラマでも言わないような甘ったるい台詞を吐きだすフェンリルを一刀両断する。

「用事があるのであと560年後に宜しくお願いします」

「ふふつ、それとつくに君死んでるよね？ 皮肉かい？」

皮肉じゃねーよ本心だよ。

なんてことはもちろん言わない。

夢姫の心境も知らずにフェンリルは楽しげに話を続ける。

「そういえば今日ハロウィンだよねえ。君も仮装しているみたいだし、定番のあれ、やるつよ」

いやいや、お前は火葬しろ。

と本気で夢姫は言いたくなかった。

これももちろん言わないが。

「……って、定番のあれ？ どれ？」

夢姫が首を傾げると、フェンリルは準備していたかのように妖艶に笑い、顔をぐっと夢姫の方へと近づける。

「Trick or Treat……？」

「……え」

まさかこのタイミングでこれが来るとは思わなかった！ たしかに定番だけどさ！ 代名詞と言ってもいいくらいだけどさ！

服の上から探っても、夢姫はお菓子なんて持っていない。

どうしようどうしよう！ 夢姫は頭の中で必死に考える。

今この状態を脱出する方法を。この狼野郎から逃れる方法を！

こんなことならハロウインの仮装の一部とか理由をつけて護身の杖とか持ってくるんだった！

そんなことを思ったが、相手は怪獣である。

いくらそんなものを持ってても叶わないのは確かであろう。

あれこれと思考を張り巡らせている間に狼野郎ことフェンリルはどんどん近付いてくる。

ええい、もうこうなったら自棄だと、夢姫はぱっと思いついた言葉を叫んだ。

「犬より、猫が好き！」

嘘です、本当は猫より犬派です。ケトラリアさんには申し訳ないけど。

唐突に思いついて叫んでしまったが、フェンリルはその場で固まってしまう。

今の言葉が想像以上に効いたようだ。

その隙に夢姫は猛ダッシュして、再びいなくなったりフォンを探すために廊下を走りぬけた。

フェンリルは追ってこないようなので、数分ほど走った後、ゆっくりと廊下を歩いていると、人通りが多くなってきた。

仮装した従事係があちこちを急がしそうに歩いている。

大変そうだなーと他人事のように、のんびりと歩いていたのがいけなかったのだろうか。

「あ、ちよつとそこの君っ」

「今手空いてるだろ？ これ運んで！」

「え、あ、ええっ!？」

わたたと忙しく動いていた従事係の青年がぼん、と私の手に乗ってきたのはケーキの乗ったお皿。

「ちゃんと広間に運ぶんだよ！」

いやなんで私がつ!？ そんな夢姫の叫びは、どこかへ走り去ってしまった青年には届くわけもなく、夢姫はただ茫然とその場に立ち尽くすしかなかった。

でも、任されたのだからしょうがない。

何よりケーキがかわいそうだ。

ぱくり、と夢姫は皿に乗っている一口サイズのケーキを一つつまみ食いすると、広間への道を歩き始めた。

うん、うまいうまい。

広間へはそう遠くなかったらしく、人波に吞まれてるがままに歩いていけば、すぐに広間へとついた。

そういえばリフォンさんは見つかったのだろうか、搜索を途中で中断して来てしまったが、怒られたらどうしようか。

ケーキの皿を大きなテーブルに置いて、ロイシヤスやレインを探すと、その姿はすぐに見つかった。

「ロイシヤスさん、と、ケトライアさん……？」

そう、そこに居たのはレインではなく、グランドールを恐ろしい目に遭わせたらしいケトライアだった。

二人はこちらに向かってくる夢姫に気がつく、ああ、と声を出した。

「ユメキさんですか、リフォンさん、見つかりましたよ」

「まったくもって世話のかかるヤツじゃのう」

「あ、見つかったんですか」

怒られなくてよかった、と内心ほっとしながら夢姫は言葉を返した。

だが、本人であるリフォンの姿が見当たらない。

夢姫の考えていることがわかったのか、二人は楽しそうに眼を細める。

あれ、なんかデジャビュ……？

「ふむ、これから面白いことが始まるぞ」

「いや、楽しみですね」

は？ 疑問符を浮かべる夢姫。

二人が言葉を言い終わったのを見計らったかのように、広間の前方にあるステージに楽団が入ってきて、何やら準備を始めた。

それを見た他の生徒はがやがやと騒がしくなり、テーブルも何もない広間の中央に集まり始める。

「え、何が始まるんですか……？」

「ふふつ、やってみればわかりますよ」

そう言って夢姫の手を取ったロイシヤスは「貰いますよ」とケトライアに一言行って広間の中央に向けて歩き始める。

「言われなくとも見ればわかるわい」とケトライアはにやにやと笑いながら見送っていた。

「え、だから何やるんですかっ!? わけがわかんないんですけど！」

「ダンスですよ」

できます? と聞かれれば黙る。

やったことある人はあんまりいないんじゃないかな? うん、だって、あれでしょ。

ダンスパーティーで踊るやつでしょ。

いや無理でしょ。

言わずとも夢姫の言いたいことがわかったらしく、ロイシヤスは「男性側がリードしてくれますから大丈夫ですよ」と穏やかに言ってくれたので、思うほど大変ではないらしい。

やがてゆっくりとしたテンポの曲が始まると広間の中央に集まった人達が踊り始めた。

みんな慣れていているらしく、男女ともに体の動きがとてもスムーズで綺麗だ。

ダンス自体も、ロイシヤスが全部リードしてくれたので、あとは周りを見よう見まねでやってみたら以外とできた。

そして一曲目が終わり、パートナーに挨拶をすると、別のパートナーに代わってまた踊るのだが、一曲踊ったのもういいや、と思いい、中央から抜け出そうとするが、そんな夢姫の手をがしつと誰かが掴んだ。

「次は俺とだよね。ユメキちゃん」

ああああ、神様、あんたはどれだけ私が嫌いなさジーザス!

いやアーメン?

夢姫の手を掴んだのは先ほど走って逃げた狼野郎のフェンリル氏。

逃げる間もなく近くに引き寄せられ、その間に曲が始まってしまった。

一度始まってしまったからには一曲踊らなければならぬ。

それがルールだ。

渋々フェンリルの手を取って踊り始めるが、夢姫は泥水が土砂降りとなって降ってくる気分だった。

「だから犬より猫がいいんですって！ ワンコはお家に帰ってください。いや犬小屋に」

踊っている最中にも関わらず、夢姫はここぞとばかりにフェンリルに毒舌を吐きまくる。

どうせここじゃ何もできまい、という確信があったからだ。

だが、フェンリルはそれを平然と受け止める。

「いくらユメキちゃんの言葉でも、ちよつと、怒るよ……？」
でも少しは怒ったらしい。

にっこりと笑ったフェンリルを見て、生存本能がやばいつ、と告げる。

だが、突然、バンツと勢いよく広間の大きな扉が開けられる音が出て、広間にいる全員が扉の方を向いて動きを止めた

「おいそこの犬畜生」

音のした方を見ると、そこにいたのは煌びやかなドレスを着た美しい女性。

「可愛い女の子虐めてんじゃねーよ」

そう言っただけの女性は、楽団の音楽がぴたりと止んだ静寂の広間の中、茫然と見ていた生徒の中にいて、同じように茫然と見ていた夢姫と、楽しげにその方向を見ていたフェンリルの方に近づいてくると、勢いよく、

フェンリルに飛び蹴りしたのだ。

その瞬間に、女性の頭からばさりと何かが落ちる。それは、長い茶髪のウィッグ。え、と広間中の生徒達が固まった。そのままの意味で。

「グランドールさんの登場だぜ……?」

にたあ、と笑うその姿はまるで悪魔。

だが、来ている豪華でふんわりとしたドレスがそれを台無しにしている。

「リフォンさんも登場」

ぬうっとグランドールの影から出てきたのはフリルのいっぴいいた。ピンク色のドレスを着た

「リフォンさん……?」

よくよく見れば、その美少女の顔は無表情のいつものリフォンだった。

いなくなったと思っていたらこんなところにいたらしい。

「ロイヤスに、着せられた」

「ケトラリアに以下略っ！ 殺す殺す殺す」

無表情だが、殺気を体に纏わせているリフォンと、怒りで体を震わせているグランドール。

そして、きつと前を向くと、懐からマシンガンを取り出す。

「てめえら一回死ねえっ！」

ダダダダとマシンガンを乱射するグランドール。

その先はフェンリルやケトライアだ。
グランドールのそれを合図にしたかのように、リフォンも猫のよ
うにロイシヤスに襲いかかる。

そして、それを慣れていたので笑いながら見る他の生徒達。

悲鳴と、他の生徒の歓声が響き渡る。

悲鳴といっても、どこか楽しげなものだったが。

夢姫もはあ、とため息を吐いて、でも笑みを浮かべて天を仰ぐ。

そして、全員が声を揃えた。

ハッピーハロウィン！

その言葉が木霊した。

「ぐかー」

だが、一人保健室に連れて行かれ、ベッドで爆睡していたレイン
はそれを知る由もなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1098n/>

出会った貴方（達）は人外でした。

2011年4月12日00時16分発行